

# **平野横穴墓群発掘調査報告書**

**1984年3月**

**島根県斐川町教育委員会**

# **平野横穴墓群発掘調査報告書**

**1984年3月**

**島根県斐川町教育委員会**

# 序

このたび、当斐川町では、関西の大手企業である株式会社村田製作所の工場誘致に伴い、斐川町上直江の平野丘陵に所在します平野横穴墓群の発掘調査を2次にわたり実施いたしました。

周知のごとく、本町の南部に聳えます仏経山の山麓には、数多くの古墳、横穴墓が分布致しております。その一角にある平野丘陵も、例にもれず、古墳等の埋蔵文化財の存在が多数知られており、今回調査を行った平野横穴墓群もその一つに数えられます。

さて、今回の調査は、西支群の横穴墓7穴および東支群の横穴墓12穴とあわせて19穴の横穴墓を発掘調査いたしましたが、これは、当地においては、他に例を見ないほど大規模なものでありました。本調査で得ることができました多くの資料は、当地域における古墳時代後期の文化の一端を窺い知るものであり、さらには、今後の横穴墓研究において、重要な資料となり得るものと確心しております。

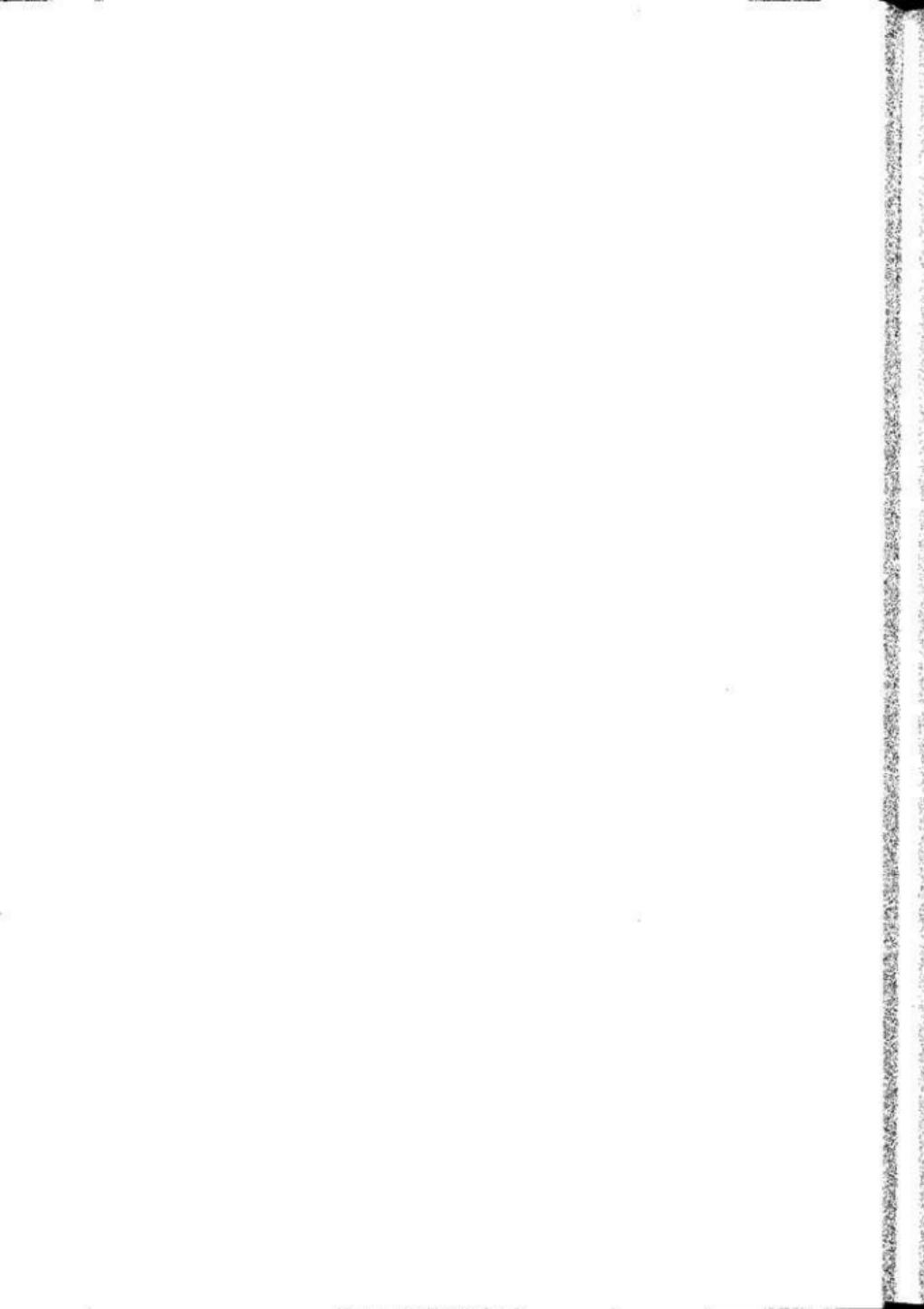
本書が広く御活用頂ければ幸いと存じます。

最後になりましたが、本調査にあたり終始御指導下さいました島根県教育委員会をはじめ関係者の皆様に衷心より厚く御礼申し上げます。

1984年3月

斐川町教育委員会

教育長 古川 喜志夫



## 例 言

1. 本書は、鎌川郡斐川町大字上直江字平野に所在する平野横穴墓群の発掘調査報告書である。なお、第1次調査は株式会社村田製作所（本社・京都府長岡京市）からの受託事業として、第2次調査は斐川町事業として、斐川町教育委員会が実施した。
2. 第1次調査は、昭和57年7月12日から昭和58年3月31日まで、第2次調査は、昭和58年9月1日から昭和58年9月18日までにわたって行った。
3. 調査体制は以下のとおりである。

調査指導 勝部 昭（島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第1係長）

西尾克己（ “ 主事）

調査員 金築 基（斐川町教育委員会社会教育課主事）

宍道年弘（ “ 嘴託）

調査補助員 桑原真治・大峰裕貴・長見康弘

今岡一三・谷沢 仁・荒木利幸

萩 雅人・原 広人・妹尾美典

事務局 多々納弘（斐川町教育委員会社会教育課長、昭和57年度）

新宮義忠（ “ 昭和58年度）

金築 基（ “ 主事）

4. 調査にあたっては村田製作所、斐川町役場開発課および地元各位の協力・援助があった。
5. 本書の執筆は金築、宍道が行い、西尾が補筆した。また、図版作製は金築、宍道、桑原が行った。なお、実測図の方針は調査時における磁北である。
6. 人骨鑑定については、鳥取大学医学部（法医学教室）井上晃孝助教授に依頼した。
7. 出土遺物は斐川町教育委員会で保管している。
8. 本書は、斐川町埋蔵文化財調査報告3と同4を合本したもので、その内容については一部改変している。

## 目 次

I 調査にいたる経緯.....	1
II 遺跡の位置と歴史的環境.....	2
III 平野遺跡群の概要.....	5
1. 平野横穴墓西支群の概要.....	6
(1) 1号横穴墓.....	6
(2) 2号横穴墓.....	10
(3) 3号横穴墓.....	12
(4) 4号横穴墓.....	14
(5) 4号横穴墓.....	16
(6) 6号横穴墓.....	18
(7) 7号横穴墓.....	20
(8) 出土遺物.....	23
(9) ま と め.....	36
(10) 出土人骨鑑定.....	37
2. 平野横穴墓東支群の概要.....	46
(1) 1号横穴墓.....	47
(2) 2号横穴墓.....	48
(3) 3号横穴墓.....	53
(4) 4号横穴墓.....	54
(5) 5号横穴墓.....	58
(6) 6号横穴墓.....	63
(7) 7号横穴墓.....	63
(8) 8号横穴墓.....	64
(9) 9号横穴墓.....	66
(10) 10号横穴墓.....	70
(11) 11号横穴墓.....	72
(12) 12号横穴墓.....	72
(13) 出土遺物.....	74
(14) ま と め.....	91

(15) 出土人骨鑑定	92
IV 小 結	99

## 挿 入 目 次

発掘作業風景（写真）	1
図1 平野遺跡と周辺の遺跡	3
図2 平野横穴墓群全体図	5
図3 西支群横穴墓配置図	7～8
図4 西支群1号横穴墓尖測図	9
図5 西支群2号横穴墓実測図	11
図6 西支群3号横穴墓実測図	13
図7 西支群4号横穴墓実測図	15
図8 西支群5号横穴墓実測図	17
図9 西支群6号横穴墓実測図	19
図10 西支群7号横穴墓尖測図	22
図11 西支群6号横穴墓人骨出土状況	38
図12 西支群7号横穴墓人骨出土状況	42
図13 東支群横穴墓配置図	46
図14 1号横穴墓実測図	49～50
図15 2号横穴墓実測図	51～52
図16 3号横穴墓実測図	55～56
図17 4号横穴墓実測図	59～60
図18 5号横穴墓実測図	61～62
図19 7号横穴墓実測図	65
図20 8号横穴墓実測図	67
図21 9号横穴墓実測図	69
図22 10号横穴墓実測図	71
図23 11号横穴墓実測図	73
図24 12号横穴墓実測図	75

図27 斐川町内横穴墓分布図	103
図25 4号横穴墓人骨・遺物出土状況	94
図26 5号横穴墓人骨・遺物出土状況	97

## 表 目 次

表1～11 西支群横穴墓出土土器観察表	25～35
表12 西支群7号横穴墓残存骨一覧	43
表13 西支群7号横穴墓出土歯式	43
表14 西支群7号横穴出土人骨血液型検査結果	44
表15～27 東支群横穴墓出土土器観察表	78～90
表28 平野横穴墓群一覧表	101
表29 斐川町横穴墓一覧表	102

## 図 版 目 次

- 1 西支群1号・2号・3号横穴墓出土遺物実測図
- 2 西支群4号横穴墓出土遺物実測図
- 3 西支群5号横穴墓出土遺物実測図
- 4 西支群5号横穴墓出土遺物実測図
- 5 西支群6号・7号横穴墓出土遺物実測図
- 6 東支群1号・2号横穴墓出土遺物実測図
- 7 東支群3号横穴墓出土遺物実測図
- 8 東支群3号・4号横穴墓出土遺物実測図
- 9 東支群4号・5号横穴墓出土遺物実測図
- 10 東支群5号・8号横穴墓出土遺物実測図
- 11 東支群9号・10号横穴墓・6号横穴墓下方出土遺物実測図
- 12 平野遺跡周辺の航空写真及び平野横穴墓西支群近景
- 13 1号横穴墓羨門閉塞状況及び前景
- 14 2号横穴墓玄室堆積土層及び前景
- 15 3号横穴墓遺構検出状況及び前部
- 16 4号横穴墓遺構検出状況及び前景
- 17 5号横穴墓羨道堆積土層及び遺物出土状況
- 18 6号横穴墓前庭堆積土層及び羨門閉塞状況
- 19 6号横穴墓人骨及び遺物出土状況
- 20 7号横穴墓羨門閉塞状況及び前景
- 21 7号横穴墓人骨出土状況及び人骨
- 22 7号横穴墓玄室加工状況
- 23 平野横穴墓東支群遠景及び平野横穴墓東支群近景
- 24 東支群1号・2号・3号横穴墓近景及び4号・5号・6号横穴墓近景
- 25 東支群7号・8号・9号横穴墓近景及び10号・11号・12号横穴墓近景
- 26 東支群1号横穴墓前景及び玄門土層堆積状況
- 27 東支群2号横穴墓前景及び玄室内土層堆積状況
- 28 東支群3号横穴墓羨門閉塞状況及び玄室内遺物出土状況
- 29 東支群4号横穴墓前景及び羨門閉塞状況

- 30 東支群 4号横穴墓玄室内正面及び玄室内人骨及び遺物出土状況
- 31 東支群 5号横穴墓前景及び羨門閉塞状況
- 32 東支群 5号横穴墓玄室内正面及び玄室内人骨及び遺物出土状況
- 33 東支群 7号横穴墓玄室内正面及び玄室内土層堆積状況
- 34 東支群 8号横穴墓羨門閉塞状況及び玄室内遺物出土状況
- 35 東支群 9号横穴墓羨門閉塞状況及び玄室内正面
- 36 東支群10号横穴墓羨門閉塞状況及び玄室内正面
- 37 東支群11号横穴墓玄室内土層堆積状況及び玄室内正面
- 38 東支群12号横穴墓羨門閉塞状況及び玄室内正面
- 39~43 西支群横穴墓出土遺物写真
- 44~49 東支群横穴墓出土遺物写真

## I. 調査にいたる経緯

昭和48年、斐川町大字上直江（平野丘陵）に株式会社住友電工が進出を予定し、用地買収を行なったものの、事情により断念せざるを得なくなった。

その後、誘致企業を探した結果、関西の大手企業である株式会社村田製作所が元住友電工予定地であった平野丘陵に進出することとなった。しかしながら、経営規模の関係上用地不足となり、昭和57年4月より追加買収が行なわれ、同年7月22日に進出の公式発表が行われた。

そして、これに伴い埋蔵文化財の有無が問題になってきた。当該地周辺には三角点古墳をはじめとする遺跡が存在していたため、島根県教育委員会に依頼し昭和56年6月2日に分布調査（調査者…文化課 松本岩雄主事）を実施した。その結果、円墳・高射砲陣地跡等が確認され、更には横穴墓が存在する可能性があったため関係者と協議のうえ、昭和57年7月12日より昭和58年3月5日まで現地調査を実施した。

その後、同年7月3日、造成工事変更に伴う発掘通知書（文化財保護法第57条の3）が提出されたが、当該地には未発掘の横穴墓が存在する可能性があったため、関係者と協議のうえ、同年9月1日より同17日まで第2次発掘調査を行った。



調査風景

## II. 遺跡の位置と歴史的環境

平野遺跡群は島根県斐川郡斐川町大字上直江字平野に所在する。この平野一帯は、山陰最大の穀倉地帯である出雲平野の東部にあたり、斐川町のはば中央部に位置している。

本遺跡群は標高40mの洪積層から成る低丘陵に存在し、北側には山陰本線と国道9号線が走り、更にその前面には築地松で著名な散村風景が展開する。一方、南側には『出雲國風土記』(733年作成)に載る出雲郡の神名火山とされる標高366mの仏經山<sup>おほのぼくら</sup>が聳えている。この平野丘陵も仏經山から派生する支丘の一つであるが、町の中央部を東へ貫通する新川庵地(1832~1940年)によって切断され、現在では独立丘陵となっている。さて、平野丘陵のある上直江地区には、平野遺跡群をはじめ、岩野原古墳(18mの円墳・箱形石棺・鉄劍2)、三角点古墳(墳丘不明・箱形石棺)、狼山遺跡、劍山横穴墓、コモゴ山横穴墓群、亀山横穴墓、狼山城跡等多くの遺跡が存在する。以下、これらの遺跡を含め、町内の古代の概要を記述する。

縄文時代から弥生時代にかけての土器を伴う遺跡は発見されていないが、平野丘陵から石鏃・石槍が、上學頭の永徳寺周辺や三絃の波知神社付近の水田より石斧が、また、羽根地区から石鏃が採集されており、沖積地に面する低丘陵一帯が居住地域になっていたことを示している。

弥生時代後期から古墳時代前期の大規模な遺跡としては、平野丘陵から西方3kmの地点にある斐伊川鉄橋遺跡が挙げられる。この遺跡は、昭和37年に行われた山陰本線の鉄橋架け替え工事中に発見されたもので、地表下7mの土層から弥生土器および土師器が多く出土している。これは仏經山北麓に広がる冲積平野一帯にも多くの聚落遺跡が地表下に埋没していることを示唆する有力な資料である。また、平野丘陵と隣接する狼山からは壺棺とみられる土師器が発見されている。さらに、それと同時期の土師器が出西沢田や平野の丘陵からも表採されているが、その遺跡の性格は詳かでない。

斐川町内の古墳・横穴墓は、南部の丘陵を中心に50数か所が知られている。なかでも、神庭・直江・出西の3地区に密集しており、この地域が古墳時代に入って本格的に開発されたことを示している。

中期に属する人形の古墳は、神庭岩船山古墳(全長57mの前方後円墳・舟形石棺)、軍原古墳(墳丘不明・長持形石棺・長刀4、勾玉2、菅毛18、櫛6、クモ貝製貝輪2、鉄鎌若干)、小丸子山古墳(径35mの円墳・礎床・直刀)があり、いずれも斐川町東部(奈良時代の健部郷に当る)に所在し、當時この地域を支配した強大な首長が台頭したことを物語るものである。後期の大形古墳としては、平野丘陵の東南約2kmの地点に所在する出西丸子古墳(墳丘不明・全長7mの横穴式石室・子持須恵器)がある。この石室は玄室の奥

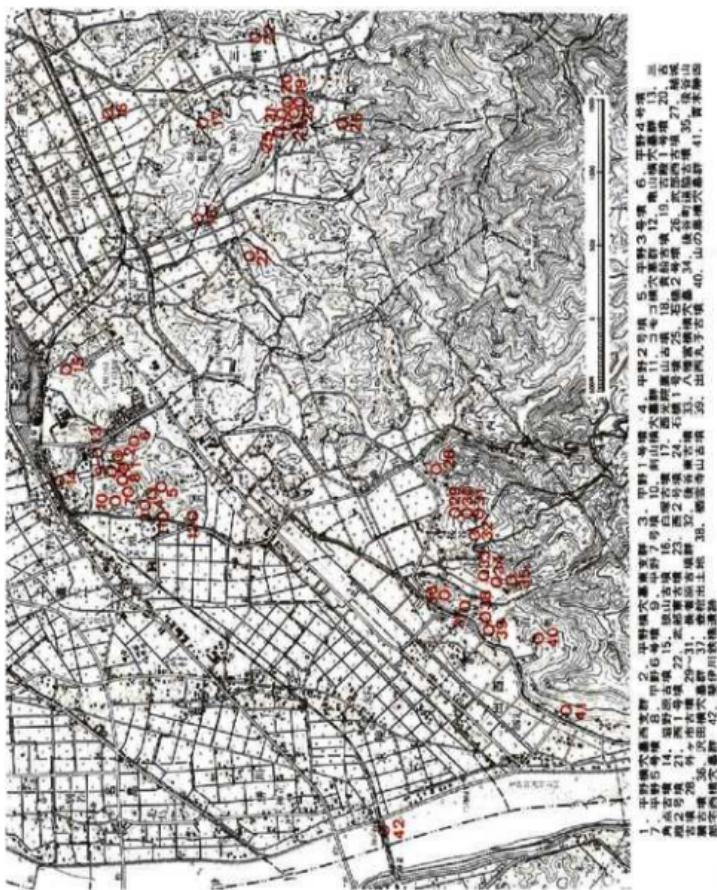


図1 平野遺跡と周辺の遺跡

壁、天井石が各1枚、側壁が数枚の切石で構成されたいわゆる石棺式石室と呼ばれるものに属する。また、玄室と羨道との境界にある閉塞石の表面には、穴道湖周辺部で5例発見されている「什」状の彫刻が施されており、それらの古墳との関連が注目される。さらに小形で石棺式石室の形態をとる建部西古墳、出西後谷古墳、舞雲寺山古墳もこの地域を代表する後期古墳といえよう。

一方、横穴墓は13か所で確認されている。現在判明している限り、その分布には偏りが認められ、仏經山南麓の斐伊川流域と出西丸子古墳の周辺および本遺跡群の所在する上直江一帯に集中している。大倉横穴墓群（6穴・家形・須恵器）、御射山横穴墓群（3穴・カマボコ形・直刀・刀子・鉄鏃・須恵器）、平野東横穴墓群（12穴・カマボコ形・テント形・勾玉・金環・刀子・須恵器・土師器）、平野西横穴墓群（17穴・カマボコ形・金環・馬具・直刀・刀子・鉄鏃・須恵器・土師器）、劍山横穴墓群（2穴・須恵器）、コモゴ山横穴墓（1穴・家形）、亀山横穴墓（1穴・須恵器）、沢田横穴墓（1穴・須恵器）、八幡宮横穴墓（1穴・丸天井・須恵器）、青木勝四郎宅西横穴墓群（2穴）、海の平横穴墓（3穴）、岩海横穴墓群（4穴・家形）、墓田横穴墓群（4穴）。以上の横穴墓の玄室は家形、カマボコ形、テント形と様々な形態を呈している。このことは、斐伊川をはさんで西側の神戸川流域には妻入整正家形が密集していると好対照をなしており、同じ出雲平野にも地域色をみることができる。しかし、羨道と玄室との関係は、出雲西部に多い妻入り形式のものが圧倒的である。時期は山陰須恵器編年のIV期初めに該当するものが大半であり、7世紀前半に作られたものと推定される。この様に、斐伊川町の古墳文化は後期後半に至って一時に開花したといえるが、極めて短期間のものであった。

律令時代には、平野一帯は、出雲郡漆治郷に属し、出西に置かれた出雲郡家の所在した出雲郷の東側に隣接していた。奈良時代の史料として有名な『正倉院文書』の「天平十一年出雲國賦給歷名帳」（739年）によると、同郷に深江里・工田里・犬上里の三つの里名が存在していたが、上直江がどの里に当るかは定かでない。同帳によれば、漆治郷にはさまざまな氏を名のる30人の戸主が記載されており、複雑な氏構成であったことが窺える。また、臣・首・君の姓をもつ者と部のみの者とに分かれた身分構成が認められ、8世紀の村落構造を知る上で手振りとなるであろう。

しかし、その後の平安時代前後の史料は全く存在せず、文永8年（1271）の『千家文書』に漆治郷の記事が現われるまでは、空白の時代であった。

### III. 平野横穴墓群の概要

平野横穴墓群は今回の発掘調査で始めて明らかとなった遺跡である。横穴墓は平野丘陵の内部に存在する標高7~15m間の斜面に立地し、南向きの谷を挟んで東西に位置する。調査を行ったのは、西側斜面において7穴、東側斜面において12穴である。以下、便宜上西側斜面に存在する横穴墓の一群を西支群、東側斜面に存在する横穴墓の一群を東支群と呼称し、両支群の各横穴墓の概要を記すこととする。



図1 平野横穴墓群全体図

## 1. 平野横穴墓西支群の概要

西支群は、馬蹄形の谷が南へ開いた起伏の少ない西側斜面に立地し、調査した7穴は、いずれも標高7~12mの比較的緩傾斜面に穿たれている。横穴墓は南端のものから順次1号横穴墓、2号横穴墓とし、北端のものを7号横穴墓と呼ぶこととする。この西支群において、南限は1号横穴墓であるが、北限は未調査である。しかし、西壁断面において6号横穴墓と7号横穴墓の間に2穴、7号横穴墓の北側に8穴を確認できる。従って、西支群は17穴前後の横穴墓で構成されているといえよう。

### (1) 1号横穴墓

本横穴墓は、西支群の中では最も南側に位置し、東向きに開口している。羨門部分の標高は7.5mで、今回調査した7穴の横穴墓の中では、最も低いところにある。表土を剥いだ時点で、玄室の大井が丸く陥没し、前庭の一部も擾乱されていることを確認した。

玄室の平面プランは、奥行き228cm、横幅は奥行き付近で160cm、入口付辺で154cmを測り、中央でやや膨張のある隅丸長方形を呈する。奥壁は100cmまでは外傾するが、側壁は140cmまでは内傾してたちあがる。天井の形態は崩壊しているため明らかでない。玄門の形態は両袖ながら左右対象ではなく、右側前壁がやや長くのびている。床面は入口付辺でU字形に掘られているが、本来はここに段がつき、玄室と羨道との境界になると思われる。

羨道は長さ140cm、幅は玄室の入口で90cm、羨門で80cmを測り、玄室に近づくにつれて僅かながら広がる形状を呈する。大井は大半が崩壊しているが、比較的保存状態の良い部分の高さは80cmを測るので、それに近い数値を示すものであろう。羨門は単純構造を呈し、閉塞施設は認められない。

前庭は長さ210cmと比較的短かく、幅は80~132cmを測り、壁は外傾する。前庭入口部分で高い段をもつ。

堆積した土層は、前庭部分については黄色真砂土の上に黒色土層が整然と堆積していた。羨道から玄室にかけては、有機質を含む白黄色土層が床面にみられた以外はすべて天井壁及び側壁の地山崩壊土で覆われていた。

検出された遺物は極く少量で、次のとおりである。

玄室	須恵器	环1
前庭	須恵器	幾片少數

玄室では环が唯一の遺物である。环は蓋环の环部で、奥壁寄りに伏せた状態で置かれていた。环の底部外面はヘラ切りの後、荒いナデ調整を施している。たちあがりは低く、小

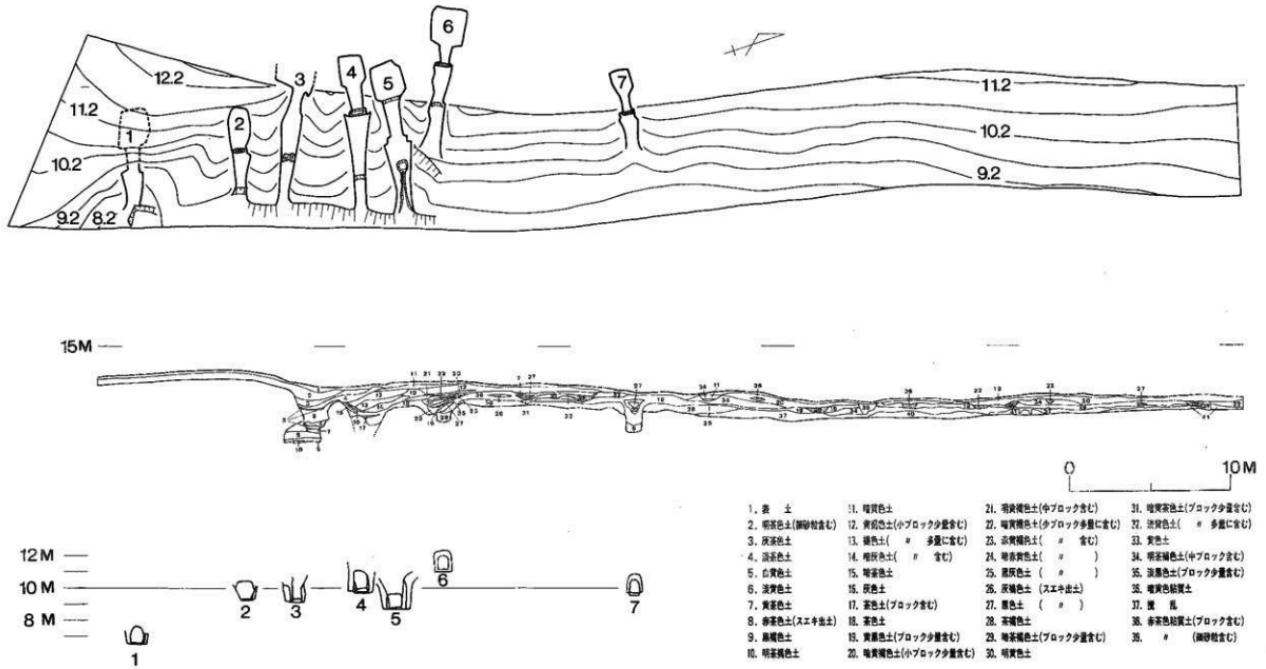


図3 西支群横穴墓配置図

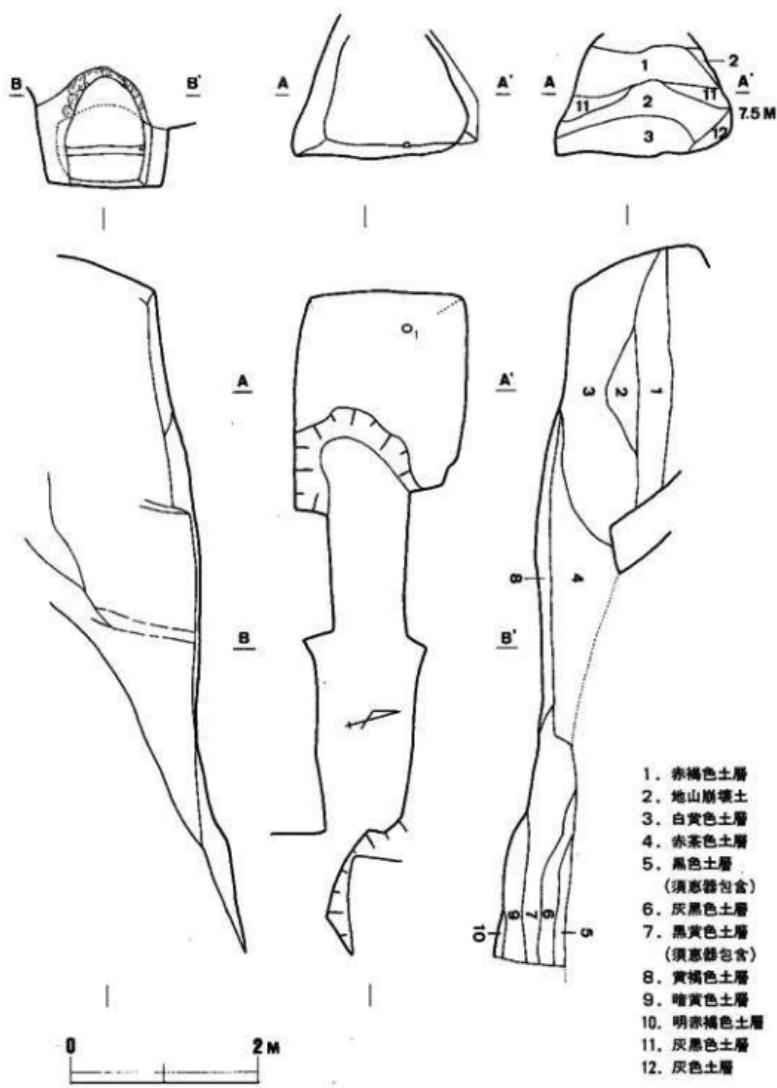


図4 西支群1号横穴墓実測図

形品の割にはやや厚みがある。この形態のものは、本横穴墓群の中では比較的多く出土している。

前庭出土の甕片は、小破片で時期判定の資料になり得るものではなかった。

## (2) 2号横穴墓

本横穴墓は東向きに開口し、羨門部分の標高は10mとなる。南側に位置する1号横穴墓とは、間に突起伏のたかまりをはさんで約5mの間隔がある。横穴墓の上面を検出した時点では、黒色土層内に黄色土層がレンズ状に混入し、既に横穴墓が崩壊したか、あるいは荒されている様子であった。

玄室は盗掘坑が多く旧状を保っていないが復元すると、平面プランは、奥行き186cm、横幅は奥壁付近で114cm、入口付近で120cmを測り、縦長方形を呈するものであろう。奥壁は、湾曲しているが側壁は崩壊しているので、天井の高さは明らかでない。また、盗掘坑は、玄室の南壁に2坑、北壁に1坑、北東隅に1坑が掘り込まれている。

羨道の長さは104cmを測る。横幅は側壁の地山が軟弱で既に崩壊していたり、若干の掘り過ぎのため不整形となっているが、比較的旧状を保っているところでは60cmの幅がある。側壁の高さ及び天井の形態は不明である。羨門は単純構造で床面には閉塞用の板材が嵌め込んだと推定される横溝が検出された。

前庭は長さ212cm、幅は58~88cmを測り、壁は外傾する。前庭入口部分で低い段をもつ。

堆積した土層をみると、玄室から前庭にかけて淡黄色土層、灰黄色土層、暗黄色土層が整然と堆積し、その上に天井壁崩壊土が乗っていた。更に、黒色土層が堆積し、その中から須恵器が數片出土した。

検出された遺物は次のとおりである。

羨道	須恵器	甕片少數
前庭	須恵器	蓋1 环1 高环1 甕片少數

前庭出土の蓋は口径12.5cm、高さ5cm、環は底部を欠くが、口径11.8cmを測り、いずれも比較的大形品に属するものである。高环も比較的大形とみられるが、口縁部と脚部を大きく欠いている。羨道及び前庭出土の甕片は小破片で、2~3片である。

以上、検出された遺物は堆積土層からのもので、本横穴墓の築造時期と一致させるわけにはいかないであろう。

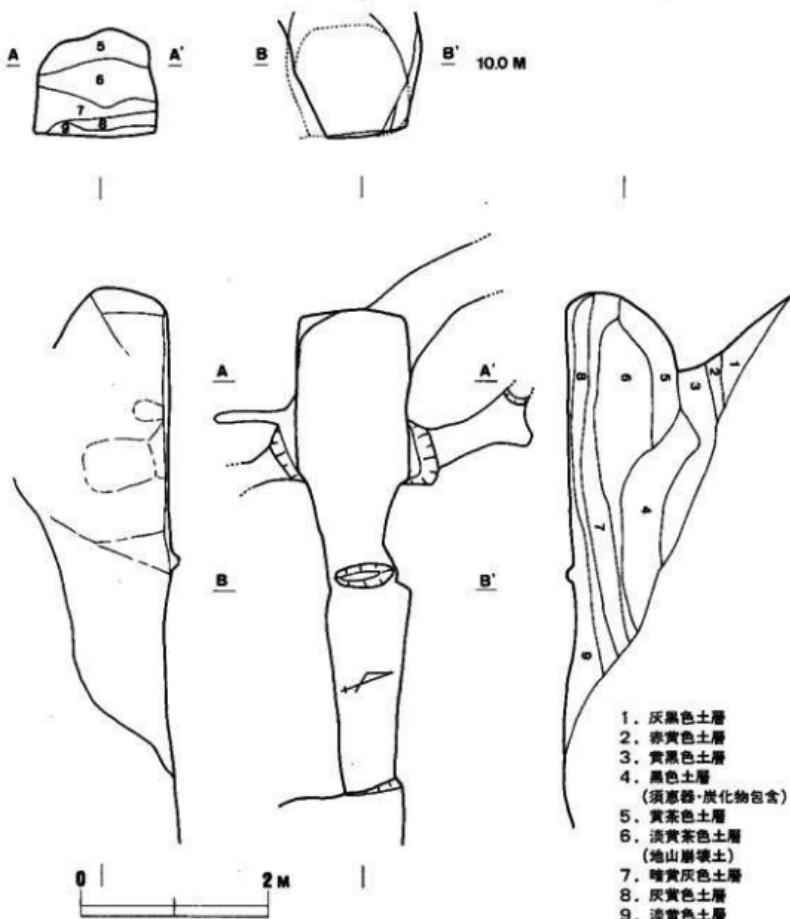


図5 西支群2号横穴墓実測図

### (3) 3号横穴墓

本横穴墓は2号横穴墓の北側に隣接し、東南東に開口している。羨門部分の標高は9.5mである。玄室と羨道は既に崩壊しており、調査は玄室の入口までとした。これは、玄室が調査区域外であった事も一つの原因ではあるが、これ以上掘り進むと天井壁崩壊土と軟弱な地山（真砂土）による崩壊等の危険があつたため調査を断念したわけである。

調査することのできた玄室入口も、南側が盗掘と思われる穴で大きく乱れており、旧状を保ってはいないのであるが、あえて横幅を推定すると214cm前後になる。側壁及び、天井壁の高さは不明である。

羨道は長さ108cm、幅は玄室の入口で84cm、羨門で74cmを測るが、これも原形を保つてはいないので形状を判断することはできない。天井は崩壊しているが、側壁たちあがり約80cm、羨門の高さが約98cmとなるため、天井の高さはほぼそれに近い数値になるものと思われる。羨門の床面には閉塞用の板材が嵌め込まれていたと思われる横溝が穿っている。羨門構造は、南側壁に少しあクセントがあるものの、盗掘坑の影響とも考えられ判然としない。

前庭は長さ574cm、幅68~114cmを測り、非常に細長く、入口付近でラッパ状に聞く形状を呈する。床面は羨門から274cmのところで、落ち込む浅い穴が2個検出されたが、用途は不明である。壁は低く外傾する。

堆積した土層についてみると、前庭から羨道にかけて一様に明茶褐色土層が堆積し、その後、前庭では白茶色土層、黄褐色土層の順に、羨道では天井壁崩壊後に黒褐色土層が堆積したものと考えられる。上層から多くの遺物が出土し、とくに黑色土層からは須恵器壺片が集中して出土した。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	須恵器	壺片少數
前庭	須恵器	蓋2 环5 高环1 提瓶1 壺2 横瓶1

玄室出土の壺片は1片で、赤茶色土層からのものである。

前庭出土の蓋は口径13cm前後のものである。环は口径8.6~9.6cmと小形品に属するものである。高环は脚部の底径8.9cmと大きいものである。これらは堆積土層から出土したものであるが散乱した状態で出土した。また黒色土層から集中的に壺片が出土した。

壺は復元すると2個体分となるが、胴部下半は欠損している。とくに底部にあたる破片が1片もなかった。このことは、須恵器壺を用いた何らかの墓前祭祀が執り行われたことを示すものであろうか。

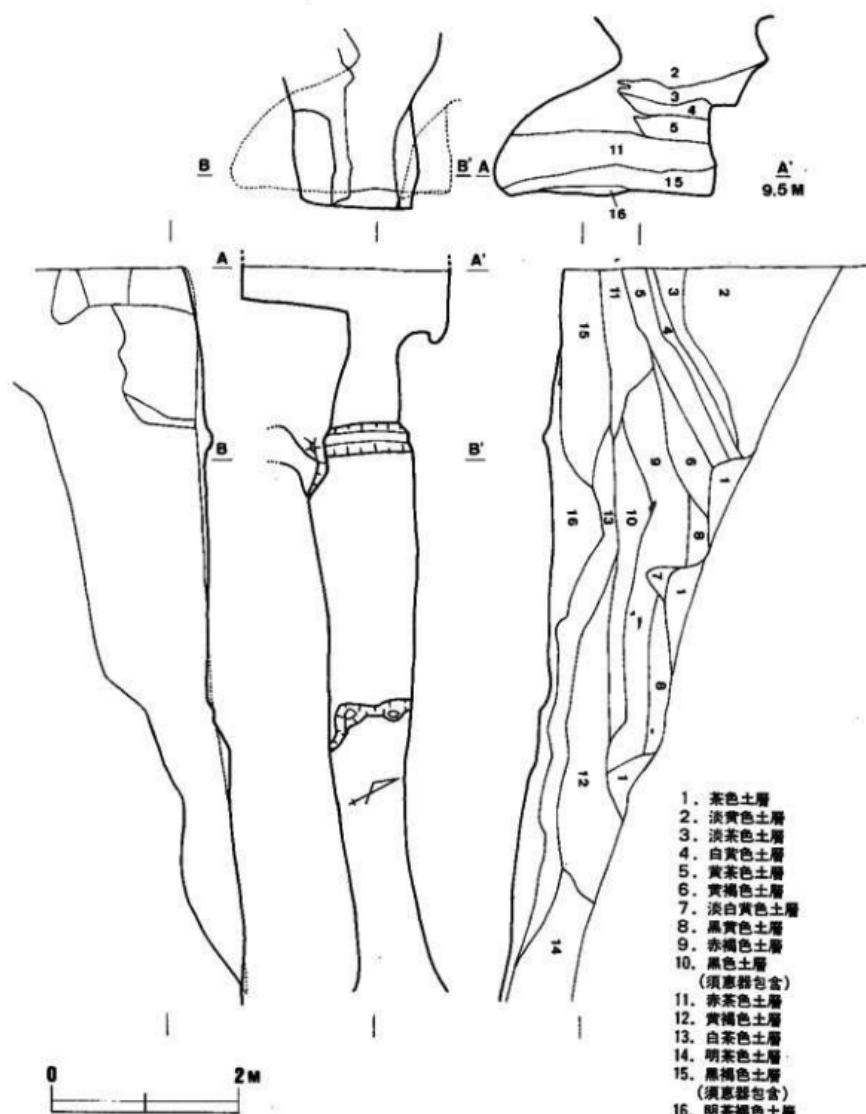


図6 西支群3号横穴墓実測図

横瓶は胸部の一方を欠き、出土状況からみると甕と同様な使われ方をしているものと考えられる。

#### (4) 4号横穴墓

本横穴墓は3号横穴墓の北側に隣接し、東向きに開口している。羨門部分の標高は10mである。玄室と羨道の天井は既に崩壊しており、調査中にも頻繁に落盤があった。そのため、本来の調査を断念し、危険防止のため調査区域外にもかかわらず、玄室上部の表土から一気に掘り下げる格好となった。

玄室の平面プランは、奥行き334cm、横幅は奥壁付近で148cm、入口付近で136cmを測り、隅丸長方形を呈する。天井の形態は不明であるが、高さは奥壁でやや外傾して134cmまで、側壁でやや内傾して120cmまでたちあがるため、それに近い数値と思われる。床面にみられる三角形の穴は後世の掘乱であろう。玄室入口は両袖式となっている。

羨道は長さ158cm、幅は玄室の入口で98cm、羨門で68cmを側り、玄室に近づくにつれて広がる形状を呈する。天井は崩壊しているが壁の一部が高さ80cmほど残っているのでその付近で天井に至るものと思われる。羨門は二重構造を呈し、羨道側の床面に閉塞用の板材を嵌め込んだものと思われる横溝が穿ってある。

前庭は長さ116cm、幅は62~158cmを測り、羨門付近でラッパ状に大きく広がる形状を呈する。壁は外傾し、床面は羨門から424cmのところで低い段を有する。

堆積した土層をみると、前庭から玄室にかけて淡黄褐色土層が薄く堆積した上に、前庭では淡黄系色土層、茶色土層が堆積し、さらにその上に遺物を多く含む黒色土層が乗っている。一方玄室では、天井壁の崩壊土で全面が覆われていた。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	鉄製品	鉄錠1
須恵器	蓋2 杯2 壺1 提瓶1	
前庭	須恵器	蓋1 杯2 壺1 甕2

玄室出土の遺物はすべて、玄室と羨道を結ぶ中軸線より北側の床面直上からのものである。蓋は奥壁に接し、入れ子式に伏せた状態で出土した。杯は奥壁と前壁の中間に上向きに置かれたものと、奥壁際に伏せたものとがある。杯は口径11.1~11.5cm、蓋は12.5~13.5cmと大形品に属する。

提瓶は杯と蓋の中程に口縁部を南に向け横転した状態で出土し、壺は左前壁際で口縁部を玄室入口に向け横転した状態で出土した。

鉄錠は柄のみ現存し、提瓶の後ろに先端を南に向けて置かれていた。

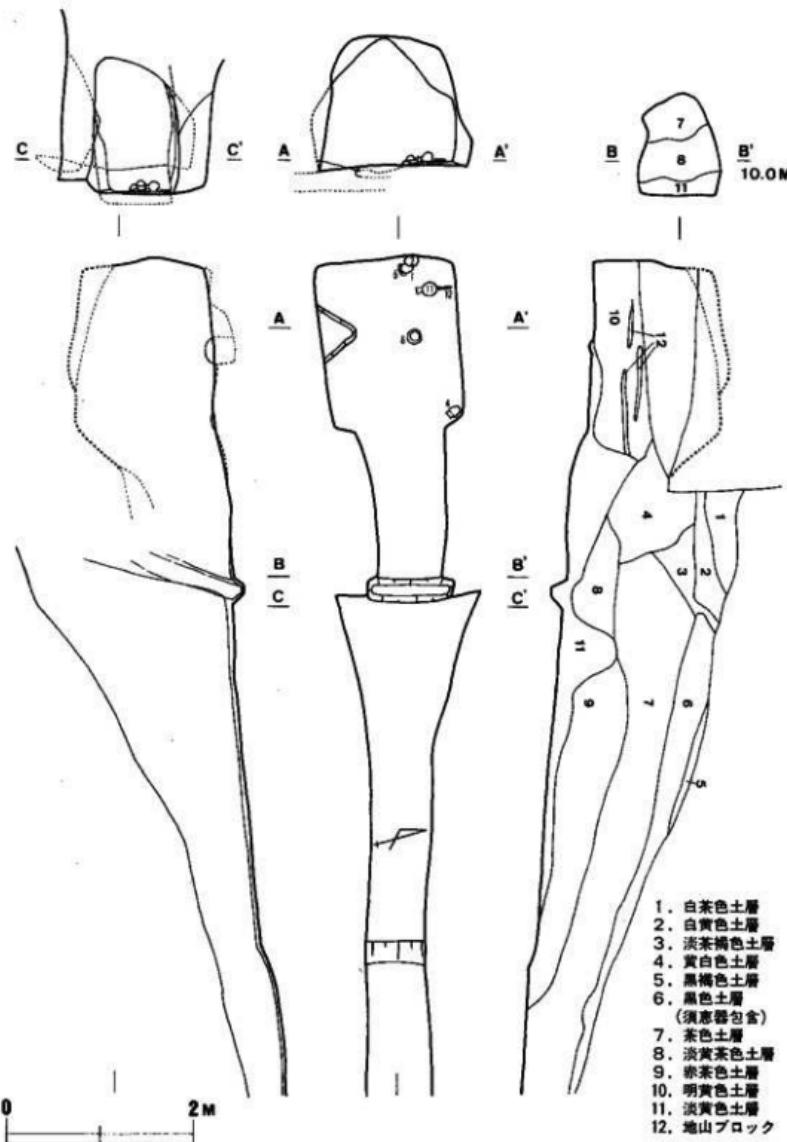


図7 西支群4号横穴塞実測図

前庭出土の蓋と坏はいずれも小破片で復元不可能なものである。尾は底部のみ、壺は口縁部のみのものと、頸部のみのものである。これらは主に黒色土層から出土した。

#### (5) 5号横穴墓

本横穴墓は4号横穴墓の北側、僅か60cmのところに位置し、東向きに開口し、主軸も4号横穴墓とはほぼ平行している。羨門部分の標高は9.5mである。3号・4号横穴墓同様、玄室及び羨道は既に崩壊しており、調査中にも頻繁に落盤があった。従って、危険防止のため調査方法の変更を余儀なくされ、充分な調査を行うことはできなかった。

玄室の平面プランは、奥行き240cm、横幅は奥壁付近で174cm、入口付近で190cmを測り、入口部分を底辺とする隅丸のやや台形状を呈する。天井は崩壊し、奥壁及び側壁も至る所が剥離しているために高さは不明である。床面は羨道より若干高く造られている。

羨道は長さ238cm、幅は玄室の入口で118cm、羨門で70cmを測り、玄室に近づくに連れて徐々に広がる形状を呈する。羨道の長さと幅からみて、本支群の中では、最も大きい造りであることがわかる。高さは天井壁と側壁の崩壊のため計測不可能である。羨門は二重構造を呈し、しっかりした構造であるが、閉塞等の施設は検出されなかった。

前庭は長さ488cm、高さ78~162cmを測り、非常に長く、羨門側でラッパ状に開く形状を呈する。壁は外傾している。床面には羨門から180cmの位置に径70cm、深さ12cmの円形状の窪みと、その窪みから前庭入口に向けて、幅40cm前後、深さ5~10cmの細長い溝状遺構が検出された。この施設は排水溝と考えられる。

堆積した土層についてみると、前庭では明茶色土層上に黒茶色土層と遺物包含層の黒色土層が整然とした堆積を示している。羨道では、天井壁の崩壊土のために複雑な堆積となっている。玄室は天井壁が少しずつ剥離し、徐々に堆積していったものと思われる。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	鉄製品	直刀1	馬具1
	須恵器	蓋6	坏8
		小形高坏2	長頸壺1
前庭	須恵器	蓋3	高坏1
		提瓶1	甕片少數

本横穴墓は、遺物の質、量ともに豊富で重要ではあるが、前述したように調査中にも落盤があり、遺物の出土位置等を充分に把握することはできなかった。

玄室からは、須恵器の蓋・坏合計14個体が玄室中央部から奥壁寄りで出土している。蓋は、口径12.2~13.4cmの大形のものと、11.2~9.9cmの比較的小形のものに分れる。これらはすべて天井部外面をヘラ切りの後不定方向の荒い指ナメ調整をしており、技法上の大きな変化はない。坏は口径10.6~8.1cmの比較的小形のもので、技法の変化も見られ

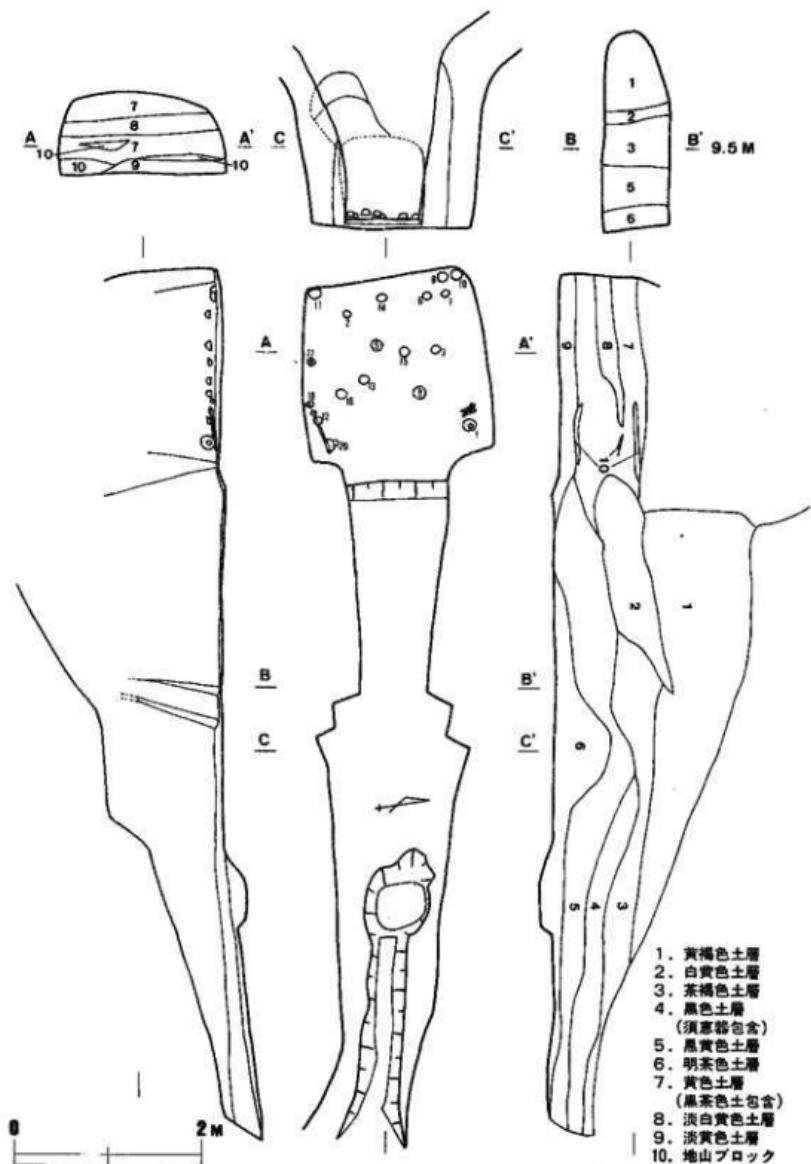


図8 西支群5号横穴墓実測図

ない。

小形高壺は玄室の右側から2個体が出土している。奥壁寄りの17が倒立し、18は横転した状態であった。

長頸壺は右前壁近くから口縁部を内側に向け横転した状態で出土し、平瓶は逆に左前壁近くより正立状態で出土している。

鉄製品としては、直刀と馬具がある。直刀は玄室の右前壁寄りで、切先を玄室入口に向かってほぼ東西に置かれている。馬具は左側壁寄りで轡がN字形に銹着した状態で出土した。

この直刀と長頸壺、馬具と平瓶は出土状況から見て、セット関係になるものと思われる。

前庭からは、須恵器蓋・高壺・提瓶・壺が破片で出土している。これらは、黒色土層からのものが大半である。土師質土器も黒色土層より出土しており、(図版4-2)は底部に糸切痕をもつ。

#### (6) 6号横穴墓

本横穴墓は5号横穴墓の北側上方約2mに位置し、東南東に開口している。羨門部分の標高は11.5mであり、西支群の調査した中では最高所にあたる。玄室の保存状態は比較的良好く、奥壁付近の天井壁が一部崩壊しているだけである。

玄室の平面プランは、奥行き338cm、横幅は奥壁付近で208cm、入口付近で182cmを測り両丸でやや縱長の長方形形状を呈する。奥壁は140cmまでは、やや内傾してたちあがり、側壁は内湾して丸い天井に至る。天井の形態は、いわゆるカマボコ形を呈する。床面は壁周辺に浅い溝が断続的にではあるが巡っており、排水溝の役割を果たしていたものと思われる。玄室内でそれが残存しているものは、西支群の調査した中では本横穴墓のみである。床面中央部に多少の凹凸があるのは、玄室がかなり長い期間空洞であったため、風化・浸水の影響のためと考えられる。

羨道は長さ122cm、幅は玄室の入口で72cm、羨門で62cmを測り、長方形を呈する。壁は60cm前後までやや内傾してたちあがり、天井はドーム状を呈し、最高部で高さ86cmを測る。

羨門には、閉塞用の板材を嵌め込んだと思われる横溝が穿ってあり、深さ8cmを測る。前庭は全長550cmを測るが、羨門から246cmのところで約60cmの高い段をもつ。壁は外傾している。床面は、前庭入口から玄室に向ってやや急な上り勾配となる。

前庭では茶褐色土層、淡黄褐色土層、黒色土層が整然とした堆積を示していた。羨道から玄室にかけては、黒色土層が均等に広がり、その上に天井壁崩壊土が堆積していた。

玄室の奥壁には壁面を丁寧に掘削調整した工具の痕跡が残っている。奥壁の南寄りは横

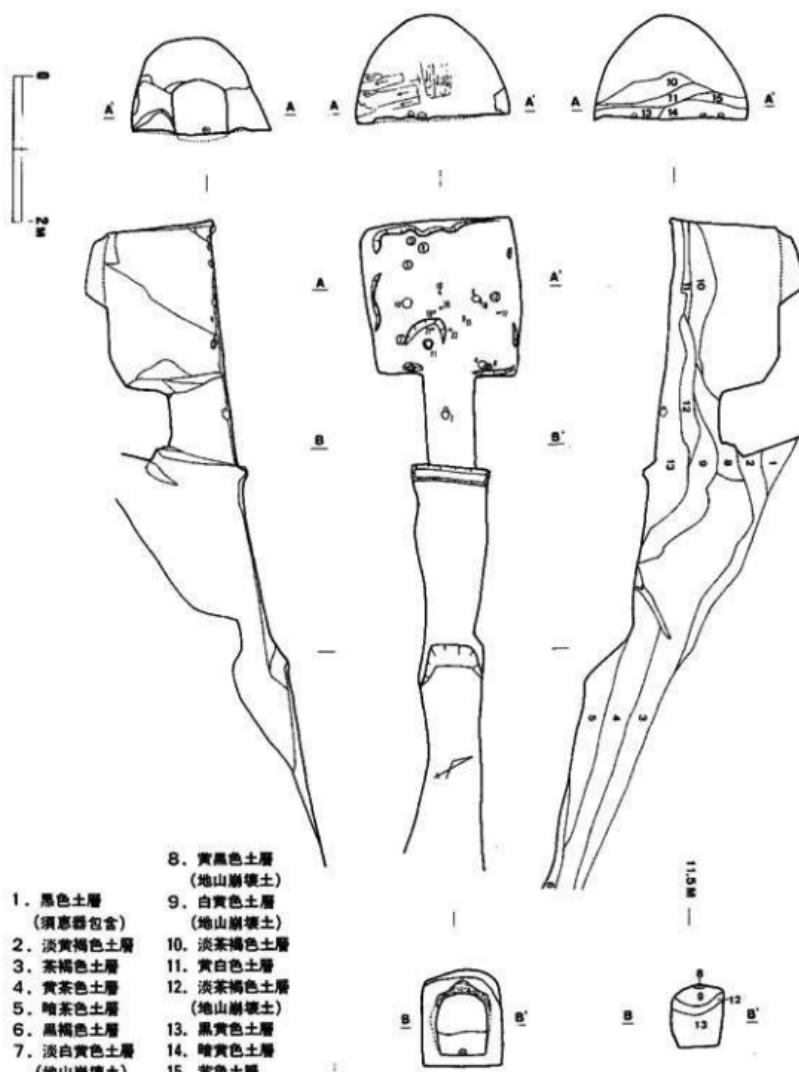


图9 西支群6号横穴墓实测图

方向、中央部は上から下への方向に削りが認められる。側壁、前壁は削りが浅く、剥離しているところもあるため判然としなかった。掘削調整の工具は、12~18cmのノミ状のものを使用したと考えられる。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	銅製品	銅芯金貼耳環 4
	鉄製品	刀子 4
	須恵器	蓋 5 坯 5
羨道	須恵器	広口壺 1
前庭	須恵器	蓋 1 風 1 小壺 1

玄室からは、蓋、壺が 5 個体ずつ出土している。蓋は口径 11.8~13cm、壺は 9.6~11.1cm で技法に違いは見られない。出土状況から蓋と壺それぞれ 4 と 8、2 と 11、5 と 10、3 と 9、6 と 12 の 5 組がセットになるものと思われる。

銅製品としては、玄室中央部から銅芯で金が若干残る耳環 4 個体が出土している。

鉄製品は刀子 4 振が玄室の中央部から左側壁寄りに出土しているが、いずれも破損している。

羨道からは、中央部の床面より広口壺が口縁部を玄室に向けて出土している。

前庭からは黒色土層と黄黑色土層より蓋、風と小壺が破片で出土している。

#### (7) 7 号横穴墓

本横穴墓は 6 号横穴墓の北側約 8.6m のところに位置し、東向きに開口している。羨門部分の標高は 10m である。玄室の保存状態は非常に良い。床面には 7cm 前後の土が堆積し人骨も遺存していた。

玄室の平面プランは、奥行き 160cm、横幅は奥壁付近で 112cm、入口付近で 104cm を測り長方形を呈するが、南側壁の入口付近が内側に入り込んでいるため、あたかも片袖式を思わせる造りである。奥壁は約 26cm まではやや外傾し、天井に近づくにつれて内湾する。側壁は 70cm 前後まではやや内傾し、九天井に至る。奥壁付近の高さは 58cm、入口付近の高さは 92cm を測り、奥に向って次第に低くなる形状を呈する。

羨道は長さ 96cm、幅は玄室の入口で 66cm、羨門で 58cm を測り、長方形を呈する。壁は 40cm 前後までは内傾気味にたちあがり、丸い天井に至る。高さは玄室側で 69cm、羨門側で 80cm を測り、奥壁に向ってやや低くなっている。羨門には閉塞用の板材を嵌め込んだと思われる横溝が穿ってあり、深さ 9cm を測る。

前庭は長さ 230cm、幅は 76~94cm を測り、比較的細く短かいものといえよう。床面は

羨門付近で外にくびれ、前庭入口直前まで次第に細くなり、入口部分で広がっている。

土層は、前庭から玄室にかけて整然と堆積している。羨門上の淡黄色土層は天井壁の一部が崩壊したものと考えられる。赤褐色土層は前庭から玄室にかけて堆積し、玄室内では有機質を多く含んだ土層となる。

玄室の奥壁、南北側壁、前壁には掘削調整の痕跡が認められた。奥壁の天井付近は右上から左下へ、床面付近は上から下へ削られている。北側壁では中央から奥壁に向けて、右から左の横方向に、南側壁では逆に左から右への横方向に削られている。前壁では、天井から床面に向けて曲線的に削られている。南・北側壁の奥壁に近い壁が奥壁によって抉られていた。これは前壁同様であったことから、南側壁・北側壁・奥壁・入口側の壁の順で削られていることがわかる。

掘削調整の工具痕跡の幅は7~12cmであり、削り面がU字状にくぼんでいた。これは、6号横穴墓の工具痕跡幅が12~18cmであることから、横穴墓の規模の違いにより、工具の使い分けをしたのかもしれないと考えられる。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	須恵器	蓋1 环1
前庭	須恵器	蓋1

玄室の蓋と环は奥壁際に伏せた状態で併置され、頭蓋骨の位置からみて枕の役割をしていたものと考えられる。蓋・环ともに小形品で、セットになるものと思われる。これ以外に副葬品はなかった。

前庭では輪状つまみを有する蓋1片が黒色土層から出土した。

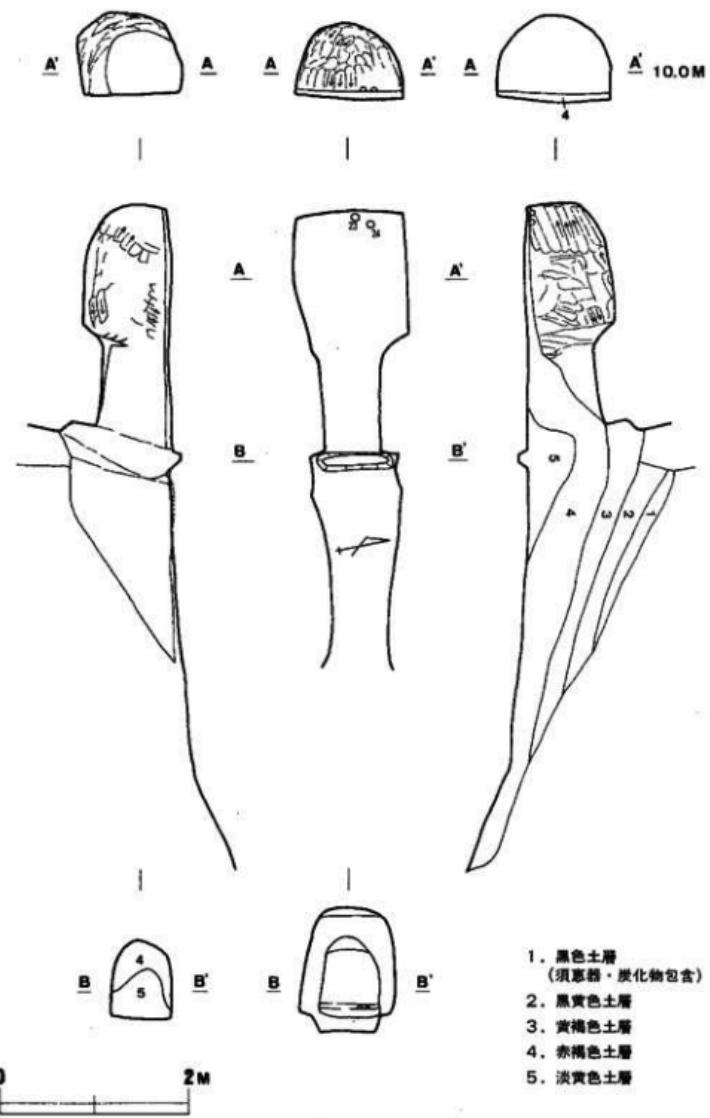


図10 西支群7号横穴墓実測図

## (8) 出土遺物

土器　土器については、ここでは須恵器蓋と坏に分して概括することにする。なお、後出の観察表を参照されたい。

蓋坏の形態変化と技法上の特徴から下記の5つに分類した。

### 【I類】 5号(図版3-1)、6号(図版5-1)

いずれも前庭出土である。

蓋の口縁部と天井部との境に稜がみられるが、これは2条の沈線をめぐらすことによって棱を浮かび上らせる手法である。天井部の外面はヘラ切り後、荒い指ナデ調整が施してある。

### 【II類】 蓋2号(図版1-2)、3号(図版1-5)、4号(図版2-1・2)、5号(図版1-5)、6号(図版5-2~6)、坏2号(図版1-3)、3号(図版1-8~10)、4号(図版2-5~6)、6号(図版5-8~12)

(図版1-2)・(図版1-5)は前庭、その他は玄室から出土している。

蓋はI類よりも稜は明瞭ではなく、天井部と口縁部との境いは浅い沈線や凹線でそれとわかる程度である。口縁部は内湾気味のものが多く、端部は丸みをおびる。

坏は内傾する立ち上り部がやや低く、端部はやや鋭い。受け部はやや斜め上方にのび、端部は丸みをもつ。

蓋・坏ともに外面はヘラ切り後の、(図版5-5)以外は指ナデ調整が施してある。

### 【III類】 蓋5号(図版3-3・4・5・6・8)、7号(図版5-23)、坏1号(図版1-1)、3号(図版1-9・11)、5号(図版3-9~16)、7号(図版5-24)

器形が著しく矮少化し、口径は10cm未満のものが多くなる。

蓋は口縁部が直行するものとやや外反するものがある。比較的前者に口径10cmを越えるものが多く、天井部との境に凹線を1条もつものがある。

坏は立ち上り部が短く且つ内傾し、中には受け部より低いものもある。

蓋・坏ともに外面は丸みをおび、ヘラ切り後、未調整の(図版3-4・5)以外は荒い指ナデ調整が施してある。

### 【IV類】 7号(図版5-25)

前庭出土のもので輪状つまみをもつ破片である。

### 【V類】 5号(図版3-7)

小形品である。口縁部と天井部との境は天井部のヘラ削りによって明瞭である。口縁部外面はやや肥厚し、端部はやや鋭い。短頸壺の蓋と考えられる。

I類の須恵器を出土したものに5号、6号横穴墓、II類に2～6号横穴墓、III類に1号、3号、5号、7号横穴墓、IV類に7号横穴墓がある。これを陶邑の須恵器編年にあてはめると、I類をII型式第3・4段階、II類をII型式第5段階、III類をII型式第6段階、IV類をIII型式第1段階以降ととらえることができる。

**金属製品** 金属製品については、耳環、直刀、刀子、鉄鎌、馬具が出土しており、以下概要を記すことにする。

耳環は銅芯金貼で4個体が出土している。いずれも銅芯に薄い金メッキをしているが、金の残り具合は良くない。(図版5-19)は長径2.5cm、短径2.3cm、内径1.5cmで、間隙は2mmを測る。断面は楕円形で、長径0.7cm、短径0.5cmを測る。(図版5-20)は長径2.7cm、短径2.5cm、内径1.5cmで、間隙は2mmを測る。断面は楕円形で、長径0.8cm、短径0.6cmを測る。(図版5-21)は長径2.6cm、短径2.5cm、内径1.7cmで、間隙は2mmを測る。断面は楕円形で、長径0.8cm、短径0.6cmを測る。(図版5-22)は長径2.6cm、短径2.4cm、内径1.7cmで、間隙は3mmを測る。断面は楕円形で、長径0.8cm、短径0.6cmを測る。4個体は、その大きさ、断面の形より、対関係は検討できない。

直刀は1振が出土している。現存長37cmを測るが、柄は欠損し闊から刀身にかけてのみ残存している。全体は著しく錆化しているものの、闊の断面、切先など細部にわたって観察できる。刀身は刃部断面が縱長の三角形で、造込みは平造りである。身幅は刀身基部で2.5cm、中央部で2.4cmを測る。脊は平脊で、脊幅は刀身基部で0.8cm、中火部で0.6cm、切先側で0.5cmを測る。

刀子は4本が出土している。(図版5-15)は現存長7.6cm、身幅1.1cm、棟幅0.4cmを測る。切先と柄の一部が欠損している。(図版5-16)は現存長6.2cm、身幅1.2cm、棟幅0.3cmを測る。刀身の半分以上が欠損している。柄部には木質が残る。(図版5-17)は現存長7.5cm、身幅1.2cmを測る。刀身の切先から刃部にかけて約2分の1が欠損している。闊は径1.6cm、幅1.1cmを測り、柄部には木質が残る。(図版5-18)は現存長4.5cm、身幅1.3cm、棟幅0.4cmを測る。闊から柄部にかけて欠損している。

馬具は轡が1セット出土し、鞍具などの付属品は伴っていない。轡は鉄製素環の鏡板2枚に二連式の衡と左右の引手がN字形に絡み合い、鍛着した状態で発見されている。衡は引手と直接連結され、鏡板の輪体も衡に連結される。鏡板は楕円形の輪体に立闇が付く形式のものであるが左右の形はやや異なる。輪体の幅は左側4.9cm、右側5.4cmを測る。立闇には横長の方形孔を有し、高さは左右とも1.4cm、幅は左側2.1cm、右側2.25cmを測る。なお、左側の鏡板には長さ0.8×1.2cm、厚さ0.5cmの薄い鉄板が銀接してあり、輪

体と立脚との興味ある接合方法である。柄は全長 8.5 cm を測る。柄の引手側の輪体は 1 本の鉄棒の端部を折り曲げて輪とし、タクミ側の輪体は先端を二股に裂いて輪としている。引手は全長 13.8 cm を測り、引手査の幅は 2.9 cm となる。引手も柄同様に輪体の作り分けをしており、柄側の輪体は二股式で、引手臺は折り曲げ式で作られている。このように、柄及び引手に最も圧力が加わり、傷みやすい輪体にその機能、役割に応じた作り方の工夫をみると全体的には革新的であるが、細部にはかなり手の込んだ跡が窺われる。

### 出土土器観察表

表 1

	器種	図版番号 万葉巻号	法　量	形　態	技　法	備　考
1 号 横 穴 墓	蓋　坏 (身)	1-1 39-1	口径：9.7 器高：3.15	内傾する短かい立ち上り部は、端部が丸く、やや斜め上方にのびる。受け部は端部が丸くふくらむ。立ち上り部と受け部との高さの違いはない。 弓状を呈する底部はやや丸みをもつ。	底部外面は、ヘラ切り後粗いナデ。 底部内面は、指頭圧調整。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：南 焼成：普通 色調：白灰色 底部内面に「火」のヘラ記号有り。 玄室出土。
2 号	蓋　坏 (蓋)	1-2 39-2	口径：12.4 (推定)	大形で、口縁端部は丸く、内側に丸味をもつ。口縁部はゆるやかに内湾し、天井部に至る。 口縁部と天井部の境に、2条の沈線をもつ。	天井部外面は、ヘラ切り後ナデ。 内面は往上げナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：ヤヤ粗 3 mm 以下の白色 砂粒含む。 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭堆積土出土。
3 号	蓋　坏 (身)	1-3 39-3	口径：11.8 (推定)	内傾するたちあがりは、端部を丸くおさめる。 受部はほぼ平らで、端部を丸くおさめた底体部につながる。 底体部との境に指による浅い凹線をもつ。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 口縁部少残存。 前庭堆積土出土。
	高　坏	1-4		大型で、無蓋のものと考えられる。 脚は3方向三角形の透しの割りつけを残す。	坏部・底部内面は、 往上げナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：ヤヤ粗 3 mm 以下の砂粒 含む。 焼成：普通 色調：淡青灰色

表2

	器種	出版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
3 号	蓋 壺 (蓋)	1-5	口径：13.1 器高：3.9	大形で、口縁部は丸く、内側に1条の沈線をもつ。口縁部はゆるやかに内側して天井部に至る。天井部は、ほぼ平らである。	天井部外面は、ヘラ切り後粗いナデ、内面は、指による不定方向ナデ仕上げ。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：暗青灰色 △残存。前庭堆積土出土。
	蓋 壺 (蓋)	1-6		天井部は、ほぼ平らになる。	天井部外面ヘラ切り後、粗いナデ。内面不定方向ナデ仕上げ。ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：普通 色調：灰色 △天井部のみ△残存。前庭堆積土出土。
	高 壺	1-7 39-7	底径：10.0	短脚1段、2方向に三角形の透し。 底縁部上端はたちあがる。	壺部底部は、仕上げナデ。 他は回転ナデ。	胎土：密2mm以下 の白砂含む。 焼成：良好 色調：暗灰色
	蓋 壺 (身)	1-8	口径：10.0 (推定)	内傾するたち上りはやや高く、端部は丸い。 受部は斜め上方にのび、端部を丸くおさめて底部にいたる。	回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 △残存。 前庭堆積土出土。
	蓋 壺 (身)	1-9	口径：9.5 (推定)	内傾するたち上りはやや外窓し、口縁端部は鋭い。 受部は、斜め上方にのび、端部を丸くおさめて、底体部に至る。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 △口縁部△残存。 前庭堆積土出土。
	蓋 壺 (身)	1-10	口径：8.8 (推定)	内傾するたち上りは高く、端部は丸い。 受部はほぼ水平で、端部を丸くおさめ、底体部に至る。 底体部との境に指による凹線をもつ。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 △口縁部△残存。 前庭堆積土出土。
穴	蓋 壺 (身)	1-11	口径：8.8 器高：3.6	内傾するたち上りはやや高く、端部は鋭い。 受部は斜め上方にのび、端部を丸くおさめて、底体部に至る。	回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗青灰色 △残存。 前庭堆積土出土。
	提 瓶	1-12	体部最大径： 16.8	中型でつまみが両肩につく。	体部外面は、前後面ともカキ目、内面はナデ。	胎土：密 2mm以下の白砂粒 含む。 焼成：良好 色調：黒灰色

表3

	器種	出版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
3 号	壺	1-13 39-5	口径：25.6 (推定)	大形で、口縁端部は丸く外反する。 頸部は長く、内傾しながら肩部に至り、 2条の凹線が3ヶ所に入り、間に5~10 条の波状紋が入る。	肩部から体部にかけて、外面タタキ目 (1.8cm×2.8cm 7 条)、内面あて木目 (半径2.8cm 7条の 同心円)が残る。 頸部は、回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 口縁部へ肩部にかけて残存。 前庭堆積土出土。
	甕	1-14	口径：33.4 (推定)	大形で口縁端部は丸く外反し、頸部との境に凸唇をもつ。 頸部は長く、3条の沈線が2ヶ所に入りその間に18~24条の波状紋をもつ。	口縁部から頸部は回転ナデ。 肩部外周タタキ目 (2×2.5cm 7条) 内面あて木目 (半径3 cm 6条) ロクロ回転 方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗灰色 口縁部から肩部が残存。 前庭堆積土出土。
	横瓶	1-15 39-6	口径：13.4 (推定) 器高：29.25	大きく外反する口縁部は、端部は鋭く、二重口縁となる。 頸部は短く、体部は俊形。	頸部外面タタキ目 (1.5cm前後7~9 条)と斜行目文 (8 ~10cm, 6~7条) 内面はあて木目 (半 径2cm 7条) 他は回 転ナデ。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：青灰色 少残存。 前庭堆積土出土。
4 号	蓋環 (蓋)	2-1 39-8	口径：13.8 器高：5.06	内窓して端部を丸くおさめた口縁部と、弓状を呈する天井部との境は、不明瞭である。 器壁は薄く、器高はやや高い。	天井部外面は、ヘラ 切り後削い指ナデ。 内面は、不定方向の指 ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土。
	蓋環 (蓋)	2-2 39-9	口径：12.5 器高：4.8	やや内湾して端部を丸くおさめた口縁部と、中心部が平らで、次第に弓状になる。 天井部との境に1条の沈線をもつ。 器壁は厚く、器高はやや高い。	天井部外面は、ヘラ 切り後削い指ナデ。 内面は不定方向の指 ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：やや粗で黒 色タールを多く含む。 焼成：普通 色調：暗灰色 玄室出土。
	甕	2-3		底部は平らで、外傾しながら体部にいたる。 底部内面に2本の凸 線をもつ。	底部外面ヘラ削り、 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：青灰色 底部から体部にかけて残存。 前庭堆積土出土。
5 号	広口壺	2-4 39-12	口径：8.7 器高：14.5 体部最大径： 13.6	垂直にのびる頸部は比較的長く、口縁部は、端部がやや鋭い。 頸部弓状を呈する肩部と体部との間に、最大径をもつ。 底部は丸く、弓状を呈する。	底部から体部下半にかけての外面は、ヘラ削り。 底部内面は、指ナデ。 他は回転ナデ。調整ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 2mm程度の砂粒 を少量含む。 焼成：普通 色調：淡青灰色 玄室出土。

表4

	器種	図版番号 写真番号	法 量	形 態	技 法	備 考
4 号 横 穴 裏	蓋杯 (身)	2-5 38-10	口径：10.0 器高：4.85 受部径：14.7	内傾する立ち上り部は、端部がやや内窓して鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は、端部が丸く、立ち上り部との境に1条の沈線をもつ。底部は丸く、やや深い。	底部外面は、ヘラ切り後不定方向の指ナデ。 内面は、不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。
	蓋杯 (身)	2-6 30-11	口径：11.4 器高：4.0 受部径： 14.35	内傾する立ち上り部は、端部がやや鋭い。斜め上方に短かくのびる受け部は、端部を丸くおさめる。底部外面と口縁部との境に浅い凹線をもつ。底部は丸く深い。	底部外面は、ヘラ切り後粗い指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：やや粗で黒 色タールと石英 を含む。 焼成：普通 色調：白灰色 玄室出土。 外側の一部に自然 釉付着。
	蓋杯 (身)	2-7	受部径：13.5 (推定)	立ち上り部は内傾する。 受け部は、やや斜め上方にのび、端部を丸くおさめて底部につながる。 底体部との境に、指による浅い凹線をもつ。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：普通 色調：灰色 口縁部のみ焼成。 前庭堆積土出土。
	蓋杯 (身)	2-8	口径：9.6 (推定) 受部径：12.3 (推定)	内傾する立ち上り部は、端部が鋭い。 受け部はほぼ水平にのび、端部を丸くおさめる。 底体部との境に指による浅い凹線をもつ。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：青灰色 口縁部のみ焼成。 前庭堆積土出土。
	甌	2-9		頸部はやや外反する。 肩部はやや斜めになる。 器厚は薄い。	頸部は回転ナデ。 肩部外面は、タタキ目。内面にあて木目が残る。	胎土：密 3mm以下の白色 砂粒を含む。 焼成：普通 色調：暗灰白色 頸部から肩部を中心に破片でわざかに残る。 前庭堆積土出土。
	甌	2-10	口径：14.2 (推定)	外反する口縁部は、端部を丸くおさめる。 頸部との境に1条の凸線をもつ。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗灰色 口縁部のみ焼成。 前庭堆積土出土。

表5

	器種	図版番号 写真番号	法 量	形 態	技 法	備 考
4 号 横 穴 墓	提瓶	2-11 39-13	口径：6.3 器高：19.8 体部最大径： 13.8	やや外反してのびる 頸部に、内尚する口 縁部がつづき、端部 はやや鋭い。 体部から底部にかけ て球状を呈し、体部 中央で、最大径をな す。 肩部に乳頭状の耳が 1対とりつく。	体部の片面は、ヘラ 削り後、回転ナデ。 他面は、回転ナデ。 頸部は回転ナデ。	胎土：やや粗 石英、長石を含 む。 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。
5 号 横 穴 墓	蓋杯 (蓋)	3-1	口径：12.2 (推定)	口縁端部は丸く、ゆ るやかに内傾しながら天井部に至る。 口縁部と天井部の境 に幅1mmの浅い沈線 をもつ。	回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 口縁部のみ焼成。 前庭堆積土出土。
	蓋杯 (蓋)	3-2 40-1	口径：13.4 器高：5.8	外拵がりにのび、端 部を丸くおさめた口 縁部と丸みをおびた 天井部との境は、明 瞭でない。 器高は高い。	天井部外面は、ヘラ 切り後粗い指ナデ。 内面は、不定方向の 指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：密 黒色タールを含 む。 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。 外面の一部に自然 釉付着。
	蓋杯 (蓋)	3-3 40-2	口径：11.5 器高：4.4	垂直にのび、端部を 丸くおさめた口縁部 の内面には、1条の 沈線を有する。 丸みをおびた天井部 と口縁部の境は明瞭 ではない。 器高はやや低い。 内面は口縁部に浅い 沈線を有す。中心か ら外へ3cm付近が最 厚8mmである。	天井部外面は、ヘラ 切り後粗い指ナデ。 後に板状のもので、 引っかいている。 内面は指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：密 4mmほどの砂粒 を少混合む。 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。 外面全体に自然釉 付着。
穴 墓	蓋杯 (蓋)	3-4 40-3	口径：11.5 器高：3.95	やや外拵がりにのび 端部をやや鋭くした 口縁部と丸みをおび た天井部との境に1 条の太い凹線をもつ。 器高はやや低い。	天井部外面は、ヘラ 切り後不定方向の粗 い指ナデ。 内面は不定方向の指 ナデ。 他は回転ナデ。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 前庭出土。
	蓋杯 (蓋)	3-5 40-4	口径：11.1 器高：3.85	外拵がりにのび、端 部を丸くおさめた口 縁部と、丸みをおび た天井部との境は明 瞭でない。 器高はやや低い。	天井部外面の端はヘ ラ削り。 内面は一定方向の指 ナデ。 他は回転ナデ。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。

表6

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
5 号	蓋 环 (蓋)	3-6 40-5	口径：9.9 器高：4.05	垂直にのび、端部を丸くおさめた口縁部と、くぼみをもつ天井部との内面の境に凹線を有す。 器高はやや低い。 最大器厚は、中心から外へ2cm前後で9mmとなる。	天井部外面は、ヘラ切り後不定方向の粗い指ナデ。 内面はていねいな指ナデ。 他是回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。 外面の一部に自然釉付着。
	蓋	3-7 40-6	口径：9.9 器高：3.8	やや外拵がりに反くのび、端部をやや鋭くおさめた口縁部の内面に1条の浅い凹線を有し、外側は肥厚する。丸みをおびた天井部と口縁部との境は、かすかな棱線をもつ。 器高はやや低い。	天井部外面は、ヘラ切り後、一定方向の指ナデ。 他是回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：やや粗 黑色タール多数付着。 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土。
	蓋 环 (蓋)	3-8 40-7	口径：10.4 器高：3.8	外拵がりにのび、端部をやや丸くおさめた口縁部の内面に、浅い凹線を1条有す。 丸みをおびた天井と口縁部との境は、浅い沈線1条を有す。 器高はやや低い。	天井部外面はヘラ切り後、不定方向の粗い指ナデ。 内面は指ナデ。 他是回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：やや粗 黑色タール多数付着。 焼成：普通 色調：淡青灰色 玄室出土。
6 穴	蓋 环 (身)	3-9 40-8	口径：10.55 器高：4.0 受部径：12.8	内傾する立ち上り部は、端部が鋭い。やや斜め上方にのびる受部は端部を丸くおさめている。 底部は丸く、器高はやや低い。	底部外面ヘラ切り後、不定方向の粗い指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他是回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。 外面全体に自然釉付着。
	蓋 环 (身)	3-10 40-9	口径：9.8 器高：4.1 受部径：12.4	内傾する短かい立ち上り部は、端部がやや鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめている。 底部は丸く、器高はやや低い。	底部外面はヘラ切り後、不定方向の粗い指ナデ。 内面は一定方向の指ナデ。 他是回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土。
蓋	蓋 环 (身)	3-11 40-10	口径：9.55 器高：3.5 受部径：12.4	内傾する立ち上り部は、非常に短かく、端部はやや鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は、端部を丸くおさめている。 底部は円状を呈し、器高は低い。	底部外面はヘラ切り後、不定方向の指ナデ。 板状のもので引っかいた痕跡がある。 内面は指ナデ。 他是回転ナデ。	胎土：密 黒色砂粒を含む。 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。 外面に「△」のヘラ記号あり。

表7

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
5 号 横 穴 蓋	蓋杯 (身)	3-12 40-11	口径: 9.4 器高: 3.75 受部径: 11.7	内傾する立ち上り部は、非常に短かく、端部は、やや鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめている。底部は丸く、器高はやや低い。	底部外側はヘラ切り後、粗い指ナデ。内面は指ナデ調整、他は回転ナデ。クロロは左回転	胎土: 細密 焼成: 良好 色調: 灰色 玄室出土。 外面の約1/4に茶色のサビ付着
	蓋杯 (身)	3-13 40-12	口径: 9.2 器高: 3.25 受部径: 11.6	内傾する立ち上り部は非常に短かく端部はやや鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめている。底部は弓状を呈し、器高は低い。	底部外側は、ヘラ切り後不定方向の指ナデ。内面は指ナデ。他は回転ナデ。クロロは右回転。板状のもので引っかいた痕跡がある。	胎土: 細密 焼成: 良好 色調: 灰色 玄室出土。
	蓋杯 (身)	3-14 40-13	口径: 8.7 器高: 4.0 受部径: 11.2	内傾する極端に短い立ち上り部は、つまみ出した程度で、やや斜め上方にのびる受け部より低い。底部は弓状を呈し、器高はやや低い。	底部外側は、ヘラ切り後指ナデ。他は回転ナデ。	胎土: 細密 焼成: 良好 色調: 暗灰色 玄室出土。 内面に「×」のヘラ記号あり。 外面全体に自然釉付着。
	蓋杯 (身)	3-15 40-14	口径: 8.8 器高: 3.65 受部径: 11.2	内傾する短かい立ち上り部は、端部が鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は、端部を丸くおさめている。底部は丸く器高は低い。	底部外側は、ヘラ切り後ナデ調整するが凸が残り、調整が悪い。内面は一定方向の指ナデ。	胎土: やや粗 黒色タールを少量含む。 焼成: 良好 色調: 淡青灰色 玄室出土。 外面に「/」のヘラ記号あり。
	蓋杯 (身)	3-16	口径: 9.2 器高: 3.35 受部径: 10.3	内傾する極端に短かい立ち上り部は、つまみ出した程度で、端部は鋭い。やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめている。底部は、弓状を呈し器高は低い。	底部外側は、ヘラ切り後不定方向の粗い指ナデ。内面は回転ナデ調整。他は回転ナデ。クロロは右回転。	胎土: 細密 焼成: 良好 色調: 暗灰色 玄室出土。 内面に「×」のヘラ記号あり。
	小形 高 杯	3-17 40-15	口径: 8.6 器高: 5.4 底部径: 5.6	外折りにのびる杯部の口縁端部は、やや鋭い。低く短かい脚部、下半は「ハ」の字形状に拡がり、端部は面を有す。	杯部底部外側は、ヘラ削り。底部内面は、不定方向の指ナデ。他は回転ナデ。クロロは右回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 暗灰色 玄室出土。

表8

器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考	
5 号 横 穴 墓	小形 高 杯	3-18 40-16	口径：8.6 器高：4.5 底部径：5.1	外折りにのびる環部の口縁端部は丸みをもつ。 脚部は「ハ」の字状に直接环底底部にとりつき、雄部はやや鋭い。	环部底部外面は、へラ削り後回転ナデ調整。 底部内面は、不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。	胎土：密 砂粒を含む。 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。
	高 杯	3-19	底部径：9.6 (推定)	短脚で外面は底端部より内傾する面をもつ。 内面は内湾する。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 脚部少存。 前庭堆積土出土。
	長頸壺	3-20 40-18	口径：7.2 器高：16.6 体部最大径： 13.0	やや外傾してのびる頸部は長く、内積する口縁端部はやや鋭い。 短く弓状を呈する肩部と体部との間に最大径がある。 底部は丸みをもつ。	体部下半から底部にかけてへラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。
墓	平 瓶	4-1 40-17	口径：6.5 器高：14.45 体部最大径： 14.0	やや外傾してのびる頸部は、やや短い。 内傾する口縁端部は、丸みをもびている。 内面に3条の沈線を有す頸部は、胸部の中心よりやや横にとりつく。 2つの竹脊状のくぼみをもつ肩部と体部の間に最大径がある。 底部は丸みをもつ。	体部下半から底部にかけてへラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 3mm以下の砂粒を含む。 焼成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土。
	合付 杯身 (土器質) (土器)	4-2	口径：15.3 (推定) 器高：4.5	低い台から外傾しながら口縁部にいたる。 口縁端部は丸みをおびている。 底体部にわずかながら3条の縦が認められる。	底部内面は仕上げナデ。他は回転ナデ。 底部に停止糸切り痕を残す。 ロクロ回転方向不明。	胎土：2mm以下の砂粒を含む。 焼成：普通 色調：赤黄色 少存。 前庭堆積土出土。
	合付 杯身 (土器質) (土器)	4-3	口径：17.3 (推定)	口縁端部は丸く、やや外反しながら口縁部に続く。 口縁部には4条の唇による回線が認められる。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：密 焼成：普通 色調：赤色 口縁部のみ少存。 前庭堆積土出土。

表9

器種	回収番号 万葉番号	法量	形態	技法	備考	
5号横穴墓	提瓶	46 39-4	口径：13.8 体部最大径： 25.0	大型で、口縁部は2重口縁で、耳は片方しか残っていない。体部は耳のつく方向に長い。	口縁・口頭部は内外とも回転ナデ。胴部外面は、両面ともカキ目（片面170～190条）。内面は張り付け痕が円形に残る。片面はあて木目（同心円文）が残る。ロクロは右回転。	胎土：やや粗 3mm以下の砂粒 含む。 焼成：やや不良 色調：淡黄灰色 馬鹿存。 前庭堆積土出土。
6号横穴墓	蓋坏 (蓋)	5-1	口径：11.85 (推定) 器高：3.4 (推定)	大形で口縁端部はやや丸みをもち、内側に幅2mmの沈線1条をもつ。口縁部は鋭く立ち上がり、天井部に沿る天井部との境に幅2mmの棱線をもつ。天井部はほぼ平たい。	天井部外面へラ切り後、粗いナデ。内面不定方向の指ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：黄灰色 馬鹿存。 前庭堆積土出土。
5号横穴墓	蓋坏 (蓋)	5-2 41-1	口径：13.0 器高：4.3	外拵がりで、端部を丸くおさめた口縁部と弓状を呈する天井部との境にかすかに棱線をもつ。天井部の中程には1条の凹線がラセン状に入る。器高はやや低い。	天井部外面は、ヘラ切り後粗い指ナデ。内面は一定方向の指ナデ。他は回転ナデ。ロクロは左回転。	胎土：やや粗 4mm以下の砂 粒を少量含む。 焼成：普通 色調：灰色 玄室出土。
5号横穴墓	蓋坏 (蓋)	5-3 41-2	口径：12.7 器高：4.1	やや外拵がりにのび端部を丸くおさめた口縁部と弓状を呈する天井部と、中心部がやや平らな天井部との境にわずかな棱線をもつ。器高はやや低い。	天井部外面はヘラ切り後木調整。内面は不定方向の指ナデ。他は回転ナデ。ロクロは左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。
5号横穴墓	蓋坏 (蓋)	5-4 41-3	口径：12.9 器高：4.1	外拵がりで端部を丸くおさめた口縁部と弓状を呈する天井部との境は不明瞭である。天井部中央は平らである。器高はやや低い。	天井部外面はヘラ切り後粗い指ナデ。内面は一定方向の指ナデ。他は回転ナデ。	胎土：密 焼成：普通 色調：淡赤灰色 玄室出土。 天井部外面に「×」 のヘラ記号あり。
5号横穴墓	蓋坏 (蓋)	5-5 41-4	口径：12.2 器高：3.8	外拵がりで、端部を丸くおさめた口縁部の内面に1条の沈線をもつ。天井部は丸みをおび口縁部との境に2条の凹線が入る。器高は低い。	天井部外面はヘラ切り後、指ナデ。天井部内面は、一定方向のナデ。他は回転ナデ。ロクロは左回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：白灰色 玄室出土。

表10

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
6 号 横 穴 蓋	蓋杯 (蓋)	5-6 41-5	口径：11.8 器高：4.15	外彎がりで、端部を丸くおさめた口縁部の内面に1条の沈線をもつ。 天井部は丸みをおび口縁部との境に1条の浅い沈線をもつ。 器高はやや低い。	天井部外面はヘラ切り後粗い指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土。
	広口蓋	5-7 41-11	口径：9.35 器高：13.65 体部最大径： 12.6	やや外反する頸部は比較的長く、口縁部は内傾して、端部は丸みをもつ。 肩部は短かく体部との間に最大径をもつ。 底部はやや平らである。	底部外面はヘラ切り後粗い指ナデ。 内面は指頭圧調整。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：やや粗 4mm以下の砂粒 を含む。 焼成：普通 色調：淡黄灰色 美道出土。 肩部から頸部にかけて一部自然黏付着。
	蓋杯 (身)	5-8 41-6	口径：11.0 器高：3.15 受部径：13.3	内傾する立ち上がり部は、やや短く、端部はやや鋭い。やや斜め上方にのびる受け部の端部は、丸くおさめている。 底部は弓状を呈し、器高は低い。	底部外面はヘラ切り後粗い指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 黒色タールを微量に含む。 焼成：普通 色調：灰色 玄室出土。
	蓋杯 (身)	5-9 41-7	口径：11.05 器高：4.0 受部径：13.6	内傾する立ち上がり部は、端部がやや鋭い。 受け部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめている。 底部は弓状を呈し、器高はやや低い。	底部外面はヘラ切り後、丁寧な指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：やや粗 4mm以下の砂粒 を含む。 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土。
	蓋杯 (身)	5-10 41-8	口径：10.9 器高：3.55 受部径：13.6	内傾する立ち上がり部は、やや短く、端部は鋭い。やや斜め上方にのびる受け部の端部は、丸くおさめている。 底部は弓状を呈し、器高は低い。	底部外面はヘラ切り後、指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは左回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：白灰色 玄室出土。
	蓋杯 (身)	5-11 41-9	口径：10.75 器高：3.95 受部径：13.35	内傾する立ち上がり部は、端部がやや鋭い。 やや斜め上方にのびる受け部の端部は丸みがある。 底部は弓状を呈し、器高はやや低い。	底部外面はヘラ切り後、粗い指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土：密 黒色タールを少量含む。 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土。 外面に自然跡が一部に付着。

表11

	器種	図版番号 写真番号	法量	形態	技法	備考
6 号	蓋杯 (身)	5-12 41-10	口径: 9.55 器高: 4.0 受部径: 12.3	内傾する立ち上り部は、端部がやや外反して窓。やや斜め上方にのびる受け部の端部は、丸くおさめている。 底部は丸みがあり、器高はやや低い。	底部外面はヘラ切り後、不定方向の粗い指ナデ。 内面は不定方向の指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土: 密 黒色タールを含む。 焼成: 良好 色調: 青灰色 玄室出土。 全体に歪んでいる。
	横穴墓	小臺	5-13	頸部から肩部にかけて、逆「く」の字形になり体部にいたる。体部はやや内湾する。	頸部から肩部回転ナデ。 体部ヘラ削り。 ロクロ回転方向不明。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 青灰色 頸部から体部が残存。 前庭堆積土出土。
	追	5-14		肩部は外傾し、体部にいたる。体部に2条の沈線が入る。 底部は平らである。	底部外面ヘラ切り後ナデ仕上げ。 他は回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土: 密 3mm以下の白砂粒含む。 焼成: 良好 色調: 暗灰色 肩部から底部が残存。 前庭堆積土出土。
7 号	蓋杯 (蓋)	5-23 41-13	口径: 9.8 器高: 3.4	外拡がりで肩部を丸くおさめた口縁部と丸みをおびた天井部との境に、指による凹線をもつ。 器高は低い。	天井部外面は、ヘラ切り後不定方向の指ナデ。 天井部内面は、指頭圧調整。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 青灰色 外面に油脂付着。 玄室出土。
	横穴墓	蓋杯 (身)	5-24 41-14	内傾する短い立ち上り部は端部が丸い。 やや斜め上方にのびる受け部は端部を丸くおさめ、立ち上り部と受け部との高さの違いは、極くわずかである。 弓状を呈する底部はやや丸みをもつ。	底部外面はヘラ切り後、不定方向の粗い指ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロは右回転。	胎土: 繊密 焼成: 良好 色調: 灰色 外面に油脂付着。 玄室出土。
	蓋	蓋杯 (蓋)	5-25 41-12	環状のつまみがつき 天井部はやや内湾する。 器厚は厚い。	天井外面ヘラ削り。 内面は不定方向仕上げナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: 繊密 焼成: 良好 色調: 暗青灰色 つまみと天井部の残存。 前庭堆積土出土。

## (9) まとめ

今回の調査で明らかとなった問題点を列記してまとめとする。

1. 今回は7穴の横穴墓を調査したが、未調査区域の予想される10穴を含めると17穴以上の横穴墓が存在していたことが推定される。今後、これらの横穴墓を営んだ集団の解明が必要とされる。また、丘陵頂部に存在する三角点古墳や平野丘上古墳群との関連性も検討されなければならない。
2. 横穴墓は群構成をなすのが一般的であるが、それは幾つかの小単位の集まりで構成されているといえよう。本文群の場合も同様で、横穴墓の立地、規模、出土遺物から2、3の単位を推定することが可能である。その考察については、つぎに述べる東支群とともに、第IV章で検討していくこととする。

註1.

3. 本支群の形態的特徴は、まず前庭が比較的長く、羨道もそれに比例して長いことである。美門は4号、5号横穴墓のみ二重構造で、他の横穴墓とは異質な造りを思わせる。玄室の平面形態は一般的に方形の継長プランで、玄室の横断面は6号、7号横穴墓は丸天井である。

以上のこと事が挙げられるが、前庭から羨道が長いのは、地形が緩やかな上に地山（真砂土）が柔軟いため、玄室を造り出すのには地山の奥深くまで掘ることが必要であったためであろう。

4. 横穴墓の築造年代を考えるにあたっては、前述した出土須恵器の編年統から7世紀初頭に開始され、中葉には最盛期を迎える、後半には築造を終了したものと考えられる。しかし、例えば、I類の蓋にみられる稜は前段階の手法が残るが、天井部外側にヘラ切り後の指ナデ調整が施されていること、また玄室からII類が一括して出土する4号、6号横穴墓、III類が一括して出土する1号、7号横穴墓との時間的な差など山陰地方における須恵器編年に関する懸案の課題が多く、今後の研究に期待するものである。註2。

註1. 「発掘と地域の歴史像の発展」(柏書房『考古資料の見方〈遺跡編〉』、1977年)

註2. 「陶邑Ⅲ」(大阪府教育委員会、1978年)

## 10 出土人骨鑑定

鳥取大学医学部法医学教室

助教授 井 上 晃 孝

### (1) 6号横穴墓出土人骨

玄室内には、土器の配置からみて4～5体が埋葬されたと推定されるが、残存骨が極めて少なく、小さな骨片化しており、資料としては不適当である。

玄室の土器の配置から番号をつけると、A、B、C、D、Eとなり、その周囲の人骨について検討する。(図11。)

A：小さな頭骨片1個と床砂中より歯牙4個を検出したのみである。

歯牙は小白歯1個、大臼歯3個で、すべて永久歯であり、咬耗度はMartinの分類では2～3°に相当し、年令は壮年(30才代)が推定される。性別、身長は不明である。

B：残存骨は全く検出されない。

C：金環が散在するが、残存骨、歯牙は全く検出されない。1体が埋葬されたと推定される。

D：刀子1本があり、残存骨は少ないがこの玄室内では最も多い。

骨の配置は極めて不自然である。残存骨は右側頭骨(錐体部)、左右不明の上腕骨片、大腿骨と脛骨の一部である。

性別は不明であるが、年令は骨の大きさから一応成人が推定されるが、身長は不明である。

E：刀子2本をおいて、下方に骨片2個と左右不明の上腕骨片の一部が残存するのみである。性別・年令・身長は全く不明である。

まとめ 6号横穴墓内には、須恵器、刀子と金環が散在し、その配置から数人が埋葬されたと推定される。

残骨量は極めて少ない。わずかの残存骨の配置からして3体分が確認されたにすぎない。

A：性別不明、年令は壮年、身長は不明である。

D：性別不明、年令は一応成人、身長は不明である。

E：性別、年令、身長ともに不明である。

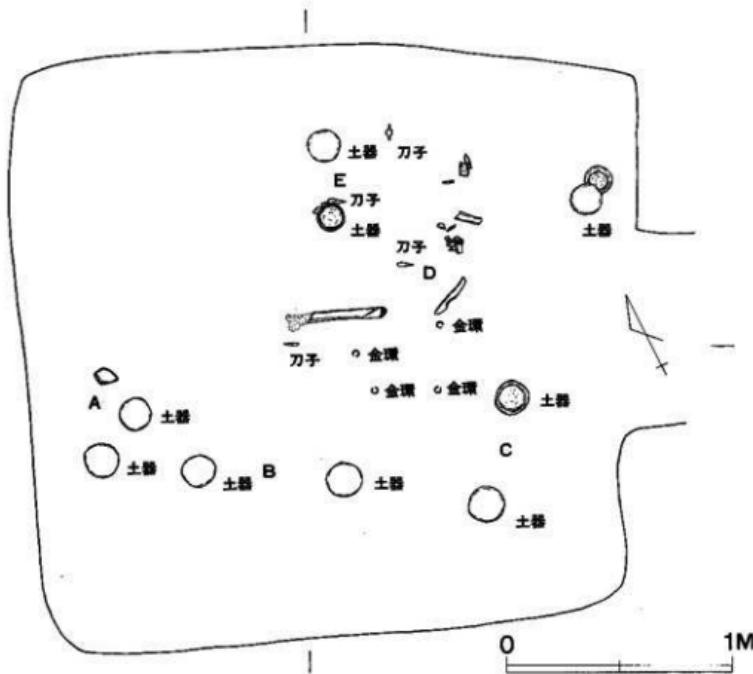


図11 西支群6号横穴墓人骨出土状況

## (2) 7号横穴墓出土人骨

1. はじめに 玄室内には保存状態が比較的良好な人骨が残存していた。

残存骨の配置は極めて不自然であるが、1体が埋葬されたことが確認された。この出土人骨について、性別・年令・身長・血液型について報告する。

2. 出土人骨の概観 7号横穴墓内には頭骨と4肢骨、その他の骨が散在していた。埋葬時に自然位で安置されると、骨は骨格順に一定の方向性をもち、左右対称的に残存（一部消失骨はあるにしても）するのであるが、本横穴墓の人骨配置は極めて不自然である。

（図12.）

椎骨（頸骨・胸骨・腰骨）、胸郭骨・上肢骨、下肢骨の残存骨をみると、骨の一定の方向性（近位部～遠位部配列）と左右対称性は全くなく、白骨化した段階で、後日かなり無理作に骨を移動した形跡がみられる。

骨の表面の色調は、黄白色～黄褐色調を呈し、骨質は極めて脆弱なものから、比較的堅いものまであるが一般的に脆い。

骨を採取後、骨格順に再配列してみると、欠損、消失骨はあるが、重複した骨は検出されず、1体が埋葬されたことが確認された。（第12表）

3. 残存骨 頭蓋骨は保存状態がよく、ほぼ完形に近いが、頭蓋底部を欠いている。（写真1）上顎骨には一部歯牙が付着し（写真2）、下顎骨は右の大歯の歯槽部から左下顎全体が残存し、歯牙が付着している（写真3）。その他遊離歯牙も認められ、歯式に従って示すと第2表の通りである。

歯牙はすべて永久歯で、第3大臼歯が萌出しかかっている。歯牙の咬耗は切歯、犬歯、臼歯とも極めて軽度で、Martinの分類では0～Ⅰである。

頸椎骨は1～7頸椎骨であるが、残存骨はそのうち3個で、第2頸椎骨（軸椎）のみが完形である。胸椎骨は1～12胸椎骨があるが、そのうち6胸椎骨が残存しているが完形のものはない。

腰椎骨（1～5腰椎骨）のうち4個残存するが、うち2個はほぼ完形である。仙骨、尾骨はない。

胸郭……胸骨柄、胸骨体、劍状突起は欠く、肋骨は若干残存するが完形のものはなし。

上肢骨…肩甲骨は左右とも関節窩と肩峰部、その周囲のみ残存。鎖骨は右のみ完形で長さ10cmと小さい（成人♂14cm、♀13cm）。上腕骨は左右とも残存するが近位部（上腕骨頭部）が欠落している。橈骨は左右とも近位部～骨体部が残存するが遠位部を欠落している。尺骨は左右とも遠位部を欠く、手骨は左右とも全くない。

下肢骨…寰骨は左右とも腸骨があるが極めて小さい。恥骨は左右とも欠落、坐骨は右のみ残存、大腿骨は左右とも骨体部を中心に残存するが、近位部と遠位部を欠く。

膝蓋骨は右のみ残存。脛骨は左右とも骨体部を中心に残存するが近位部と遠位部を欠く、腓骨は左のみ残存（遠位部）、足骨は左右の距骨と距骨のみ残存。

人骨の計測値（単位：mm）

頭蓋最大長：170.3 頭蓋最大巾：138.5 前小前頭巾：92.0

最大前頭巾：114.0 上顎巾：100.0 上顎高：64.2 両耳巾：102.0

頬弓巾：112.0 両眼窩巾：91.5 眼窩高：29.2 眼窩巾：36.8 口蓋巾：36.0

鼻高：49.0 鼻巾：23.5 上腕骨：左 228.0 右 230.0 大腿骨：右 330.0

脛骨：270.0

4. 性別の推定 性別判定には、形態学的検査と人類学的計測値による判定法がある。

頭蓋骨は完形ではないが、検査できる範囲内で検討する。

### 1) 頭蓋骨の形態学的検査

- 前頭結節 ..... 中等度に発達  
オルトメトビカ（額鉛直型） ..... やや鉛直に近い  
眉弓の隆起 ..... 発達弱い  
眉間の隆起 ..... 発達弱い  
頬弓巾 ..... やや狭い

以上の形態学的特徴は女性骨が一般に具備している条件であるので、本尾骨は女性であると推定する。

### 2) 頭蓋骨の対照値との比較

3の頭蓋骨の計測値はかなり小さく、全般的に女性域の範囲に属する。

### 3) 頭蓋骨の判別関数法による性別判定

埴原（1964）の頭蓋骨の計測値による判別関数による性別判定法に従って算出する。

$$Y = X_1 + 0.2207X_2 + 1.0950X_4 + 0.5043X_5$$

$X_1$  (頭蓋最大長) 170.3 mm       $X_2$  (頭蓋最大巾) 138.5 mm

$X_4$  (頬骨弓巾) 112.0 mm       $X_5$  (上顎高) 64.2 mm

判別限界値より計算値が大きいと♀、小さいと♂と判別する。

結果	判別限界値	資料骨計算値	判定
	380.8439	355.8830	女性(♀)

以上1)、2)、3)の各法ともいずれも女性と判定される結果を得た。

## 5. 年令の推定

### 1) 頭蓋冠縫合

頭蓋冠の3大縫合の冠状、矢状、人字縫合とも全く齶着が認められないことから25才以下の若年者が推定される。その上、本尾の頭蓋冠の前頭縫合はすでに幼児期に齶着するのが普通であるが、例外として全く齶着を認めない。

### 2) 齒牙の萌出と咬耗

① 齒牙の萌出 ..... 残存歯牙はすべて永久歯で、表2に残存歯牙を示す。第3大臼歯はすべて歯冠部のみで、歯根部の形成がなく、右上、左下の3個は歯槽内にとどまっている。（第3大臼歯の萌出は17（18）才～25才まで）

② 歯牙の咬耗……咬耗はほとんどみられない。とくに臼歯の場合、咬頭の咬耗は極めて軽度で Martin の分類では 0~1° で、切歯、犬歯でも同様である。

### 3) 上顎骨の切歯縫合

切歯縫合は 25 才前後で始まり、30 才前後に癒着が終るといわれているが、本資料では全くみられない。その他の横口蓋縫合、正中口蓋縫合も癒着は全く認められない。以上から年令は 20 才前後と推定されるが、10 年後半の可能性がより強い。

### 6. 身長推定 生前の身長推定は完全な 4 肢骨（長管骨）の最大長に性別、各骨別に指定された相関係数を乗じて算出する。

本尾の 4 肢骨は完形のものはないが、比較的保存良好な骨について欠損部分を考慮して最大長を算出し身長を推定する。

資料 骨			骨の最大長mm	藤井法	工藤法	Pearson 法
骨名	性	左右		(1.960)	(1.961)	(1.899)
上腕骨	女	左	228	135.5	—	134.8
		右	230	136.0	—	135.4
大腿骨		右	330	135.0	138.5	130.7
		左	270	136.9	136.1	136.9
平均 値			135.9	137.3	134.5	

以上から生前の身長は大約 136.0 cm 位と推定する。

### 7. 血液型

#### 1) 資料……歯牙：右下顎第 1 小臼歯（41）

資料を粉末化し、脱脂処理後固定して検査に供した。なお、対照として血液型既知の歯牙も同様に処理して検査に供した。

#### 2) 抗体

抗 A、抗 B 血清は市販品、抗 O (H) レクチンは Ulex europaeus 種子の抽出液を用いた。未処理血球に対する凝集素価は抗 A、抗 B 血清は 1 : 256、抗 H レクチンは 1 : 64 であった。パパイン酵素処理血対に対しては、抗 A、抗 B とともに 1 : 1,280、抗 H レクチンも 1 : 1,280 になるように調整した。

#### 3) 抗体解離試験

資料として歯牙粉末約 10 mg を用いた。抗体感作時間は室温 5 hr、さらに完温で 1 夜

行った。洗浄後解離液はPBSを加え、55°C 10min 热解離後解離液別の小試験管に移し、指示血球（未処理血球、処理血球）を加えた。さらに、37°C 10min放置後、遠沈し、肉眼的、光顯的に凝集の有無で判定した。

結果、第14表に示すように未処理血球とともにB型と判定される結果を得た。

8. 骨の不自然な配列について 残存骨を骨格順に配列してみると、消失骨はあるが、ほぼ1体分に相当し、重複した骨がみとめられないことから明らかに1体が埋葬され、追葬のあとが全くない。

伸展葬の場合、骨は生前の体形に従い骨格順に一定の方向性のある配列をするのに本屍骨の配列は極めて異状である。

頭骨のすぐ下にくる筈の下顎骨が遠く離れて位置し、椎骨、上肢骨、下肢骨、骨盤らの位置もかなり上下、左右に方向性もなくばらばらに散乱している。

これらのことを考えた場合、後日白骨化した時期に何らかの目的で人為的に移動されたことは確実である。

9. まとめ 本横穴墓内には比較的保存状態の良好な人骨が極めて不自然な配列で残存していた。

1. 埋葬者は1名である。

2. 埋葬者の性別は女性、年令は20才前後であるが10代後半の可能性がより強い。身長は136cm位と推定され、血液型は歯牙からB型と判定された。

3. 残存骨には特記すべき病変らの異常を認めない。

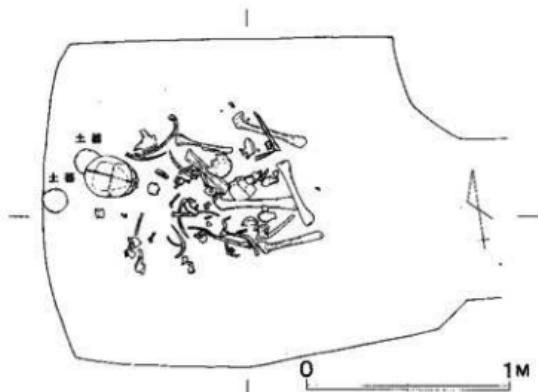


図12 西支群7号横穴墓人骨出土状況

第12表 残存骨一覧

骨格	骨数	本尾骨	備考
頭蓋骨	頸蓋骨 1	○は正形に近いが顎蓋底部を欠く	
	下顎骨 1	○ほぼ正中から左側は残存(右側欠)	
椎骨	頸椎骨 1~7	○(3)軸椎のみ完形、他は破損	
	胸椎骨 1~12	○(6)破損	
	腰椎骨 1~5	○(4)2個のみ完形、他は破損	
	仙椎骨 1~5	欠	
	尾椎骨 1~3(5)	欠	
胸骨	胸骨柄 1	欠	
	胸骨体 1	欠	
脛骨	剣状突起 1	欠	
肋骨	12対	○(若干) 左右とも完形なし	
上肢骨	肩甲骨 1対	○(1対) 肩節窓と肩峰部のみ	
	鎖骨 1対	○(右のみ) 完形	
	上腕骨 1対	○(1対) 左右とも遠位部欠	
	橈骨 1対	○(1対) 左右とも遠位部欠	
	尺骨 1対	○(1対) 左右とも遠位部欠	
	手骨 1対	欠	
下肢骨	寛骨 1対	○(1対) 髋骨(左右)と坐骨(右)のみ	
	大腿骨 1対	○(1対) 左右とも遠位部欠	
	膝蓋骨 1対	○(右のみ) 完形	
	脛骨 1対	○(1対) 左右とも遠位部欠	
	腓骨 1対	○(左のみ) 造位部のみ残存	
	足骨 1対	○(左のみ) 跟骨と距骨のみ	

○:一部でも残存していて、その名称のはっきりしているもの

[ ]:( )の中の数字は残存骨数

欠:欠落骨(消失骨)

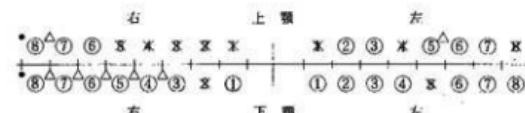
第13表

歯式

上顎	下顎
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8
第二大人臼齒	第一大人臼齒
第一大人臼齒	第二大人臼齒
第一大人臼齒	第一大人臼齒
第一大人臼齒	第一大人臼齒
上顎	下顎
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8
第一大人臼齒	第一大人臼齒

さらにこれを番号だけにすると

8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8



○△: 残存歯牙(付着歯牙)

○△: 残存歯牙(遊離歯牙)

○×: 残存歯牙(埋没歯牙)

×: 欠落歯牙

第14表 血液型検査結果（抗体解離試験法による）

資料	血球 抗体	未処理血球			酵素処理血球			判定
		抗 A	抗 B	抗 O(H)	抗 A	抗 B	抗 O(H)	
歯牙(右下顎第1小臼齒: 石)		-	+	-	-	+	+	B型
対照	血液型既知	歯牙 A型	+	-	-	+	-	A型
		歯牙 B型	-	+	-	-	+	B型



写真1 頭蓋骨(左側頭部)

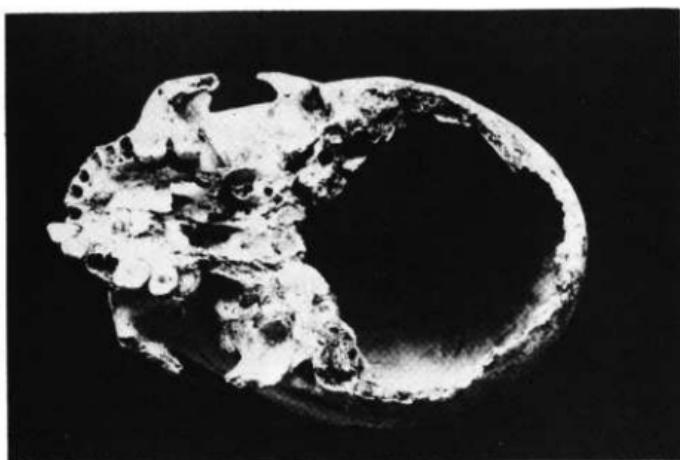


写真2 上顎骨歯付着状況

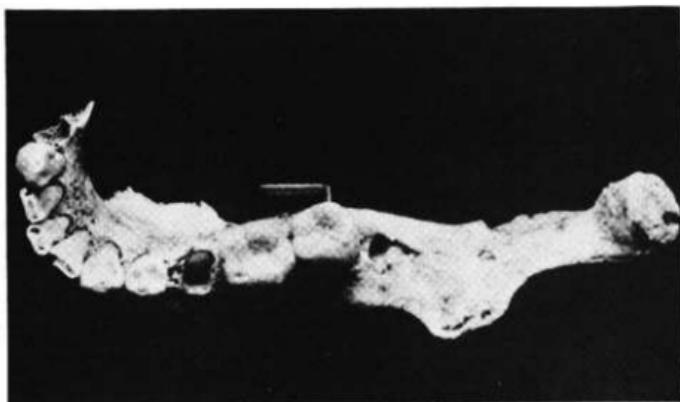


写真3 左下顎歯付着状況

## 2. 平野横穴墓東支群の概要

東支群は、馬蹄形の谷が南へ開いた東側斜面に立地している。この東側斜面には、小規模な谷が二カ所認められており、本支群はその北側のU字形の谷に存在する。調査した横穴墓12穴は、標高12～16mの比較的急傾斜面に穿たれている。横穴墓の呼称は、北端のものから順次1号横穴墓、2号横穴墓とし、南端のものを12号横穴墓とする。以下、本文群の各横穴墓の概要を記すこととする。

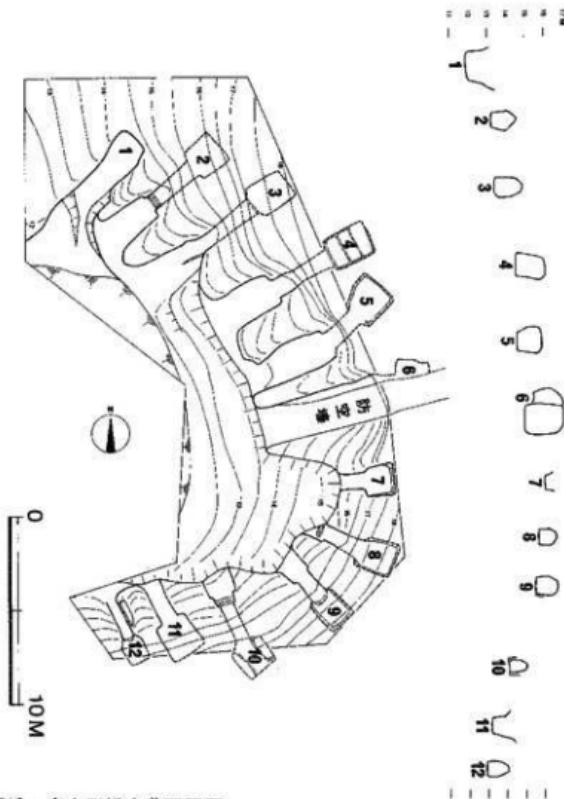


図13 東支群横穴墓配置図

### (1) 1号横穴墓

本横穴墓は、東支群の中では最も北側に位置し、南西方向に開口している。羨門部分は標高約12mを測り、群内では最も低い立地である。表土を剥ぎ、不整形なプランを検出した時点で、既に玄室と羨道の天井が崩壊し、凹状が描かれていることを確認した。このような状況のために、横穴墓の各部の境界、すなわち、玄室と羨道及び前庭の各部の境は、平面プランあるいは堆積した土層でも明確にすることはできなかった。従って、側壁でかすかに残る稜線でもって各々の境の日安とした。

玄室の平面プランは、奥行き254cm、横幅は170cm前後になり、原状では不整形な形を呈する。奥壁は床面から68cmの高さまでは内傾して立ち上がり、前壁と天井壁は残存しない。側壁も崩れ、木梁の姿を復元することは不可能である。羨道は長さ150cm、幅130cm前後になり、天井壁と側壁は崩れている。前庭は長さ446cm、幅は134～230cmを測り、側壁は外傾し、北側壁の床面は直線的に西方に延び、南側壁の床面は湾曲して2号横穴墓の前庭入口部分を形成する。玄室から前庭にかけての床面は、なだらかに傾斜する。

上層の堆積状況をみると、玄室から羨道にかけて床面から約35cm前後の所まで黄灰色土層と灰茶色土層が堆積し、玄室内ではその上層に天井壁や側壁の崩壊土が堆積する。

一方、羨道については、縦断面で白黄色土の落ち込みが斜めに帯状に観察される。この白黄色土層によって、前庭ではほぼ平坦に堆積していた下層の黄褐色土層、黄黑色土層が分断される形となる。羨道附近の北側壁で検出された須恵器の蓋片は、床面から約32cm上の位置にあたり、白黄色土層の上面にあたることから、追葬時に玄室内から持ち出された遺物と考えられる。言いかえると、追葬により、黄褐色土層と黄黑色土層がカットされ、その時に白黄色土層が堆積し、その後新たに上層の黄黑色土層が堆積したものと考えられる。

検出された遺物は次のとおりである。

羨道 須恵器 蓋2、坏1

前庭 須恵器 蓋1、坏2、高坏1、鰐1

羨道附近の北側壁で出土した蓋2と坏1は、床面上約32cmの白黄色土層上面からのものである。これは追葬時に玄室内の以前の副葬品を羨門の片隅に片付けたものと考えられる。蓋は径10.8cmの蓋片の蓋部と破片であるが口縁部の内面にかえりを有するものがある。坏は高台が付き、口縁部が外傾するものがある。

前庭では下層の黄黑色土層から出土した。蓋は輪状のつまみを有して口縁部はやや外反してドへ垂れるもの、坏は蓋片の坏部の破片と、高台が付き口縁部は内湾するものである。また、高坏は脚部、鰐は口縁部と脚部がそれぞれ1個体分出土した。

## (2) 2号横穴墓

本横穴墓は1号横穴墓の南側に隣接し、南西方向に開口している。羨道部分の標高は約14mとなる。玄室の残存状況は比較的良好であるが、羨道は天井及び側壁上部の半分以上が崩れている。

玄室の平面プランは、台形状を呈し、奥行き180cm、横幅は奥壁附近で182cm、入口附近で152cmを測る。北側壁には盗掘孔がある。奥壁は床面から28cmまでは堆積土と壁面の剥離により外傾気味であるが、上部は内傾して立ち上がる。前壁はあまり残存しないが、天井附近ではやや内傾する。側壁は土砂が堆積した部分は垂凸に近く上部は内傾あるいは内湾して天井に至る。天井は現存高180cmを測る。玄室は横断面がアーチ形を呈す。いわゆるカマボコ形と呼ばれる天井形態を示す。床面はごくわずかだけ、羨道に向けて下り傾斜となる。

羨道は長さ266cm、幅は玄室の入口で102cm、羨門で112cmを測り、中央部でやや胴張りをもち、羨門付近で狭まる形状を呈する。閉塞施設としては床面に幅15cm深さ10cmの横溝が穿ってあり、閉塞用の板材が嵌め込まれていたものと考えられる。側壁は床面から83cmまではやや外傾して立ちあがる。天井は大半が崩壊しているものの、玄室の入口附近中央部で高さ160cmを測る。床面は前庭に向けて下り傾斜となる。

前庭は長さ264cm、幅は154～194cmを測り、前庭の人口に向けて広がる形状を呈する。側壁は外傾し、北側壁の床面は屈曲して1号横穴墓の前庭へ、南側壁の床面は緩やかに湾曲し3号横穴墓の前庭の北側壁へ延びる。床面は前庭の入口に向けて下り傾斜となり、羨門から380cmのところで急傾斜となる。

土層の堆積状況をみると、玄室から羨道にかけては厚さ10cm前後の明茶色土層と淡黄白色土層が堆積し、その上に流れ込みの土砂が堆積している。前庭では、側壁の崩壊土と思われる茶灰褐色土層の上に暗茶色土、黄黒色土層などが、流れ込んだ状況で堆積している。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	鉄製品	刀子1
	須恵器	蓋2 坯1
羨道	須恵器	蓋1
前庭	須恵器	蓋5 坯1 臺1

玄室では刀身の先端を欠いた刀子1が床面直上から出土した。須恵器は径8cmクラスの

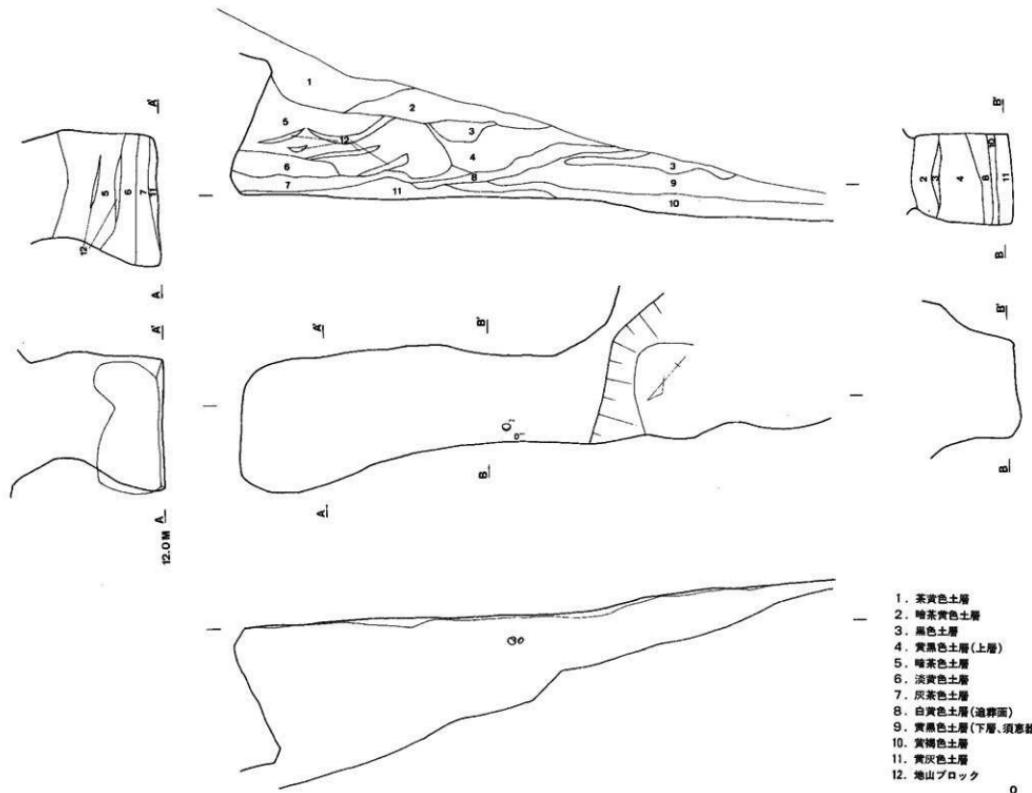


図14 東支群1号横穴墓実測図(%)

1. 茶黃色土層
2. 墓表茶黃色土層
3. 黑色土層
4. 黑灰色土層(上層)
5. 暗茶色土層
6. 淡黃色土層
7. 灰黃色土層
8. 白黃色土層(追葬面)
9. 黑褐色土層(下層、須恵器出土)
10. 黑褐色土層
11. 黑褐色土層
12. 地山ブロック



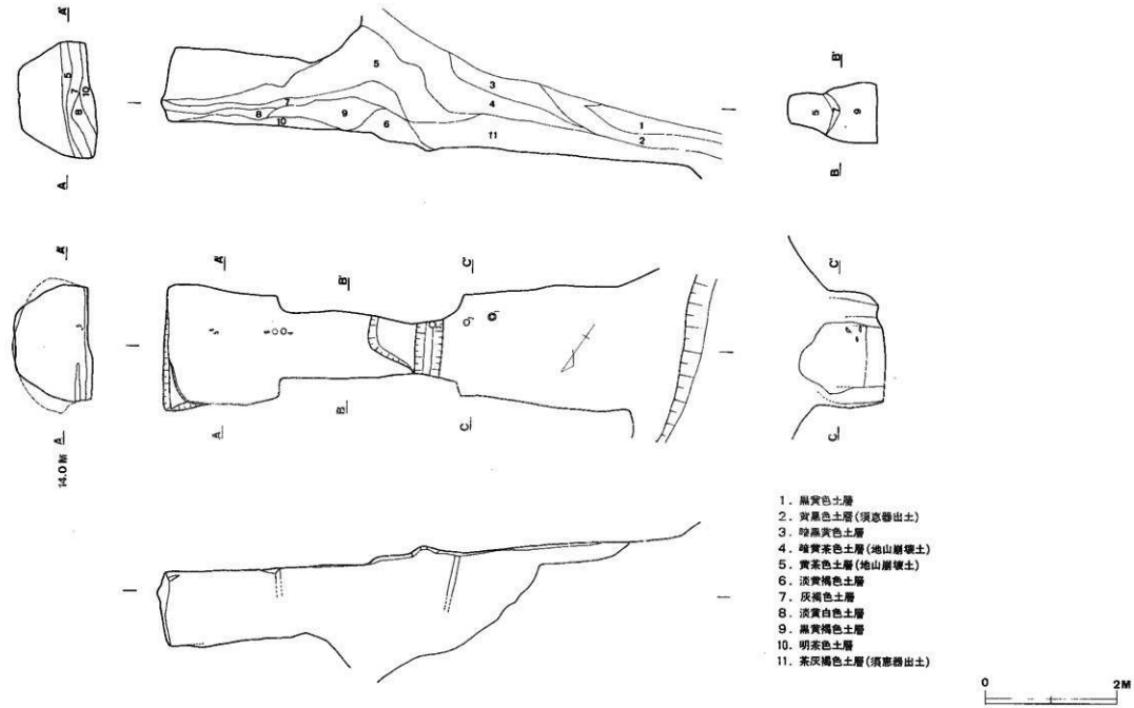


图15 東支群2号横穴墓实测图(1/6)

小形の蓋と坪が床面直上からと、径10.5cmの蓋が玄室の堆積土層（明茶色土層）の上面から出土した。

羨道では羨門の閉塞用と思われる横構の南側壁際で径10.4cmの須恵器の蓋が床面から56cm浮いた黄茶色土層から出土した。これは追葬の可能性を示唆するものであろう。

前庭では羨門付近の南側壁寄りで径7.85cmの蓋と径9.45cmの坪が床面から32cm浮いた茶灰褐色土層から出土した。また輪状つまみを有する蓋、内面にかえりを有する蓋、壺の脇部などはすべて黄黒色土層から出土した。

### (3) 3号横穴墓

本横穴墓は2号横穴墓の南側に位置し、南西方向に開口している。羨門部分の標高は約14mで、玄室の床面は2号横穴墓とはほぼ同じ高さにある。残存状況は良い方であるが、玄室、羨道とも天井が剥離しているために、その境が不明瞭である。また床面には盗掘孔があり、その中に須恵器が混入していた。

玄室の平面プランは、奥行き218cm、横幅は奥壁付近で162cm、玄門付近で176cmを測り、やや縦長の長方形を呈する。奥壁は床面から46cmまでは土砂の堆積により本来の壁面をとどめていないが、上部はやや内傾きみに立ち上がる。前壁は不明である。天井の現存高は奥壁付近で140cm、玄室入口で130cmを測る。側壁は内湾して丸い天井に至る。玄室は横断面が三角形を呈し、いわゆる妻入テント形に属する。

床面は羨道に向けて下り傾斜となる。羨道は玄室の床面より約22cm低く造られており、長さ266cm、幅は玄門付近で102cm、羨門で112cmを測り、非常に細長い形状を呈する。側壁は床面から82cmまではやや外傾して立ち上がる。天井壁は一部剥離し、現存高160cm前後を測る。羨門付近は左右の側壁が異なり、明確には形成されていない。床面は、前庭に向けて下り傾斜となる。

前庭は長さ264cm、幅は154～194cmを測り、入口附近で広がる形状を呈するが歪つてある。側壁は外傾し、北側壁の床面は徐々に湾曲して2号横穴墓の前庭へ、南側壁の床面はまっすぐ西方向へ延びる。床面は、前庭の入口に向けて下り傾斜で、羨門から320cmのところで急傾斜となる。

土層の堆積状況について、縦断面セクションをみると玄室から羨道にかけての土層と前庭の土層とでは流れ込みの方向が逆方向になっていることがわかる。玄室から羨道にかけては、床面に白黄色土層から暗黄色土層までが約40cmの厚さではば均一に堆積する。その後外部からの流れ込みの土砂とみられる明黄色土層、明茶黄色土層、淡白黄色土層が堆積している。前庭では羨道の天井が前庭方向に崩壊したためにすでに堆積していた前庭の土

砂が押し流された状況である。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	須恵器	蓋3	坏3	高坏1	短頸壺1	魁1
羨道	鉄製品	刀子2				
	須恵器	蓋1		坏1		
前庭	玉類	勾玉1				
	須恵器	蓋6		坏4	小形高坏1	長頸壺2

玄室からは床面中央部に集中して須恵器9個体が出土した。その器種はバラエティに富んでいる。蓋は口径11.25cmの蓋坏の蓋部、乳頭状のつまみの付いた小形の蓋、短頸壺の蓋と考えられ小形で稜線のしっかりしたものとがある。坏は口径8.9cm～9.9cmの蓋坏の坏部がある。高坏と魁は小形のもので、高坏の坏部は深く、脚部は二段二方向の透しを有するもの、魁は口縁部が外反し、脚部は小作りのものである。短頸壺は器高12.45cm、胴部最大径14.2cmで口縁部径が小さいものである。これらは出土状況から一括遺物と考えられる。

羨道からは刀子2と須恵器2が出土した。刀子2のうち1つは調査中の不手際で粉失したが、残る1つは刀身部のみ残存している。出土位置は羨道の北側壁寄りで床面から約16cm浮いていた。須恵器は口径11.4cmの蓋坏の蓋部と、口径10.0cmの坏部がやはり北側壁寄りで出土した。これらは白黄色土層に存在した。

前庭からは勾玉1と須恵器13個体が出土した。勾玉は羨門付近の南側壁寄りで床面からやや浮いた状態で出土した。須恵器は口径10.0cm前後の蓋坏の蓋部2、乳頭状つまみ付で小形の蓋、輪状のつまみ付でかえりを有する大形の蓋、輪状のつまみ付でかえりの無い蓋、かえりを有する蓋の口縁部の破片2、口径9.0cm前後の蓋坏の坏部2、高台付坏2、小形でグラス型の高坏、長頸壺と長頸壺の口縁部の破片が出土した。出土位置は明確にしていないが、大半は、黒色土層と黒黄色土層から出土したものである。

#### (4) 4号横穴墓

本横穴墓は3号横穴墓の南側に位置し、南西方向に開口している。羨門部分の標高は約15mとなる。玄室の残存状況は良好であるが、羨道は天井壁が剥離しているため、玄室との境が不明瞭である。また、羨門付近の天井も大きく崩壊している。

玄室の平面プランは、奥行き230cm、横幅は奥壁付近で186cm、玄門付近で170cmを割り、縦長の長方形を呈する。奥壁はやや内傾して立ち上がる。前壁は不明である。側壁は内湾して、そのまま天井に至る。天井は中央に稜があり、高さ104～110cmを測る。玄室は横断面が三角形を呈し、いわゆる妻入テント形を有する。床面は奥に向かって3段と高く地山を

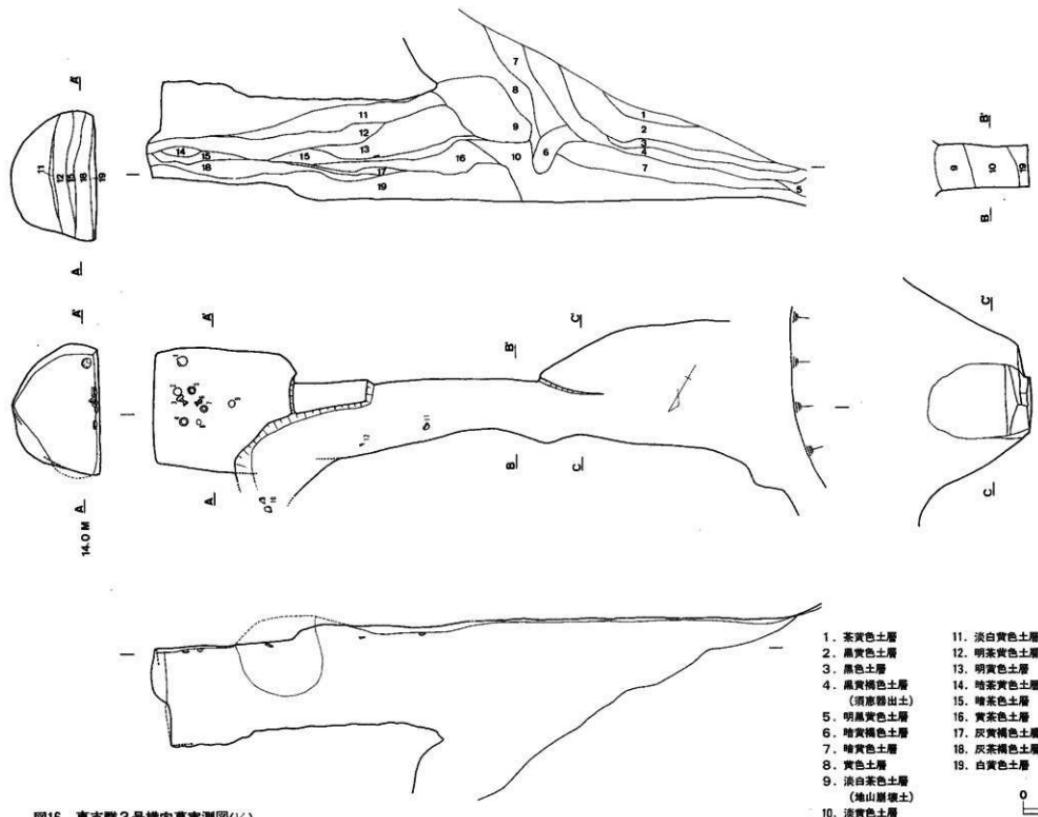


図16 東支群3号横穴墓実測図(16)

を掘り残し、周間に溝を設けている。上段の幅は68cm、中段は72cm、下段は78cmを測り、高くなるに連れて幅が狭くなっていることが判る。各段の段差は、上段と中段とでは10cm、中段と下段とでは8cm、下段と羨道の床面とでは8cmを測る。溝は上段の北側壁際を除き、各壁の周囲に巡らされており排水溝の役目をしていたものと考えられる。

羨道は長さ340cm、幅は玄室の入口付近で100cm、中央付近の狭いところで72cm、羨門で160cmを測る。平面形は玄室の入口から次第に狭くなり、中程から脇張りをもって羨門に至る形となる。側壁は外傾気味に立ち上がり天井に至るが、天井壁は剥離しているために形状は不明である。天井の現存高は110cmを測る。床面は、前庭に向けてわずかに傾斜する。

前庭は長さ324cm、幅は166cm～220cmを測り、前庭入口に向けて広がる形状を呈する。側壁は外傾し、北側壁の床面は湾曲して3号横穴墓の前庭の上部に、南側壁の床面は屈曲して5号横穴墓の前庭へと延びる。床面は前庭入口に向けて緩やかに傾斜し、羨門から3.8mの所で急傾斜となる。また床面には人頭大の石とやや小さい石がセットで2対出土した。出土状況から原位置とは思われない。

土層の堆積状況をみると、羨道から前庭にかけての地山面に厚く淡茶黄色土層が堆積していることがわかる。この土層は軟質で地山と似た色調であるため、周辺の地山が風化して堆積したものと思われる。玄室内にはこれも地山に似た色調の黄白色土層、黄色土層、白黄色土層が流れ込んでいる。その上に羨道の天井壁崩壊土（淡黄茶色土層）が覆いかぶさる形となる。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	銅製品	耳環3
	鉄製品	刀子2
	須恵器	蓋3 壱1
羨道	須恵器	壺2
前庭	須恵器	蓋2 壱1 小形高壺1 短頸壺1 平瓶1 壺2

玄室からは金貼りした耳環が3ヶ所から出土した。1つは上段と中段との間で出土した。出土状況からおそらく原位置ではないものと思われる。1つは中段の入口寄りで頭蓋骨に伴っていた。1つは中段の入口寄りで下段との境あたりであった。刀子のうち1つは調査中に紛失したが、出土位置は下段の南側壁寄りであった。残りの一つは、上段の北側壁寄りで耳環の近くで出土した。須恵器は中段の南側壁寄りに4個体が集中していた。いずれも床面に伏せた状態で3ヶ所あり、その内の1つは蓋2つが入れ子式に重ねてあった。こ

の付近には頭蓋骨が遺存していた。

羨道からは、壙2が中央付近と羨門の床面から出土した。羨門出土の壙から23cm離れて壙が1つ出土した。この2つは床面に並べて置いた状況である。

前庭からは、主に茶黒色土層と黒黄色土層から須恵器が出土したが、短頸壺と伴出した蓋は淡茶黄色土層の高い位置から出土した。蓋の1つは肩部以下を欠き、他の1つは口縁部と腹部下部を欠くもので散在していた。

#### (15) 5号横穴墓

本横穴墓は4号横穴墓の南側に位置し、南西方向に開口している。羨門部分の標高は約15mとなり、4号横穴墓とはほぼ同じ高さにある。玄室の残存状況は比較的良好であるが、羨道は天井が大きく崩壊し倒壊状を保っていない。

玄室の平面プランは、奥行き224cm、横幅は奥壁付近で196cm、玄室入口付近で162cmを測るが、北側壁が内側に垂んだ形となる。奥壁はやや内傾して立ち上がり、前壁は不明である。側壁は内湾して丸い天井に至る。天井の高さは95cmを測る。玄室は、横断面がアーチ形を呈し、いわゆるカマボコ形に属するものである。床面は奥から羨道方向へ緩やかに傾斜する。床面の周囲には壁に沿って溝を巡らし、排水溝を設けている。

羨道は長さ234cm、幅は玄室入口付近で104cm、羨門で138cmを測り、前庭に向って広がる形状を呈する。側壁は130cm前後まではやや外傾して立ちあがる。天井は崩壊しているが、玄室側で現存高126cmを測る。床面はほぼ平坦で、玄室より一段低く造られている。

前庭は長さ450cm、幅は152~186cmを測り、中程でやや膨らみ前庭入口付近で狭くなる形状を呈する。側壁は外傾し、北側壁の床面は屈曲して4号横穴墓の前庭へ、南側壁の床面はまっすぐ延びる。床面は前庭入口に向けて傾斜し、羨門から380cmの所で急傾斜となる。

土層の堆積状況を見ると、まず羨道から前庭にかけての床面に周囲の地山の崩壊土（淡茶黄色土層）が最高100cmの厚さで堆積している。その後玄室内に流れ込みの土砂が天井近くまで黄褐色土層と褐色土層が交互に堆積する。前庭では、黒色土層が淡茶黄色土層上に堆積した後、羨道の大井崩壊土が覆いかぶさる形となっている。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	須恵器	蓋4	壙6
	土師器	壙1	
前庭	須恵器	蓋2	壙4 長頸壺1
	土師器	壺1	

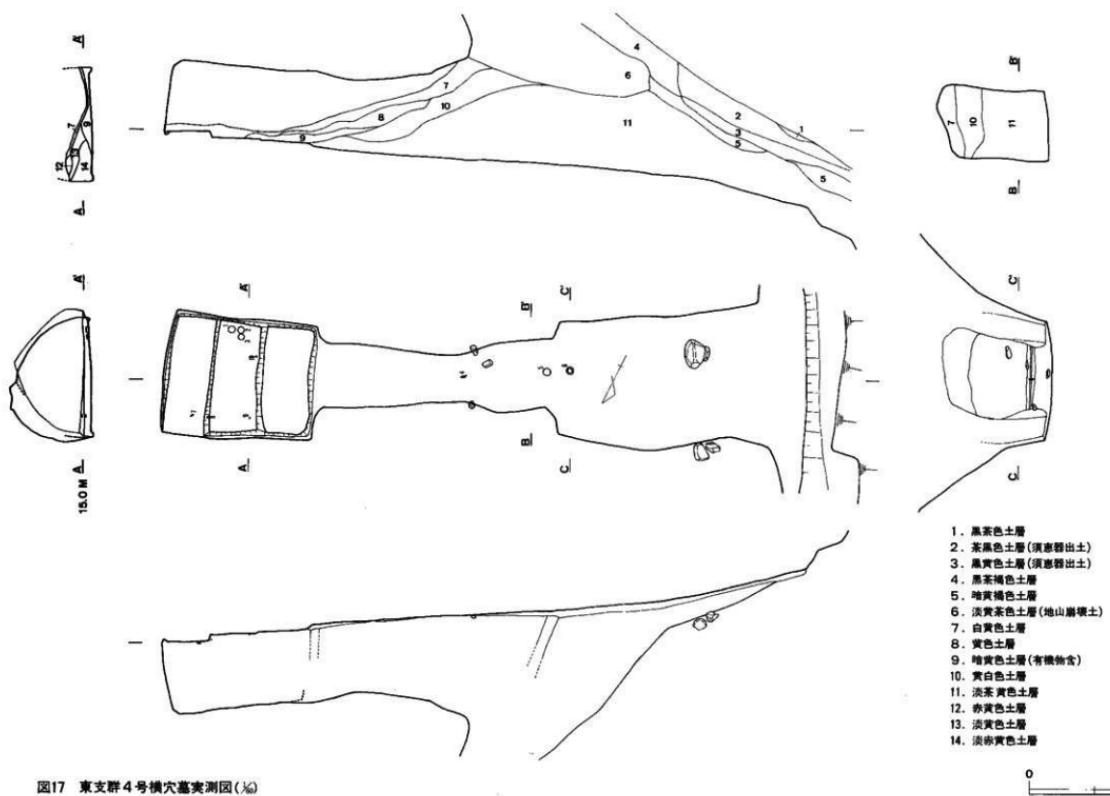


図17 東支群4号横穴墓実測図(%)

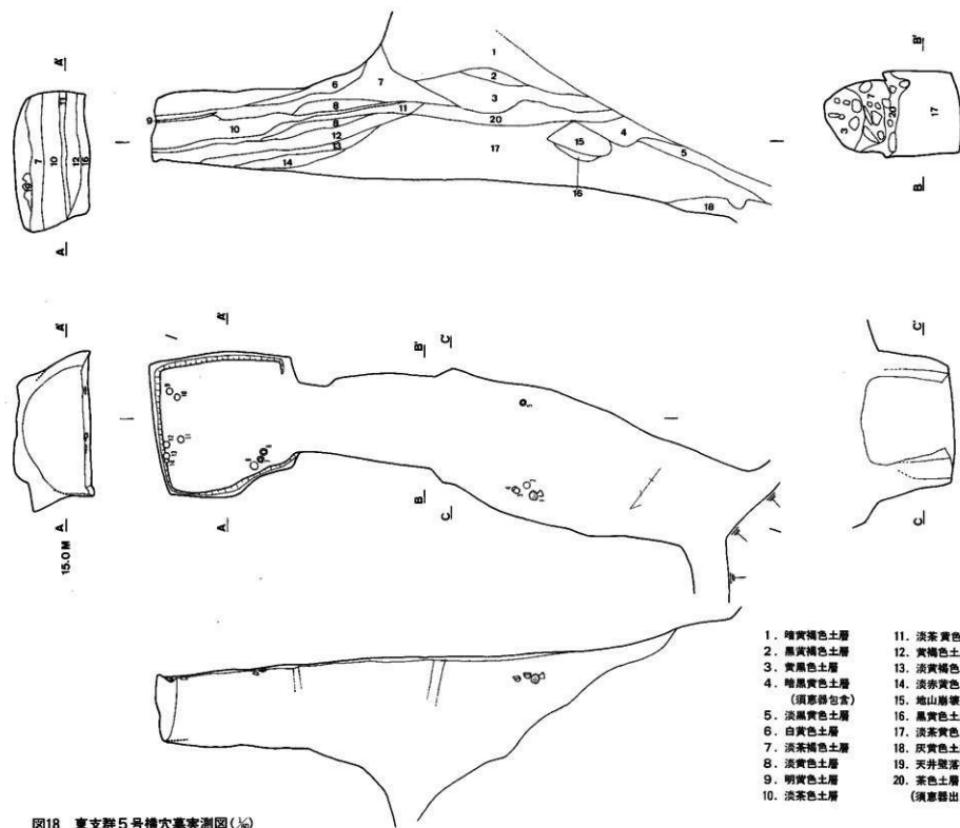


図18 東支群5号横穴墓実測図(1/500)

玄室からは、須恵器蓋4、坏6、土師器坏1個体が玄室入口付近北壁際と奥壁際北寄り及び南寄りの3ヶ所からいずれも床面直上より出土している。須恵器蓋は口径9~10cmのやや厚手で小形のものと、11.2cm前後の比較的大形のものに分れる。(6)、(10)は口縁部内面に凹線を有し、(6)は天井部外面に笠記号「×」をもつ。(8)は口縁部と天井部の境に広く浅い凹線が入り段がつく。坏は口径7.75~8.9cmの小形でたちあがりが低いものと、9.5~9.8cmでたちあがりがやや高いものに分れる。(12)はたちあがりが受部より低い。(9)は底部内面にベンガラが付着している。(13)は底部が浅くやや平らである。土師器坏は厚手で口径10.9cmを測る。外面ハケ目、内面にナデ調整を施す。

前庭からは、北壁寄りと南壁寄りの2ヶ所から須恵器蓋2、坏4、長頸壺1と土師器壺片がいづれも茶黄色土層より浮いた状態で出土した。蓋と坏は入了式で出土しており、(3)と(4)、(2)は蓋を下に伏せた状態で、(5)はもう1個の坏を下にして上向きで出土した。蓋は厚手で口径9.9~10.65cmを測り、口縁部はやや内湾する。坏は口径8.7~9.9cmを測り、たちあがりは低い。(4)は受部と同じ高さである。(5)は内面にベンガラが付着している。(5)の下の坏はたちあがりがほぼ垂直になる。出土状態からみて、(3)と(4)、(2)とその下の蓋はセットになるものと考えられる。長頸壺は横転した状態で出土した。口径6.54cm、肩部最大径13.4cmを測り、肩部にカキ目、体部下半は回転削り調整を施す。土師器壺は、口縁部から肩部にかけて「く」の字状になり、内面は箒削りにより仕上げている。

#### (6) 6号横穴墓

本横穴墓は、5号横穴墓の南側に隣接し、西南西に開口している。

この横穴墓は、太平洋戦争時に構築された防空壕により破壊されており、詳細は不明である。

なお、前庭部と考えられる位置の堆積土より石錠（安山岩製）1が出土しているが、前述したように防空壕構築時に土砂が搅乱されているため、本横穴墓に関するものかどうかは不明である。

#### (7) 7号横穴墓

本横穴墓は6号横穴墓の南側約2.5mに位置し、西南西に開口している。玄室の入口部分の標高は16.2mを測り、東支群では最高所に位置する。漠道の一部と前庭部は崖崩れのため既に崩壊していた。玄室の天井も調査中に傾斜に落盤があり、危険なため充分な調査はできなかった。玄室には2片の四肢骨片が遺存していた。

玄室の平面プランは台形状を呈し、奥行き15.5cm、横幅は奥壁付近で17.3cm、玄室の入口付近で15.4cmを測る。奥壁は床面から3.8cmまで外傾し、その後内傾して天井に

至る。前壁は崩壊しており不明である。側壁は内湾して丸い天井に至る。玄室は横断面がアーチ形を呈し、いわゆるカマボコ形と呼ばれる天井形態を示す。高さは中央部で104cm、奥壁部分で90cmを測る。床面には、奥壁および南側壁にそって排水溝と考えられる、深さ10cm前後の溝を掘り込んでいる。

羨道は前述したように一部崩壊していたため詳細は不明であるが、現存している玄室の入口部分で幅90cmを測る。床面は玄室に向ってゆるやかな登り勾配になっている。玄室に向って幅10cm前後の溝が検出されたが、これは小動物などによる擾乱と考えられる。

前庭は崖崩れのため消失しており不明である。

堆積した土層についてみると、羨道から玄室にかけて黄茶色土層、暗灰黄色土層、黄色土層、黒黄色土層、暗黄色土層が整然と堆積していた。これは閉塞施設の破損に伴い封土が流入し、その後崖崩れのため羨道が崩壊し土砂が流入したものと考えられ、七層による追跡面は確認できなかった。

本横穴墓は遺物が全く検出されなかったため築造時期は不明である。

#### (8) 8号横穴墓

本横穴墓は7号横穴墓の南側約2mに位置し、西北西に開口している。羨門部分の標高は15.8mを測る。前庭の一部が7号横穴墓と同様に崖崩れにより消失していた。玄室には頭骨片と歯牙が若干遺存していた。

玄室の平面プランは、奥行き190cm、横幅は奥壁付近で178cm、玄室入口付近で168cmを測り、やや縦長の長方形を呈する。奥壁はかなり内傾する。前壁は崩壊しており不明である。側壁は、北側が崩壊しているが、旧状を保つ南側はゆるやかに内湾して天井に至る。玄室は横断面が三角形を呈し、いわゆる妻入テント形を呈する。高さは、奥壁付近で108cmを測る。玄室入口付近は、一部剥落しているものの南側壁から見て高さ120cm前後になるものと思われる。床面は、周囲に排水溝と考えられる幅10cm前後、深さ4~6cmの深い溝を掘り込んでいる。

羨道は、長さ220cm、幅は玄室入口付近で120cm、羨門付近で85cmを測り、玄室に向って広がる形状を呈する。側壁は、比較的旧状を保つ南側壁では、床面から40cmまでは垂直に立ちあがり、その後内湾して天井に至る。天井は丸天井が想定される。羨門は、北側が崖崩れのため消失しているが、南側に若干のアクセントをもつ。床面には板材を嵌込んだものと思われる深さ6cm前後の溝が掘り込んである。

前庭は、羨門北側から南側入口付近まで消失しており詳細は不明である。現存する部分についてみると、羨門から入口にかけて広がる形状を呈している。側壁は外傾し、南側壁

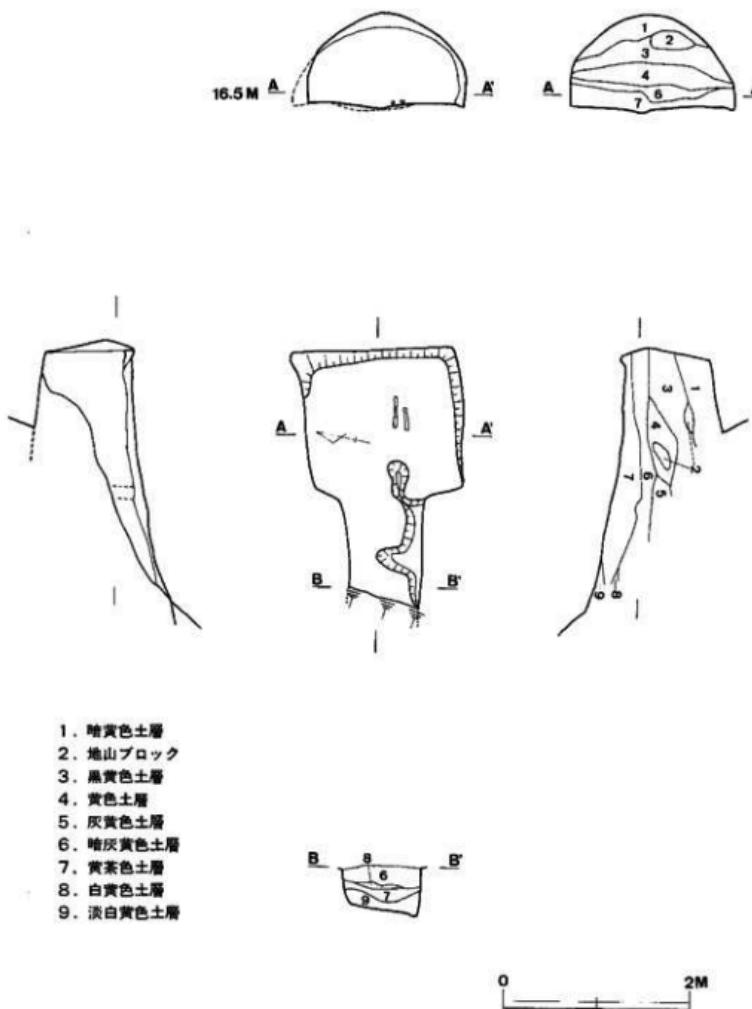


図19 東支群7号横穴墓実測図(%)

は9号横穴墓の北側壁に連なる。床面は玄室に向ってゆるやかな登り勾配となる。

堆積した土層についてみると、羨道から玄室にかけて黄茶色土層、明茶色土層、天井壁崩壊土が整然と堆積していた。これらの上層から追跡の有無は確認できなかった。

玄室の南壁には壁面を掘削調整したと考えられるU字状の痕跡が認められる。奥壁付近では中央より奥壁に向って斜め下方向、中央では下方向に、前壁付近では中央より前壁に向っての横方向及び中央に向って横方向の大きな削りと、前壁と側壁の界線を明確にするための前壁に向って小さな削りが認められる。掘削、調整用工具はいづれも幅が12cm前後である。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室 須恵器 蓋1 坯6

羨道 須恵器 蓋1

玄室からは、奥壁際のやや南より蓋1、坯1個体が、前壁南際より坯5個体が出土している。(2)と(3)以外は全て伏せた状態で出土した。蓋(1)はやや小形で口径10.2cmを測り、天井部には粗いナデ仕上げを施している。坯(2)は口径9.0cmを測り、たちあがりは低い。口縁部と底部の境に一条の凹線を有する。(1)とセットになるものと思われる。(3)、(6)は口径9.0~10.1cmを測り、立ちあがりはやや高い。底部外面に梵記号「/」、(6)は自然軸が付着している。(4)、(5)は口径9.0~10.0cmを測り、たちあがりは低い。口縁部と底部の境に浅い凹線を有し、底部外面に粗いナデ仕上げを施す。(7)は口径9.2cmを測り、たちあがりは受部より低い。底部内面にヘラ記号「/」、外而是粗いナデ仕上げを施す。

羨道からは、羨門部黄茶色土層より坯1個が出土している。口径は9.0cmを測り、たちあがりはやや高い。外面に白色の自然軸と須恵器片が付着している。

#### (9) 9号横穴墓

本横穴墓は8号横穴墓の南西側約2mに位置し、北西に開口している。羨門部分の標高は15.5mを測る。玄室北側の中央部に四肢骨の一部が遺存していた。

玄室の平面プランは、奥行き194cm、横幅は、奥壁付近で150cm、玄室入口付近で148cmを測り、縦長の長方形を呈する。奥壁はやや内傾して天井に至る。前壁は崩壊しており不明である。天井はかなり崩壊しているが、高さは奥壁部分で90cmを測り、中央部は比較的残りの良い所で94cmを測るので、それに近い数値になるものと思われる。玄室の形態は、奥壁からみて横断面がアーチ形を呈するいわゆるカマボコ形が想定される。側壁はかなり崩壊しており不明である。床面は羨道との境界と考えられる玄室入口部分で高さ12cm前後の段がつく。周囲には排水溝と考えられる幅8~16cm、深さ8cm前後の溝が掘り込まれてい

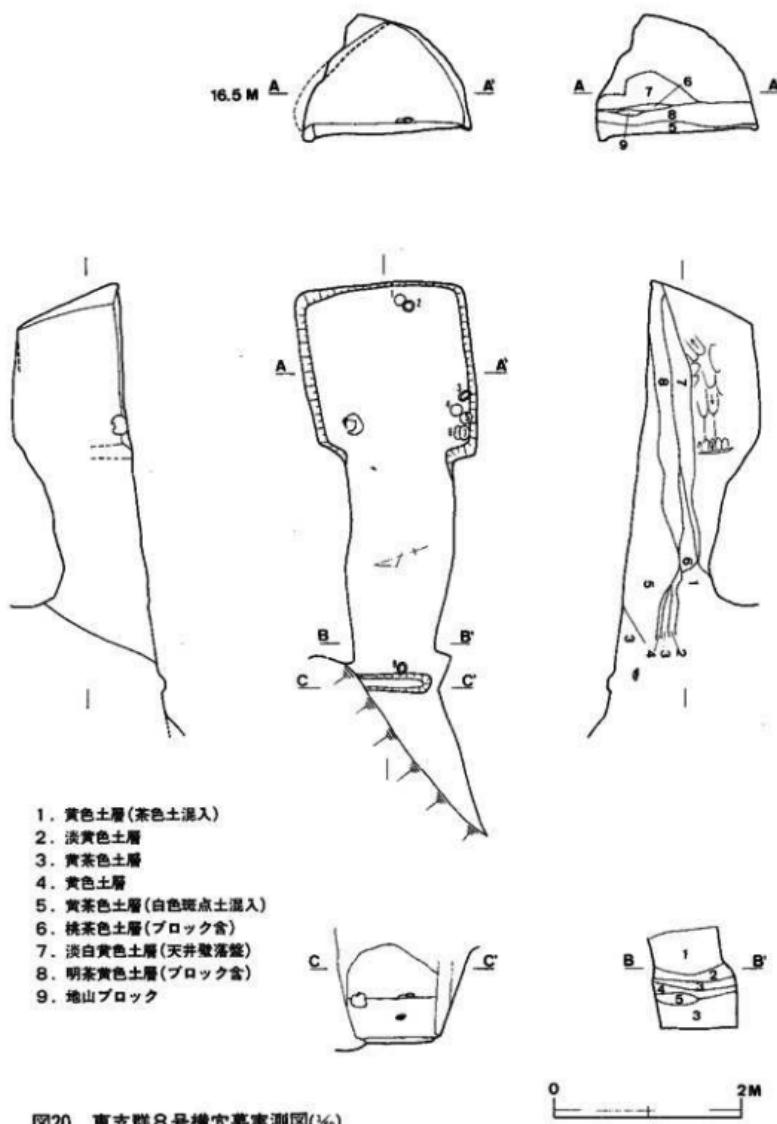


図20 東支群8号横穴墓実測図(%)

る。

羨道は、長さ140cm、幅は玄室入口付近で96cm、羨門付近で84cmを測り、玄室に向ってやや広がる形状を呈する。側壁は床面から50cm位まで垂直気味に立ちあがり、その後内湾する。天井は崩壊しているものの、側壁の形態から高さは玄室入口付近で80cm前後になるものと思われる。天井形態は丸天井が想定される。羨門は単純構造を呈し、閉塞に伴う施設は検出されなかった。

前庭は、長さ120cmと短い。これは、地山がかなり急傾斜になっており、長く掘り込む必要がなかったためと考えられる。幅は羨門付近で116cmを測り、入口部分で広がる。床面は玄室の入口までゆるやかな登り勾配となる。

堆積した土層について見ると、前庭から玄門にかけて黄色土層、茶黄色土層が、玄室には黒茶色土層、黄色土層、淡白黄色土層が整然と堆積しており、土層縦断面からは追葬の有無を確認できなかった。

玄室南壁上部には、壁面を掘削調整したと考えられるU字状の痕跡が僅ながら認められた。いずれも玄門方向から奥壁に向かっての削りであり、奥壁部分では側壁との界線を明確にするための小さな削りとなっている。工具の幅はいずれも10cm前後である。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室 銅製品 耳環4

銅製品 刀子1

須恵器 蓋1 坯2

羨道 須恵器 蓋1

前庭 須恵器 蓋2 坯2 麦片1

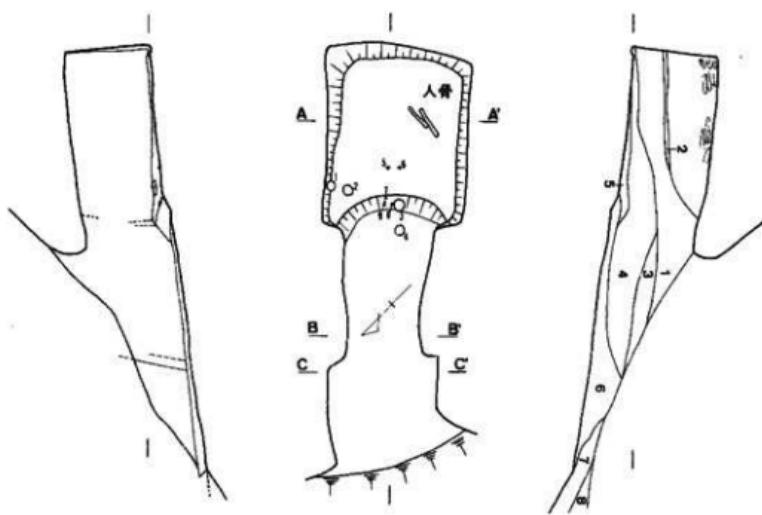
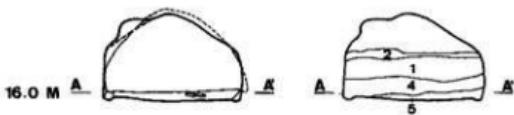
玄室から出土した遺物は、玄門付近の北壁際と中央部からの2か所より出土している。

(1)と(2)は床面直上より、(3)は玄門部についた段の黒茶色土層より出土した。蓋は口径11.2cm、坯は9.4~9.9cmと小形である。天井部及び底部はヘラ切り後粗いナデ調整をしており、技法上の大きな変化は見られない。(1)と(2)はセットになるものと思われる。

銅製品としては、金箔が若干残る耳環4個がいずれも中軸線上の黒茶色土層から出土している。(7)と(8)は玄門部にある段から立った状態で出土した。

銅製品としては、刀子1が玄門部にある段の黒茶色土層より出土しているが、切先部を欠いている。柄部には木質が若干残存する。

羨道からは、蓋1個が玄門部の茶黄色土層(ブロック含む)より伏せた状態で出土した。



1. 淡白黄色土層(ブロック含)
2. 天井盤落盤土層
3. 茶黄色土層
4. 茶黃色土層(ブロック含)
5. 黒茶色土層(遺物含)
6. 黄色土層
7. 明黄赤土層
8. 赤茶色弱粘質土層

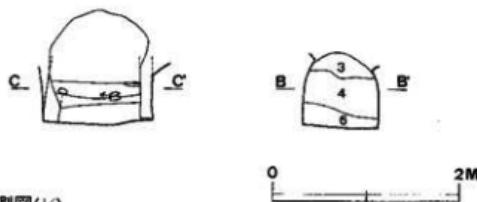


図21 東支群9号横穴墓実測図(3)

口径は11.4cmを測り、玄室出土の須恵器と技法上の大きな変化は見られない。

#### 10 10号横穴墓

本横穴墓は、9号横穴墓の西側約4mに位置し、北々西に開口している。羨道部の標高は14.2mを測る。玄室の天井及び側壁の一部は剥落していたが、本文群の中では比較的保存状態は良好である。

玄室の平面プランは方形を呈し、奥行き178cm、横幅は奥壁付近で168cm、入口付近で180cmを測る。奥壁は、内傾してたちあがり天井に至る。前壁も内傾する。側壁はやや内湾する。天井形態は、横断面が三角形を呈しており、いわゆる妻入テント形を示している。床面は、ほぼ3等分した形で左右に屍床が認められた。これは、床面より6~8cm高くすることにより屍床を明確に浮きあがらせている。なお、東側の屍床には人骨が遺存していた。

羨道は、長さ280cm、幅は玄室の入口付近で95cm、羨門付近で78cmを測り長方形を呈する。側壁は垂直気味に70cmほどたちあがり、その後内湾して天井に至る。高さは玄室の入口付近で82cm、羨門付近で93cmを測る。天井形態は丸天井が想定される。羨門は2重構造で、床面には板材を嵌込んだものと思われる深さ10cm前後の溝が掘り込んである。側壁は45cmまではほぼ垂直にたちあがり、その後外傾する。床面は玄室入口付近までゆるやかな登り勾配となる。

前庭は、長さ144cmと短く、幅は羨門付近で140cm、入口付近で157cmを測る。床面は登り勾配となる。

堆積した土層についてみると、羨道から玄室にかけて白灰黄色土層が14~26cmの厚さで堆積していた。この白灰黄色土層の上に、淡黄色土層、茶色土層、灰褐色土層が堆積している。のことから、初葬時における埋戻し、さらには、その後の追葬が考えられる。つまり、初葬後、白灰黄色土により埋戻しを行ない、追葬時に淡黄色土層を掘削し、その際に、茶色土層および灰褐色土層が流れ込んだものと推定できる。

なお、検出された遺物は次のとおりである。

玄室 須恵器 盖1 坯2

前庭 須恵器 坯片2 長片1

上記のとおり、本横穴墓に伴なう遺物は少数である。玄室から出土した蓋(2)は、小形で口径9.5cmを測り、口縁部はやや内傾する。坯(1)は、口径9.5cmを測り、底部外側を回転ヘラ削りにより仕上げている。坯(3)も小形で口径9.1cmを測り、たちあがりは高く、受部はやや上方にのびる。

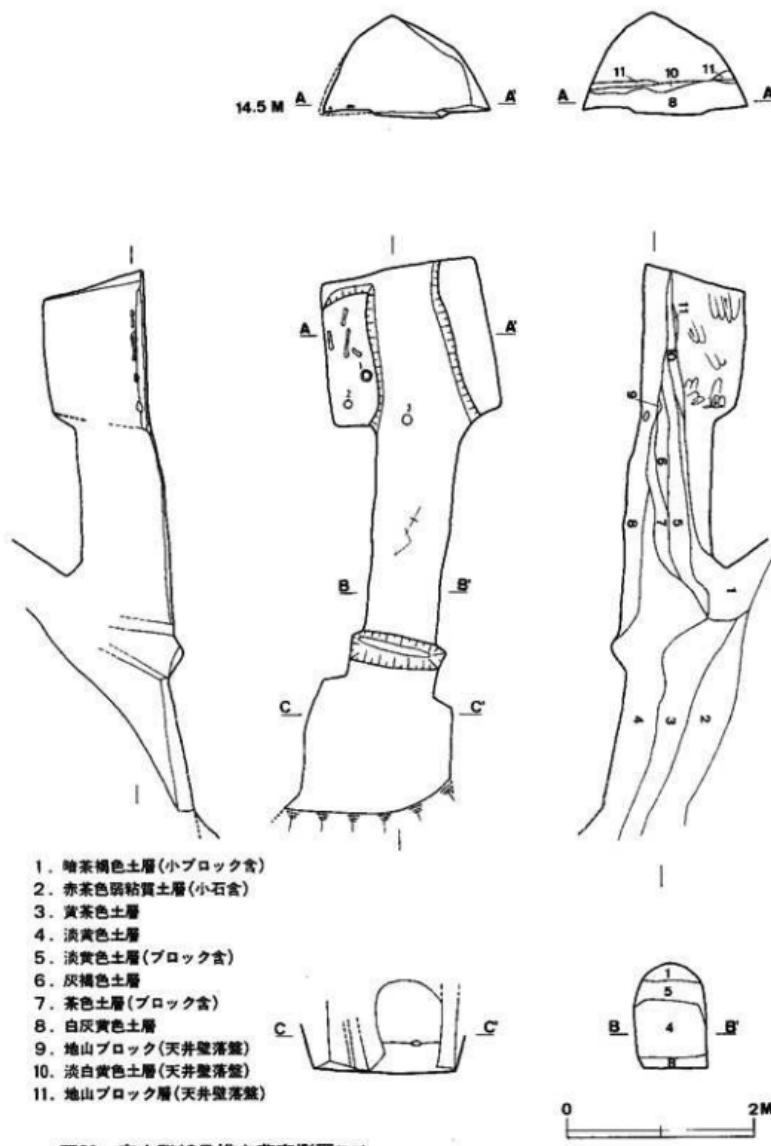


図22 東支群10号横穴墓実測図(%)

前庭の出土遺物は、いずれも淡黄色土層から出土した。

#### 11 11号横穴墓

本横穴墓は、10号横穴墓の西方約3.5mに位置し、北々西に開口している。羨道中央部の標高は13.2mを測る。玄室および羨道はかなり崩壊していた。

玄室の平面プランは方形を呈し、奥行き205cm、横幅は奥壁付近で190cm、入口付近で170cmを測る。奥壁は外傾しているが、前壁は崩壊しており不明である。側壁と天井も崩壊していたため不明である。床面は水分をかなり含んでいた。

羨道は、現存部分で長さ202cm、幅は玄室の入口部分で95cmを測り長方形を呈する。側壁および天井は、崩壊していたため、その形態は不明である。床面は玄室同様に水分をかなり含んでいた。

羨門および前庭は検出されなかった。これは、座崩れによるものか、あるいは、後述する12号横穴墓のように、初めから羨道と前庭の区別を明確に構築しなかったものかどうかは不明である。

堆積した土層についてみると、羨道部では、黄茶色土層の上に地山崩壊土と思われる白色土層が堆積していた。また、玄室については、淡黄色土層の上有機質を含んだ灰黑色土層が厚く堆積していた。

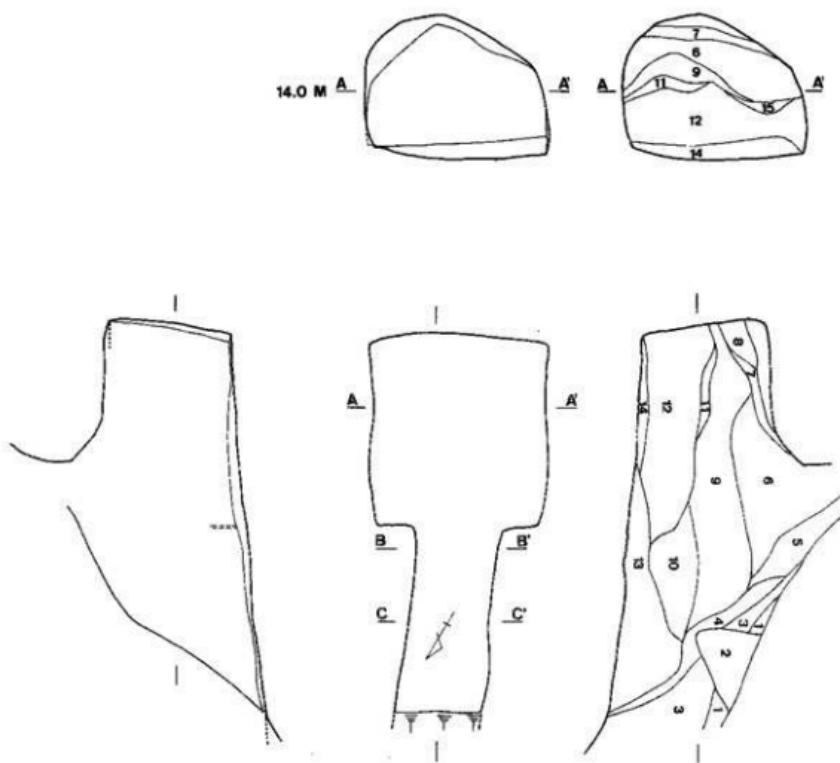
遺物は、黄茶色土層より須恵器費片が1片出土したにすぎず、本横穴墓の時期判定の資料にはなり得なかった。

#### 12 12号横穴墓

本横穴墓は、南西方向に張り出したU字状の谷の先端部に位置し、北々西に開口している。羨道部分の標高は12.9mを測る。玄室の側壁および天井はかなり崩壊していた。

玄室の平面プランは、やや胴張りのある方形を呈し、奥行き120cm、横幅は奥壁付近で108cm、入口付近で118cmを測り、規模は本支群中最小である。天井、奥壁および前壁は崩壊しているためその形態については不明瞭である。側壁は、中央部分で、堆積していた土層より40cm前後までは垂直気味にたちあがると推測できるが、その上部は不明である。床面は、入口部分で羨道との境界であると思われる高さ10cm程の段がみられる。なお、玄室から前庭に至る床面は、かなりの水分を含んでいた。このことから、床面に認められた凹凸は、浸水および風化作用によるものと推測できる。

羨道と前庭の境は、平面プランでも、あるいは、堆積した土層でも確認できないため、側壁に残る界線によって一応の目安とした。それによれば、羨道は長さ58cm、幅は玄門部分で65cm、羨門部分で60cmを測り方形を呈する。側壁は崩壊しているものの、比較的旧状



1. 表土層
2. 掘乱
3. 茶黃色土層
4. 黄黑色土層
5. 黄黑色土層
6. 茶色土層(小ブロック含)
7. 天井壁落盤土層
8. 地山ブロック
9. 黄桃色土層
10. 白黄色土層(ブロック含)
11. 灰茶色土層(ブロック含)
12. 灰黑色土層(ブロック含)
13. 黄茶色土層
14. 淡黄色土層
15. 白灰色土層

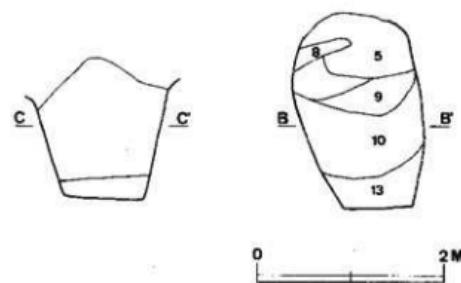


図23 東支群11号横穴墓実測図(%)

を保つ部分では、東側壁はやや外傾し、西側壁は内湾する。天井は崩壊しており、その形態は不明である。閉塞に関する施設は確認できなかった。

前庭は、長さ200cm、幅は45~60cmを測り、奥門に向ってやや広がる細長い形状を呈する。側壁についてみると、西壁は外傾するが、東壁は高さ46cmまで外傾し、その後屈曲して平坦面を形成するが、その後再び外傾し、隣接する11号横穴墓の奥道（前庭）の西壁に連なる。床面は玄室に向って登り勾配となる。なお、前庭部東側の高さ40~55cmのところに幅23~35cm、長さ150cmの長方形で性格不明の平坦面が確認された。

次に、堆積した土層についてみると、前庭から奥門付近まで茶灰色土層が、その上に暗茶褐色土層、白灰色土層（天井および側壁崩壊土）が玄室奥まではば平らに堆積し、これらの土層を前庭部中央付近で遮るように、茶色粘質土層、桃茶色土層が堆積していた。このことから、追葬が行われたと推測できる。つまり、茶灰色土層および暗茶褐色土層を掘削し、追葬を行った後に天井および側壁が崩壊し、さらには土砂流入があったと考えられる。

本横穴墓に伴う遺物は全く検出されなかった。

### 03 出土遺物

**土器** ここでは、須恵器の蓋と坏の形態の変化と技法上の特徴から下記の6つに分類した。分類番号は前回報告した西支群のI類からV類をそのまま利用し、新たな特徴をもつものはVI類以降を追加することにする（註1）。土器の詳細については、後掲に「出土土器観察表」を附したので参照されたい。

東支群の蓋坏は下記のII類からVII類に分類した。

**【II類】** 蓋3号（図版7-1・2）、4号（図版9-3）、9号（図版11-1）

蓋の天井部と口縁部との境は、不明瞭でわずかに凹線でそれとわかる程度である。天井部はやや平坦で、外面はヘタ切り後に指ナデ調整が施してある。

**【III類】** 蓋1号（図版6-1）、2号（図版6-9~11・15）、3号（図版7-3~6）、4号（図版9-1）、5号（図版9-13~16）、8号（図版10-12）、9号（図版11-2~4）、10号（図版11-9）、坏1号（図版6-4）、2号（図版6-17・18）、3号（図版8-1~6）、4号（図版9-5~8）、5号（図版10-1~8）、8号（図版10-15~19）、9号（図版11-5~8）、10号（図版11-10・11）

蓋坏ともに口径が10cm前後のものが多く、器形の矮小化が著しい。蓋の天井部は丸味をおび、口縁部は直行、外反、内湾など一定していない。坏は口縁部のたちあがりが短かく

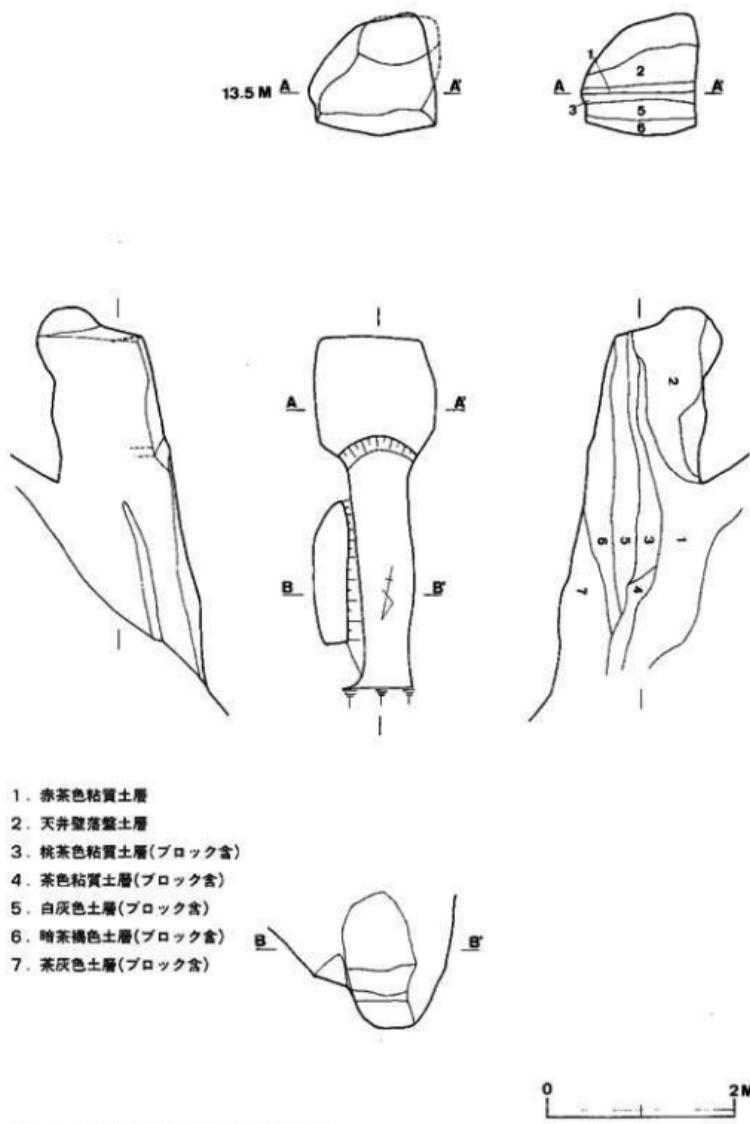


図24 東支群12号横穴墓実測図(1/20)

中には受部端上面より低いものもある。蓋坏ともに口径が10cm以下のものは、大きさの割に器壁が厚い。調整は〔II類〕と同様であるが、全体的に粗雑である。

【IV類】 蓋1号(図版6-3)、2号(図版6-12・13)、3号(図版7-9・10・12)、坏1号(図版6-5)、3号(図版8-7)

蓋では(図版7-9)以外はすべて破片である。破片は、天井部に輪状のつまみを有するものと、口縁部の内面にかえりのあるものに分けられる。(図版7-9)は、口径16.6cmの大形で、輪状のつまみを有する天井部は丸味をもち、外面にはヘラ削りを施してある。口縁部の内面のかえりは、口縁端部よりも下方へのびている。坏は、内湾する口縁部をもち、高台は直線的にやや外傾し、端部に面をもつものと、外傾し端部が丸いものとの2形態がある。

【V類】 蓋3号(図版7-13、3-11)

短頸蓋の蓋と考えられる。2個ともに小形品である。(図版7-13)は、ヘラ削りの施してある天井部と、口縁部の境に深い沈線が見られる。全体的には、古い様相を呈しており、稜のしっかりした丁寧な作りである。(図版8-11)は、天井部にヘラ削りが施してあるが、口縁部との境は不明瞭で、全体的には、やや簡略にした感がある。

【VI類】 蓋3号(図版7-7・8)、坏4号(図版9-2・4)

蓋坏ともに小形品である。蓋は、乳頭状のつまみを有し、天井部の外面にはヘラ削りが施してある。口縁部の内面のかえりは、口縁端部よりも下方へのびている。坏は、底部が平らで、外面には回転ヘラ切りで未調整の痕跡をとどめている。

【VII類】 蓋1号(図版6-2)、3号(図版7-11)、坏1号(図版6-6)、3号(図版8-8)

蓋は、やや平らな天井部に外傾する輪状のつまみを有し、口縁部の内面はかえりが無く、端部を下方に引き出している。坏は、外方へ大きくたちあがる口縁部をもち、高台は、外傾し端部が丸いものと、高くて端部が鋭いものとの2種類がある。

以上、各類の特徴を概括した。これを横穴墓ごとに整理すると次のようになる。

〔II類〕 3・4・9号横穴墓

〔III類〕 1・2・3・4・5・8・9・10号横穴墓

〔IV類〕 1・2・3号横穴墓

〔V類〕 3号横穴墓

〔VI類〕 3・4号横穴墓

〔VII類〕 1・3号横穴墓

また、上記の分類を陶込の須恵器編年にてはめると次のようになる(註2)。

- 〔II類〕 II型式第5段階
- 〔III・V類〕 II型式第6段階
- 〔IV・VI類〕 III型式第1段階
- 〔VII類〕 IV型式第1段階

これは、山陰の須恵器編年ではIV期に属し、7世紀前半以降ということになる(註3)。

**その他の遺物** 土器以外の出土遺物は質量ともに貧弱で、銅製品には耳環7、鉄製品には刀子3、玉類には勾玉1、石製品には石鏡1が出土している。

耳環は、いずれも銅芯に金を貼り付けているが、銅の腐食により金の残存状況は良くない。4号横穴墓から3個体の出土がある。(図版9-10)は、長径1.8cm、短径1.7cm、内径1.0cmで、間隙は1.0mmを測る。断面は楕円形で、長径0.55cm、短径0.4cmを測る。(図版9-11)は、長径2.2cm、短径2.1cm、内径1.3cmで、間隙は0.7mmを測る。断面は楕円形で、長径0.8cm、短径0.5cmを測る。(図版9-12)は、長径2.2cm、短径2.1cm、内径1.3cmで、間隙は2mmを測る。断面は楕円形で、長径0.8cm、短径0.5cmを測る。なお、(図版9-10)は、頭蓋骨の側頭部に密着して出土したものである。

9号横穴墓からは4個体が出土している。(図版11-12)は、長径2.2cm、短径2.0cmで、間隙は3mmを測る。断面は楕円形で、長径0.7mm、短径0.5cmを測る。(図版11-13)は、長径1.8cm、短径1.7cm、内径1.1cmで、間隙は2mmを測る。断面は楕円形で、長径0.6cm、短径0.4cmを測る。(図版11-14)は、長径1.9cm、短径1.8cm、内径1.1cmで、間隙2mmを測る。断面は楕円形で、長径0.6cm、短径0.35cmを測る。(図版11-15)は、長径2.3cm、短径2.1cm、内径1.35cmで、間隙は2mmを測る。断面は楕円形で、長径0.6cm、短径0.45cmを測る。

刀子(図版6-19)は、2号横穴墓から出土している。現存部分は、長さ7.5cm、身幅1.2cm、棟幅0.6cmを測る。刀身の先端は欠損し、柄部には木質が残る。(図版8-9)は、3号横穴墓から出土している。現存部分は、長さ6.3cm、身幅1.0cm、棟幅0.3cmを測る。刀身の基部以下が欠損している。(図版9-9)は、4号横穴墓から出土している。現存部分は、長さ3.6cm、身幅0.8cm、棟幅0.3cmを測る。刀身の基部以下が欠損している。(図版11-16)は、9号横穴墓から出土している。現存部分は、長さ5.5cm、身幅1.2cm、棟幅0.4cmを測る。これも刀身の基部以下が欠損している。

勾玉は長さ4.1cm、径0.9cmを測り、穿孔は一方からで、長径0.3cm、短径0.28cmを測る。めのう製で、乳白色に一部橙色が混じる。3号横穴墓出土である。

石鎌は安山岩質で、両側縁が二等辺を呈し、わたぐりの深い間基式である。長さ2.6cmの完成品で、6号横穴墓下方出土である。

(註1) 『平野横穴墓群発掘調査報告書I』(斐川町教育委員会・1983年)

(註2) 『海邑III』(大阪府教育委員会・1978年)

(註3) 山本清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』・1971年)

表15

部類 番号	器種	出版番号 写真番号	法量 cm	形態	技法	備考
横 穴 墓	蓋 (蓋)	6-1 44-1	口径: 10.8 器高: 3.8	口縁部はやや内湾し、端部は丸い。天井部は平坦。	天井部はヘラ切り後粗い仕上ナデ。他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土: 繊密 色調: 黄灰色 焼成: やや不良 口縁部に点文 羨道部出土
	環状 つまみ付 蓋	6-2 44-5	口径: 14.7 器高: 2.2	大形で環状のつまみをもつ。天井部はほぼ水平で、ゆるやかに内傾しながら口縁部にいたる。口縁部は外反し、端部は丸く、かえりをもたない。	回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土: 密 色調: 黄灰色 焼成: 普通 前庭部堆積土出土 一部外面に縦輪付着 1/2残存
	蓋	6-3 44-4	口径: 14.6	大形で、口縁部内面にかえりをもつ器高の低い蓋。 口縁部に一条の間縫をもち、端部は丸い。つまみの有無は不明。	回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: やや粗 (3mm以下の砂粒含む) 色調: 淡青灰色 焼成: 良好 羨道部出土 4個の破片で1/3残存
	蓋 (身)	6-4 44-7	口径: 9.7 受部径: 11.7	内傾するたちあがりは低く、端部はやや丸い。受け部は斜め上方へのび端部は丸い。底部は丸味をもつ。	底部外面はヘラ切り後仕上ナデ。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: 繊密 色調: 灰色 焼成: 良好 前庭部堆積土出土 1/2残存
	高台付 环	6-5 44-2	口径: 12.5 器高: 4.6	口縁端部は丸く、やや内湾しながら底部にいたる。底部は平坦で低い台がつく。	休部を整形し、ヘラ切り後高台をつくる。 ロクロ左回転。	胎土: やや粗 (3mm以下の白色砂粒含む) 色調: 暗灰色 焼成: 良好 前庭部堆積土出土

表16

器種 番号	器種 番号	回数番号 写真番号	法 量 cm	形 態	技 法	備 考
高台付坏 号	高台付坏 横	6-6 44-3	口径：13.7 器高：5.3	口縁端部は丸く、や 内側しながら底部 にいたる。口縁部か ら底部にかけて3条 の印線をもつ。底部 はやや丸い。高台は 端部を丸くおさめる。	体部外面はヘラ切 り。他は回転ナデ。 底部内面は不定方向 ナデ仕上。体部整形後高台をつ ける。 ロクロ右回転。	胎土：やや粗（3 mm以下）の白色砂 粒を含む） 色調：黄灰色 焼成：やや不良 窓道堆積土出土
高坏 穴	高坏 基	6-7 44-6	脚底径：6.7 残存高：5.3	基部から外湾気味に 下方方に下り、中央 部に一条の沈線を有 する。 端部上面に稜をもつ。	回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 色調：灰色 焼成：良好 前庭堆積土出土 脚部のみ残存
蓋坏 （蓋） 一 号	蓋坏 （蓋） 横	6-8 44-7	口径：13.4	口縁部は、外反した のち屈曲して再び外 上方へのびる。端部 は丸い。 体部には、凹孔スカ シ（径1.5）と2条 の沈線を有する。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 前庭堆積土出土 口縁部4%、脚部1/4 残存
蓋坏 （蓋） 一 号	蓋坏 （蓋） 横	6-9 44-9	口径：8.9 器高：3.5	小形。口縁部はやや 内落し、端部は丸い。 天井部は丸味をもつ。	天井部外面ヘラ切り 後粗いナデ。内面は 不定方向のナデ。他 は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土
蓋坏 （蓋） 穴	蓋坏 （蓋） 基	6-10 44-11	口径：10.5 器高：4.0	口縁部は内落し、端 部は丸い。 天井部はやや丸い。	天井部ヘラ切り後ナ デ仕上。他は回転ナ デ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄門部堆積土出土 一部に褐色自然釉 付着
蓋坏 （蓋） 一 号	蓋坏 （蓋） 横	6-11 44-10	口径：10.4 器高：3.8	口縁部は内落し端部 は丸い。天井部はや や丸味をもち、一些 の低い稜をもつ。	天井部外面ヘラ切り 後粗いナデ。内面は 不定方向仕上ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：やや粗（3 mm以下）の白色砂 粒、黒粒含む） 焼成：普通 色調：灰色 窓道堆積土出土 天井部外面上にヘラ 記号「X」
環状 つまみ付 蓋 一 号	環状 つまみ付 蓋	6-12 44-14		外傾するつまみは端 部を丸くおさめる。 つまみの中央に凸部 がある。	天井部外面回転ナデ。 内面不定方向ナデ仕 上。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭堆積土出土 天井部外面上にヘラ 記号「X」
		6-13 —	口径：12.0	口縁部はやや内落し、 端部の近くで屈曲し て水平にのびる。端 部は丸く、内側にか えりを有する。 かえりの端部はやや 丸味を有する。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：微密 焼成：良好 色調：淡灰色 前庭堆積土出土 口縁部4%残存

表17

器種	図版番号 写真番号	法量 cm	形態	技法	備考	
二号横穴墓	壺	6-14 44-8	体部最大径： 15.2	体部に4条の凹線を もち、最大径はほぼ 中位に求められる。	休部下半分までヘラ 削り。他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 前庭堆積土出土 休部から底部にかけて%残存
	蓋 坯 (蓋)	6-15 44-12	口径：11.2 器高：4.35	口縁部は内窓し、端 部はやや鋭い。内面 に指による浅い凹線 を有する。 天井部はやや丸い。	天井部はヘラ切り後 ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：黄灰色 前庭堆積土出土 %残存 黄褐色の自然釉付 着
	蓋 坯 (蓋)	6-16 44-13		天井部はほぼ平らで、 内面に指による浅い 凹線をもつ。	天井部外側ヘラ切り 後鋭いナデ仕上。 内面は指による不定 方向ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡灰色 前庭堆積土出土 天井部のみ%残存 天井部外側にヘラ 記号「X」
	蓋 坯 (身)	6-17 44-15	口径：7.85 受部径：9.5 器高：2.7	たちあがりは低く内 窓し、端部はやや鋭 い。受部はやや斜め 上方にのび端部は丸 味を有する。 底部は丸い。	底部ヘラ切り後ナデ 仕上ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 玄門部出土 外面%に灰釉付着
	蓋 坯 (身)	6-18 44-16	口径：9.45 受部径：11.55 器高：3.4	たちあがりは、外窓 味に内窓し端部は やや鋭い。 受部は外上方にのび 端部は丸味を有する。 底部は深く丸い。	底部外側ヘラ切り後 ナデ仕上。内面は指 による不定方向ナデ 仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：暗灰色 前庭堆積土出土 外面%に淡綠色の 自然釉付着
三号横穴墓	蓋 坯 (蓋)	7-1 -	口径：13.8 (推定)	口縁部は内窓し、端 部は丸い。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗灰色 前庭堆積土出土 口縁部%残存
	蓋 坯 (蓋)	7-2 -	口径：10.1 器高：3.6	口縁部はやや内窓し、 端部は丸味を有する。 天井部は平ら。	天井部外側ヘラ切り 後鋭いナデ。内面は 一方向ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗灰色 前庭堆積土出土 %残存
	蓋 坯 (蓋)	7-3 45-2	口径：11.25 器高：4.6	口縁部はやや内窓し、 端部は丸い。 天井部は深く丸味を 有する。 天井部と口縁部の間 に指による広い凹線 をもつ。	天井部外側ヘラ切り 後ナデ。内面は不定 方向の仕上ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：粗 6mm以下砂粒 含む 焼成：普通 色調：白灰色 玄門出土

表18

文書番号	器種	回収番号 写真番号	法量 cm	形態	技法	備考
三	蓋 壺 (蓋)	7-4 45-1	口径: 11.4 器高: 3.5	口縁部は、やや内傾し縁部は丸味を有する。天井部はやや浅く平ら。	天井部外面へラ切り後粗い調整。内面は指によるナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土: 細密 焼成: 良好 色調: 灰色 表面出上。
	蓋 壺 (蓋)	7-5 45-3	口径: 11.5 器高: 3.8	口縁部はやや内窓し、縁部は丸味を有する。内面に浅い凹窓と外面上にかすかに棱を有する。天井部はやや平ら。	天井部外面へラ切り後粗い調整。内面は不定方向ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土: やや粗 3mm以下砂粒 を含む 焼成: 普通 色調: 灰色 前庭堆積土出土。
	蓋 壺 (蓋)	7-6 45-4	口径: 11.5 器高: 3.8	口縁部は外傾し、端部は丸味をもつ。天井部はやや深く、丸味を有する。口縁部に浅い凹窓と、天井部との境に深い凹窓を一条ずつ有し、段がつく。	天井部内面不定方向ナデ仕上。外面は灰釉付着のため不明。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 暗灰色 玄室盪掘抗出土 天井部外面に灰釉付着。 天井部外面にヘラ記号「×」 口縁部にヘラ等による文様 少残存
横	蓋	7-7 45-5	口径: 8.1 口縁部径: 10.1 器高: 3.55	小形で、乳頭状のつまみと内側にかえりをもつ蓋。口縁部は外傾し、端部は丸味をもつ。天井部はやや丸味を有する。	天井部回転へラ削り後乳頭状のつまみをつけ、回転ナデによる調整。 他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 青灰色 玄室出土。
	蓋	7-8 —	口径: 7.1 口縁部径: 7.5 器高: 3.0	小形で、乳頭状のつまみをもつものと考えられる。口縁部は外傾し、端部は丸味をもつ。天井部はやや平ら。	天井部回転へラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土: 細密 焼成: 良好 色調: 青灰色 前庭堆積土出土 少残存 天井部外面に灰釉付着
穴	蓋	7-9 45-6	口径: 16.6 口縁部径: 18.8 器高: 3.3	かえりをもつ大形品で環状のつまみを有する。口縁部はやや外傾し、端部は丸い。天井部はやや丸味を有し、口縁部との中程に指による浅い凹窓を一条もつ。	天井部外面回転へラ削り。内面は不定方向ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土: 密 焼成: 普通 色調: 淡青灰色 前庭堆積土出土 少残存
	蓋	7-10 —	口径: 12.4 (推定) 口縁部径: 14.2 (推定)	つまみを有する蓋と考えられ、かえりをもつ。端部を丸くおさめた口縁部はやや内窓しながら天井部にいたる。	天井部外面回転へラ削り。内面は不定方向ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ回転方向不明。	胎土: 細密 焼成: 良好 色調: 淡青灰色 前庭堆積土出土 少残存

表19

器種 番号	器種 写真番号	法 量 <sub>cm</sub>	形 態	技 法	備 考
三 号	蓋 7-11 45-7	口径：15.2 (推定) 器高：2.1	大形品で環状のつまみを有する。 端部を下方にはば垂直に屈曲させた口縁部はゆるやかに内湾しながら天井部にいたる。 天井部は平ら。	天井部外側は均位まで回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗青灰色 前庭堆積土出土 馬残存
	蓋 7-12 —	口径：11.8 (推定)	かえりをもつ蓋。 口縁部は端部を丸くおさめる。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 前庭堆積土出土 馬残存 外面に自然釉付着
	蓋 7-13 45-13	口径：8.6 器高：3.3	口縁部はやや内傾し、 外面に一条の沈線を有する。端部はやや鋭い。 天井部はやや丸味を有し、口縁部との境に一条の沈線を有する。	天井部回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄空出土。
横 穴	低脚付坏 7-14 —	口径：6.9 (推定) 器高：5.2	外部はほぼ垂直にのび、端部はやや丸味を有する。 底部は深くやや平ら。 低い脚は内傾した後外方にのびる。	外底部外側回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭堆積土出土 馬残存
	高坪 7-15 46-7	口径：8.7 器高：10.0 脚底径：6.6	坏部はやや外傾し、 口縁端部はやや鋭い。 底部は平ら。 脚部は基部が細く外反して下り、端部近くで段を成し、下方に屈曲する。 脚部上段三角形二方向、下段長方形二方向のスカシをもつ。	坏底部外側回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 玄空出土 坏部内面に灰釉付着
蓋	7-16 46-1	口径：7.5 器高：9.1 体部最大径： 6.8	外反する口頭部は、 上方のところで外方へ屈曲し、さらに外上方へのびる。端部は丸い。 (口頭部の中央に2条の沈線をめぐらす。体部最大径は体部と肩部の間に有る。) ほぼ中央に円孔スカシ(径1.3)をもつ。体部に2条の沈線を有する。	底部より体部均位まで回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄空出土

表20

器皿番号	器種	出版番号 写真番号	法 量 cm	形 態	技 法	備 考
三 号	長頸壺	7-17 45-15	口径：8.5 器高：21.1 体部最大径： 14.9	口頭部は外反して上方にのび、頭部の中央に6条の沈線をめぐらした後、内均味する。口縁端部は丸い。肩部はゆるやかに内湾する。体部はほぼ中央に最大径をもつ。底部は平ら。	底部より体部迄まで回転ヘラ削り。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 前庭堆積土出土 口縁部及び肩部の一部欠損
	短頸壺	7-18 45-8	口径：6.3 器高：12.45 体部最大径： 14.2	外反して上方にのびる口頭部は短く口縁部は平面をなす。肩部はゆるやかに内湾する。体部上半に最大径をもつ。底部は丸味をもち、やや不安定。	底部より体部迄まで回転ヘラ削り。他は回転ナデ。ロクロ右回転。肩部にカキ目文様。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室山土 頭部基部から肩部にかけて灰釉付着
	長頸壺	7-19 —	口径：6.2 (推定)	口頭部はやや内湾する。端部はやや鋭い。	回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 前庭堆積土出土 口縁部のみ1/3残存
横 蓋 (身)	蓋 (身)	8-1 45-10	口径：9.9 受部径：12.5 器高：3.3	内傾するたちあがりは低く、端部はやや丸い。受部は外上方へのび端部は丸い。底部はやや平ら。	底部回転ヘラ切り後ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：やや不良 色調：白灰色 玄室出土
	蓋 (身)	8-2 45-11	口径：10.0 受部径：12.6 器高：3.6	内傾するたちあがりは低く、端部は脱い。受部はやや外上方へのび端部を丸くおさめる。底部は丸い。	底部回転ヘラ切り後粗いナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 矣道出土 口縁部一部欠損
穴 蓋 (身)	蓋 (身)	8-3 —	口径：9.2 受部径：11.4 器高：4.7	内傾するたちあがりは端部を丸くおさめる。受部は外上方へのび端部は丸い。底部は丸味をもつ。	底部回転ヘラ切り後ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 前庭堆積土出上 1/3残存
	蓋 (身)	8-4 —	口径：9.4 受部径：11.5 器高：3.4	やや外反するたちあがりは、端部を丸くわきめる。受部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。底部はほぼ平ら。	底部外面ヘラ切り後ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：粗 5mm以下の砂粒 含む 焼成：普通 色調：淡灰色 玄室出土
蓋 (身)	蓋 (身)	8-5 45-9	口径：8.9 受部径：11.1 器高：3.5	内傾するたちあがりは高く、端部は脱い。受部はやや外上方へのび、端部はやや丸い。底部は深く平ら。	底部外面ヘラ切り後ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土

表21

器種番号	器種	回収番号 写真番号	法 厘 cm	形 態	技 法	備 考
三 号 機	蓋 环 (身)	8 - 6 -	口径：8.9 受部径：11.3	内傾するたらあがりは端部が丸い。 外上方にのびる受部は端部を丸くおさめる。	回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭堆積土出土 口縁部1/4残存
	高台付环	8 - 7 -	口径：13.2 (推 定) 器高：4.6	端部を丸くおさめた 口縁部はゆるやかに 内湾しながら底体部に いたる。 高台は外反し、端部 は丸味を有する。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 前庭堆積土出土 1/4残存
	高台付环	8 - 8 45-14	口径：13.8 器高：4.45	口縁部は、端部を丸くおさめ、やや内湾しながら底体部にいたる。 高台は、やや外湾し 突堤状の段がつく。 端部はやや丸い。	底部外向へラ切り後 ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：やや粗 3mm以下白色 砂粒と黒粒合む 焼成：やや不良 色調：淡灰色 前庭堆積土出土
四 号 機	蓋	8 - 11 46-11	口径：8.6 器高：3.25	無頸蓋の蓋。 口縁部の端部は丸く 内傾しながら天井部 にいたる。 天井部はやや丸い。	天井部外面回転ヘラ 削り。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭堆積土出土 口縁部一部欠損
	無頸蓋	8 - 12 46-12	口径：7.5 体部最大径： 10.6 器高：5.45	小形の蓋。 口縁部はやや外反し 端部は鋭い。 体部は大きく内湾する。 底部は中心に向って やや内湾する。	底部外面回転ヘラ切 り未調整。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 前庭部堆積土出土 底部内面にベンガ ラが付着
五 号 機	臺	8 - 13 46-6		頭部は外傾し、1条 と2条の沈線と相互 して2段の波状文を 有する。	頭部回転ナデ。肩部 外面タタキ目(2× 2.5cm 7条)。内面 アテ木目(半径2.5 cm、5~6条)。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 前庭部堆積土出土 頭部から肩部にかけて 1/4残存
	小形高环	8 - 14 46-13	口径：8.4 器高：5.65	外傾してたらあがる 环部の口縁端部は丸 味を有する。底部は 平ら。 脚部は短く、下半は 「ハ」の字状に膨がり、 端部は面をなす。	环部底部回転ヘラ切 り後脚部作成。环部 内面底部は仕上ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭部堆積土出土 口縁部1/4欠損
	臺	8 - 15 -	口径：17.6 (推 定)	外反する口縁部は複 合U縁で、一条の凹 縁を有し、端部は丸 い。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 前庭部堆積土出土 口縁部から頭部に かけて1/4残存

表22

形質番号	器種	内版番号 外観番号	法量 cm	形態	技法	備考
四	平瓶	8-16 -	腹部最大径： 14.9	ゆるやかに下る肩部は、2個の突起と1条の凹線をもつ。体部は最大径を上部にもち、下半に1条の凹線を有する。	底部から体部底まで回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭部堆積土出土 胸部のみ残存
	蓋坏 (蓋)	9-1 46-2	口径：10.1 器高：3.4	口縁部はやや内湾し端部は丸い。天井部との境に一条の枕線をもつ。 天井部は一条の広く浅い凹線により段がつく。	天井部外面へラ切り後仕上ナデ。内面不定方向ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土
	坏	9-2 46-4	口径：7.8 器高：2.8	口縁部は端部を丸くおさめ、垂直気味に底部にいたる。 底部は平ら。	底部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：やや粗 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土
横	蓋坏 (蓋)	9-3 46-3	口径：12.4 器高：4.3	口縁部は端部を丸くおさめ、やや内湾しながら天井部にいたる。 天井部は、一条の広く浅い凹線により段がつく。	天井部外面回転ヘラ切り後仕上ナデ。内面にあて木痕がある。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：やや粗 焼成：普通 色調：青灰色 前庭部出土 口縁部一部欠損 天井部外面ヘラ記号「×」
	坏	9-4 46-5	口径：9.5 器高：3.15	口縁部は端部が鋭く内傾しながら底部にいたる。 底部は平ら。	底部外面回転ヘラ削り。内面仕上ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：やや粗 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土
穴	蓋坏 (身)	9-5 46-8	口径：8.4 受部径：10.7 器高：3.2	内傾するたちあがりは端部が鋭い。斜め上方にのびる受部は端部に丸くおさめる。 底部はやや丸味を有する。	天井部回転ヘラ切り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗青灰色 玄室出土 外面の8割に自然釉付着
	蓋坏 (身)	9-6 -	口径：7.2 受部径：9.4 器高：2.6	小形の坏、内傾するたちあがりは低く、端部はやや鋭い。斜め上方にのびる受部は端部を丸くおさめる。 底部はやや丸味をもつ。	底部外面へラ切り後ナデ仕上。内面ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 差道部出土 底部外面にヘラ記号「/」
基	蓋坏 (身)	9-7 46-9	口径：10.6 受部径：13.3 器高：3.5	内傾するたちあがりは低く、端部はやや鋭い。斜め上方にのびる受部は端部を丸くおさめる。口縁部に一条の凹線をもつ。 底部は深く平ら。	天井部外面へラ切り後、粗いナデ。内面は不定方向ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 前庭部出土 底部外面ヘラ記号「×」
	蓋坏 (身)	9-8 46-10	口径：10.2 受部径：12.6 器高：3.2	内傾するたちあがりは低く、端部はやや鋭い。斜め上方にのびる受部は端部を丸くおさめる。 底部はほぼ平ら。	天井部外面へラ切り後ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：やや粗 焼成：普通 色調：暗灰色 差道部出土 底部外面ヘラ記号「×」

表23

標号 番号	器種	出版番号 写真番号	法量 cm	形態	技法	備考
五 号	蓋 坯 (蓋)	9-13 47-1	口径: 9.0 器高: 3.3	小形。口縁部はやや内凹し、端部は丸い。内面に一条の凹線をもつ。天井部は丸味をもつ。	天井部外面回転ヘラ切り後粗いナデ仕上。内面不定方向ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土: やや粗 焼成: 良好 色調: 灰色 玄室出土 底部外面ヘラ記号「X」
	蓋 坯 (蓋)	9-14 47-4	口径: 10.0 器高: 3.9	口縁部は内湾し、端部は丸い。内面に一条の凹線を有する。天井部との境に一条の浅い凹線を有する。天井部は丸味を有する。	天井部回転ヘラ切り。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 青灰色 玄室出土
	蓋 坯 (蓋)	9-15 47-3	口径: 9.9 器高: 3.5	口縁部はやや内湾し、端部は丸い。天井部との境に浅い凹線を有する。天井部は丸味を有する。	天井部外面回転ヘラ切り後ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 淡青灰色 前庭部堆積土出土
横 穴	蓋 坯 (蓋)	9-16 47-5	口径: 11.2 器高: 4.15	口縁部は内湾し、端部は丸い。天井部は丸味を有する。	天井部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。内面不定方向ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土: やや粗 焼成: 普通 色調: 淡青灰色 玄室出土 口縁一部欠損
	蓋 坯 (蓋)	9-17 47-6	口径: 11.25 器高: 4.0	口縁部は内湾し、端部は丸味を有する。天井部との境の広く浅い凹線により段がつく。天井部はほぼ平ら。	天井部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。内面は不定方向ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土: 粗 焼成: 普通 色調: 黄灰色 玄室出土
	蓋 坯 (蓋)	9-18 47-2	口径: 10.65 器高: 3.8	やや厚手。口縁部はやや内湾し、端部は丸い。天井部は丸味を有する。	天井部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 淡青灰色 前庭部堆積土出土
集	蓋 坯 (身)	10-1 47-13	口径: 9.5 受部径: 12.2 器高: 3.75	内傾するたちあがりは、端部が鋭く内面に一条の沈線を有する。外上方にのびる受部は端部が丸い。底部は深くやや丸味をもつ。	底部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。内面不定方向ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 青緑灰色 玄室出土 底部内面にベンガラが付着
	蓋 坯 (身)	10-2 47-14	口径: 9.8 受部径: 12.0 器高: 3.1	内傾するたちあがりは、端部が鋭く内面に一条の沈線を有する。斜め上方にのびる受部は端部が丸い。底部に一条の凹線を有する。底部はやや半ら。	底部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土: やや粗 焼成: 良好 色調: 青灰色 玄室出土

表24

器種 番号	器種 番号	列版番号 写真番号	法量 cm	形態	技法	備考
五 号 横	蓋 坯 (身)	10-3 47-11	口径：9.9 受部径：11.7 器高：3.7	ほぼ直立するたちあがりは端部が丸く、内向に一条の沈線を有する。外上方にのびる受部は端部がやや鋸い。底部は深く丸い。	底部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土：粗 焼成：良好 色調：青灰色 前庭出土
	蓋 坯 (身)	10-4 47-9	口径：8.7 受部径：11.0 器高：3.2	内傾するたちあがりは低く、受部とほぼ同じ高さ、端部は鋸い。外上方にのびる受部は端部が丸い。底部は深く丸い。	底部外面回転ヘラ切り。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 前庭部堆積土出土 底部外面の一部に自然釉付着
	蓋 坯 (身)	10-5 47-13	口径：8.9 受部径：11.15 器高：3.1	内傾するたちあがりは受部より低く、端部は鋸い。斜め上方にのびる受部は端部が丸い。底部は丸い。	底部外面回転ヘラ切り。他は回転ナデ。ロクロ回転方向不明。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土 外面7割に自然釉(白色)付着
	蓋 坯 (身)	10-6 47-10	口径：8.6 受部径：11.1 器高：3.65	内傾するたちあがりは低く、端部は丸い。斜め上方にのびる受部は端部が丸い。底部は深く丸い。	底部外面回転ヘラ切り。内面仕上ナデ。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭部堆積土出土 外面全体に自然釉(橙色)付着
	蓋 坯 (身)	10-7 47-15	口径：9.9 受部径：12.2 器高：3.5	内傾するたちあがりは低く、端部は丸味をもつ。外上方にのびる受部は端部を丸くおさめる。底部は深くやや丸い。	底部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土 底部内面にベンガラが付着 底部外面にヘラ記号「×」
六 基	蓋 坯 (身)	10-8 47-8	口径：7.75 受部径：10.0 器高：3.1	小形、内傾するたちあがりは低く、端部はやや丸い。外上方にのびる受部は端部が丸い。底部は深く丸い。	底部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土 外面全体に自然釉(白色)付着
	坏 身 (土師器)	10-9 47-16	口径：10.9 器高：3.8	厚手の坏身。端部を鋸くおさめた口縁部は、ゆるやかに内湾しながら底部にいたる。底部は平ら。	外面ハケ目調整。底部はナデ。内面はナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：赤褐色 玄室出土
	蓋 (土師器)	10-10 —	口径：15.1 (推定)	口縁部は端部を丸くおさめ、頸部から肩部にかけて「く」の字状になる。肩部はゆるやかに内湾する。	肩部内面ヘラ削り。頸部と肩部の境は指頭によるナデ。	胎土：やや粗 焼成：普通 色調：淡赤褐色 前庭部堆積土出土 口縁部から肩部にかけて残存

表25

器種番号	器種	出放番号 写真番号	法量 (cm)	形態	技法	備考
五 号 横 穴 墓	長頸壺	10-11 47-7	口径: 6.54 体部最大径: 13.4 器高: 16.25	外反する頸部は、約 1/4の位置でやや内湾 し、口縁部にいたる。 端部は丸い。最大径 を、肩部と体部の境 にもつ。 底部は平ら。	肩部にカキ目(1段 9~10条で3段)。 底部から体部1/4にかけて 回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 淡灰色 前庭部堆積土出土 肩の一部に自然釉 (緑色)付着
	蓋 壺 (蓋)	10-12 48-1	口径: 10.2 器高: 3.8	内湾する口縁部は端 部が丸い。 天井部は丸味をもつ。	天井部外面回転ヘラ 切り後ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 青灰色 玄室出土
	蓋 壺 (身)	10-13 48-7	口径: 9.2 受部径: 11.4 器高: 3.8	内傾するたちあがり は低く、受部より低 い。内面に一条の沈 線を有する。 受部は外上方にのび 端部は丸い。 底部は深く丸い。	底部外面回転ヘラ切 り後粗いナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: 粗 焼成: 良好 色調: 青灰色 玄室出土 外面方に自然釉(白 色)付着 底部内面にヘラ記 号「/」
八 号	蓋 壺 (身)	10-14 48-6	口径: 10.0 受部径: 12.6 器高: 3.7	内傾するたちあがり は端部を丸くおさめ 内面に一条の沈線を 有する。 受部は外上方にのび 端部は丸い。口縁部 から天井部にかけて 浅い凹線3条をもつ。 底部はやや平ら。	底部外面回転ヘラ切 り後、粗いナデ。内 面不定方向ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: 細密 焼成: 普通 色調: 暗灰色 玄室出土
	蓋 壺 (身)	10-15 48-4	口径: 9.0 受部径: 11.3 器高: 3.5	内傾するたちあがり は低く、端部はやや 丸い。内面に一条の 沈線をもつ。 受部は外上方にのび 端部は丸い。 口縁部と底部との境 に一条の凹線をもつ。 底部はやや平ら。	底部外面回転ヘラ切 り。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 淡青灰色 玄室出土
横 穴 墓	蓋 壺 (身)	10-16 48-8	口径: 10.1 受部径: 12.6 器高: 3.9	内傾するたちあがり は端部が丸く、厚み をもつ。 受部は外上方にのび 端部は丸い。 底部は深く丸い。	底部外面回転ヘラ切 り後粗いナデ。 内面不定方向ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: やや粗 焼成: 普通 色調: 暗青灰色 玄室出土 底部外面ヘラ記号 「/」
	蓋 壺 (身)	10-17 48-2	口径: 9.0 受部径: 11.5 器高: 3.6	内傾するたちあがり は、端部がやや丸い。 受部は外上方にのび 端部は丸い。 底部は丸い。	底部外面回転ヘラ切 り。内面ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: やや粗 焼成: 普通 色調: 暗青灰色 羨門部堆積土出土 外面8割に自然釉 及び須恵器片付着

表26

器種番号	器種	図版番号 写真番号	法量 [cm]	形態	技法	備考
八 号 横 穴 墓	蓋 环 (身)	10-18 48-3	口径：9.0 受部径：11.3 器高：3.1	内傾するたちあがりは低く、端部は丸味をもつ内面に一条の凹縫を有する。 受部は斜め上方にのび、端部は丸い。 口縫部から底部外面にかけて2条の凹縫を有する。底部はほぼ平ら。	底部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。内面不定方向ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：やや粗 焼成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土
	蓋 环 (身)	10-19 48-5	口径：9.0 受部径：11.3 器高：3.4	内傾するたちあがりは端部が鋭い。 斜め上方にのびる受部は端部が丸い。 底部はやや深く、丸味をもつ。	底部外面自然釉付着のため不明。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：灰色 玄室出土 底部外面に自然釉(緑色)付着
九 号 横 穴 墓	蓋 环 (蓋)	11-1 -	口径：12.4 (推定) 器高：3.8 (推定)	大形。口縫端部は丸味をもち、内窓しながら天井部にいたる。天井部は口縫部との境よりやや上方に傾き、その後平らになる。	天井部外面回転ヘラ切り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土 少残存
	蓋 环 (蓋)	11-2 48-10	口径：11.2 器高：4.25	内窓する口縫部は端部が丸い。 口縫部から天井部にかけて3条の浅い凹縫をもつ。 天井部は丸味をもつ。	天井部外面回転ヘラ切り後ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：黄灰色 玄室出土
	蓋 环 (蓋)	11-3 48-9	口径：11.4 器高：4.1	内窓する口縫部は端部が丸い。 天井部は丸味をもつ。	天井部外面回転ヘラ切り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄門部出土
	蓋 环 (蓋)	11-4 48-11	口径：10.6 器高：4.2	やや厚手。内窓する口縫部は端部が丸い。 天井部は丸い。	天井部外面回転ヘラ切り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 前庭部堆積土出土 少残存
	蓋 环 (身)	11-5 48-12	口径：9.4 受部径：12.0 器高：3.7	内窓するたちあがりは低く、端部は丸味をもつ。内面に一条の沈縫をもつ。 受部は外上方にのび、端部は丸い。 底部は深く丸い。	底部外面回転ヘラ切り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土 外面に自然釉(乳白色)付着
	蓋 环 (身)	11-6 48-13	口径：9.9 受部径：12.3 器高：3.7	内窓するたちあがりは端部がやや鋭い。 外上方にのびる受部は端部が丸い。 底部は深く丸い。	底部外面回転ヘラ切り。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土 外面に自然釉付着、底部外面ヘラ記号「X」

表27

横 穴 系 列 番 号	器 種	図版番号 写真番号	法 量 cm	形 態	技 法	備 考
九 号	蓋 环 (身)	11-7 -	口径: 10.6 (推定) 受部径: 13.0 (推定) 器高: 3.5 (推定)	内傾するたちあがり は、端部がやや丸い。 外上方にのびる受部 は端部が丸い。	底部外周回転ヘラ切 り。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: 敷密 焼成: 普通 色調: 灰色 玄室出土 1/6残存
	蓋 环 (身)	11-8 -	口径: 10.7 (推定) 受部径: 13.0 (推定) 器高: 3.3 (推定)	内傾するたちあがり は、端部が丸い。 内面に一条の沈線を もつ。 ほぼ水平にのびる受 部は端部が丸い。	回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: 敷密 焼成: 良好 色調: 暗青灰色 玄室出土 1/6残存
十 号	蓋 环 (蓋)	11-9 48-14	口径: 9.5 器高: 3.45	端部を丸くおさめた 口縫部は殆どまで直 立気味にたちあがり その後内湾しながら 天井部にいたる。 天井部は平ら。	天井部回転ヘラ切り 後粗いナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: 敷密 焼成: 良好 色調: 灰色 玄室出土
	蓋 环 (身)	11-10 48-16	口径: 9.5 受部径: 12.0 器高: 3.8	内傾するたちあがり は端部がやや脱く。 内面に一条の沈線を もつ。 外上方にのびる受部 は端部が丸い。 底部はやや平ら。	底部外周回転ヘラ削 り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転	胎土: 敷密 焼成: 良好 色調: 暗青灰色 玄室出土
轟	蓋 环 (身)	11-11 48-15	口径: 9.1 受部径: 11.6 器高: 3.6	内傾するたちあがり は端部が丸い。 ほぼ水平にのびる受 部は端部が丸く、厚 みをもつ。 底部は深く平ら。	天井部回転ヘラ切り 後、粗いナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: 岩 焼成: 良好 色調: 青灰色 玄門部出土

#### 114 まとめ

東支群の横穴墓は12穴で構成されている。立地は小規模な谷が西向きに開いたやや急な斜面で、地山（真砂土）に掘り込まれている。標高は12~16mを測り、7号横穴墓の位置が最も高く、両側に山形状に次第に低くなり、最も低い位置にあるのが1号横穴墓である。

本横穴墓群周辺は、地質的に地山が脆い上に崖崩れ、防空壕などにより玄室及び羨道の一部あるいは半分以上が崩壊したり、破壊されたりしている。比較的残存状態の良好なものには2号~5号横穴墓、8号~10号横穴墓があるが、これとて完全なものではない。

形態的特徴を記すと、玄室の平面プランの多くは台形状を呈するが3号・4号・8号・9号横穴墓は継長の長方形、10号横穴墓は正方形に近い形を呈するものである。床面は、4号横穴墓では奥に向けて3段に高くしたり、10号横穴墓では左右に屍体がみられるなどの設備がある。周溝は5号・7号~9号横穴墓にあるが、しっかりと巡らされたものではない。大井の形態は、横断面がアーチ形を呈し、いわゆるカマボコ形といわれるものには、2号・5号・7号・11号横穴墓がある。また、横断面が三角形を呈し、いわゆる妻入りのチント形といわれるものには、3号・4号・8号~10号横穴墓が認められる。羨道は、非常に長いのが2号~4号横穴墓で、やや長いのが5号・8号・10号~12号横穴墓、短いのが7号・9号横穴墓である。羨門は、二重構造を有する10号横穴墓以外はすべて単純構造を呈し、そのうち横溝を穿つものには、2号・8号・10号横穴墓がある。前庭の形態については、八の字状に広がり、やや短いものが多い。なお、7号・11号横穴墓の前庭は単に崖崩れによるものか、地形的に前庭を造る余地がなかったのか判然としなかった（註1）。

出土遺物についてみると、全体的には非常に貧弱な内容である。玉類は、3号横穴墓の前庭から勾玉が1個、鉄製品は刀子が5（2号横穴墓1、3号横穴墓1、4号横穴墓2、9号横穴墓1）出土している。土器については、須恵器の蓋・坏が圧倒的多数を占め、とくに3号~5号横穴墓に集中している。土師器は5号横穴墓で坏と蓋が出土している。なお、4号横穴墓前庭出土の短頸壺および5号横穴墓出土の坏2個の内面にベンガラが認められる。

須恵器からみた本文群の墓造時期は、山陰の須恵器編年のIV期にあたるものである（註2）。

以上、本文群の形態的特徴と出土遺物を概括してきたが、総合的に見て6号横穴墓と7号横穴墓とを境にして様相が異なるように思われる。すなわち、1号~6号横穴墓は規模が大きく遺物量も多いが、7号~11号横穴墓は小規模で遺物も極端に少ないことが指摘で

きる。しかしながら、形態的特徴や出土遺物の種類や質においてほとんど遜色がないことについては、横穴墓のもつ歴史的背景を如実に表わしているものと考えられる。

(註1) 池上悟『横穴墓』(ニューサイエンス社 1980年)

(註2) 山本清『山陰の須恵器』(『山陰古墳文化の研究』 1971年)

## 45 出土人骨鑑定

鳥取大学医学部法医学教室

助教授 井 上 晃 孝

### (1) 4号横穴墓出土人骨

玄室は上・中・下段の三段(図25)に分かれており、各段に人骨が散在している。

上段は主に4肢骨、中段には頭骨、下段には頭骨、上顎と下顎が残存している。これらの人骨は、いずれも破損して完形のものではなく、骨質も脆く、骨の色調は汚黄白色～汚黄褐色調を呈していた。

#### 1. 上段

骨は骨格順に配列しておらず、頭骨はなく、床中央部から右側に向けて大半の4肢骨と体幹骨の一部が残存する。上肢骨は左右の上腕骨の骨片1個と左右の脛骨を認めたが、腓骨は消失していた。体幹骨としては椎骨(腰椎骨)と骨盤の一部を認めた。その他骨名不明の小骨片小数残存。床砂からは歯牙は全く検出されない。年令は骨の大きさから一応成人が推定され、性別、身長とも不明である。

#### 2. 中段

羨道からみて、右側端に須恵器4個があり、その周囲に頭骨片が散在しており、頭頂骨の一部(冠状と矢状縫合とも接着なし)、前頭骨の一部(内板の前頭稜部)左頬骨片、その他頭骨片少數認める。中央部には骨片5個を認める。本尾骨の性別は不明年令は頭蓋骨の結合状態から若年者が推定され、4肢骨もないので、身長も不明である。中段の左側には頸骨(左側頭骨から後頭部と右側頭骨)、下顎骨は正中部から大きく2つに折損、破損しているが、一部歯牙が付着している。歯牙は左下顎では第2小臼歯(「5」)は歯根部のみ、第1、2、3の大臼歯(「6、7、8」)が残存する(写真1)。右下顎では、第1、2大臼歯(「7、6」)が残存する(写真2)。これらの歯牙の咬耗度は軽度でMartinの分類では1~2°に相当し、年令は壮年(30才前後)が推定される。性別は頭骨が完形でないので特定しがたいが、左右の下顎骨の諸形態学的特徴から男性らしいと推定される。身長は不明である。この頭骨と下顎骨は上段の人骨出来のものと考えられ、上段から中段にころがり落ちたものと推定される。

### 3. 下段

頭骨の一部として、左右の側頭骨部（耳孔、乳様突起ら）は小さく、一見して小児骨である（写真3）。四肢骨片1個、下頸骨と上頸骨（歯牙付着）とその他床砂から少數の歯牙が検出された。右上頸骨には歯槽内に、中切歯、側切歯、第1小白歯と第2大臼歯（歯冠部のみ）が残存していた。下頸の切歯（歯名不明）の歯根が2個残存右下頸では第1小白歯の歯根部と第1大臼歯が残存していた。これら残存歯牙はすべて永久歯である。右下頸の第1大臼歯（6才臼歯）が磨耗しており、第2大臼歯が歯冠のみで、未だ萌出していない（萌出は13～14才位）ところから、年令は10～12才位が推定される。性別・身長ともに不明である。

### 4. 埋葬者数

本横穴墓は、上・中・下段の三段ベッドになっており、上段には左頭位の1体が埋葬されていたものと推定され、床中央部～右側に四肢骨と体幹骨の一部が残存し、頭骨は中段にころがり落ちたものと推定される。中段は右頭位で一体が埋葬されたものと推定され、土器の周囲に頭骨片が散在するが、中央部には四肢骨、体幹骨の一部が残存する。下段には右頭位の小児1体が埋葬されたと推定され、頭骨片・上・下頸と四肢骨の一部が残存する。

### 5. まとめ

本横穴墓は、上・中・下段の三段ベッドになっており、各段に1体ずつ計3体が埋葬されたものである。

上段：壮年の男性らしいと推定

中段：若年者で性別不明

下段：10～12才位の小児で性別、不明

## (2) 5号横穴墓出土人骨

5号横穴墓内には人骨が大きく2個所に散在しており、玄室入口より向って右奥（A地点）には残存骨が少なく、採取番号①～②の骨のみで、頭骨（後頭部、左右の側頭部の一部）と椎骨の一部のみである。玄室より向って左側ほぼ中央（B地点）部に大半の骨があり、採取番号③～⑩までの頭骨、下頸骨、4肢骨片、その他の骨が一定の方向性もなく、成人骨と小児骨が集中的に混在している（図26）。これらの残存骨は、いずれも風化が著しく、完全な形の骨が皆無で骨片化している。

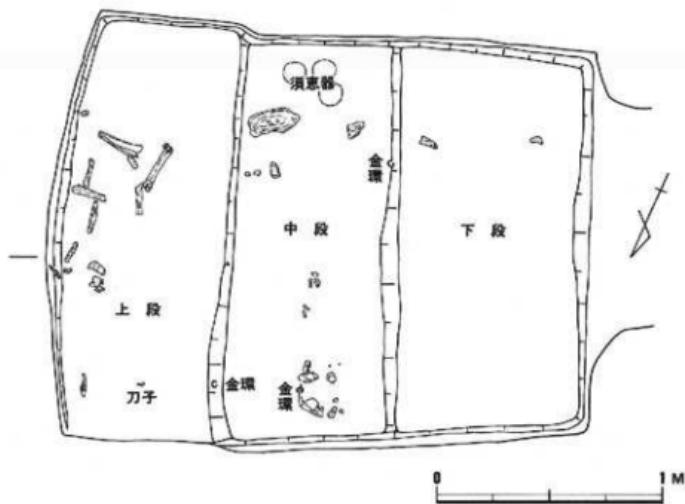


図25 東支群4号横穴墓人骨・遺物出土状況



写真1 上段の壮年男性(?)  
左下顎(第1・2・3・大臼歯付着)



写真2 上段の壮年男性(?)  
右下顎(第1・2・大臼歯付着)

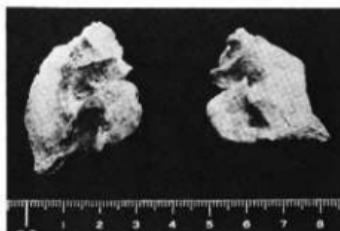


写真3 下段の小児頭骨片  
(左右側頭骨部)

## 1. 埋葬者数

### A 地点

頭骨（後頭部、左右の側頭部の一部）と椎骨の一部が残存しているが、成人骨で消失骨はあるが重複骨がないので、1名が埋葬されたものと推定する。

### B 地点

散在した骨を整理すると成人2名と小児2名の骨が混在しており、骨片化している骨も多いので、個別に識別することは不可能である。

そこで、埋葬者数は、主に上・下顎とその付着歯牙または遊離歯牙を中心に検討した。小児の上顎の左第1大臼歯と右第2小臼歯が重複して存在することは2名が埋葬されたことになる。成人の下顎骨は2個残存することから2名が埋葬されたことを推定される。以上から本5号横穴墓にはA地点に成人1名、B地点には成人2名、小児2名の計5名が埋葬されたことになる。しかし、その他同定不明の骨片もあることから、それ以上の埋葬者も否定できない。

## 2. 埋葬者の性別と年令

### A 地点

残存頭骨片は後頭部の人字縫合部を中心とした部位、左右の側頭部の一部（乳様突起ら）で、完形の頭骨でないので、性的特徴をつかみ難いが、外後頭隆起の発達が弱いこと、上、下顎線の発達が弱いこと、左右の乳様突起の発達が弱いことから女性と推定される。残存頭骨の矢状縫合と人字縫合は接着が全く認められず、縫合面のきれこみが鋭いことから一応若年者が推定される。

### B 地点

採取番号⑧の頭蓋骨の下から採取された遊離歯牙は左上顎の第1大臼歯（L6）、第2大臼歯（L7）と右上顎の第2小臼歯（S5）、第1乳臼歯（D1）である。

永久歯の萌出をみると、

第1大臼歯は6～7才（6～8才）

第2小臼歯は11才（10～14才）

第2大臼歯は13～14才（10～14才）であり、第1大臼歯は萌出しているが、第2小臼歯と第2大臼歯は未だ萌出していないので、年令は10～12才位が推定される。採取番号⑨は小児の左上顎骨で歯槽部のL1～L5まで、歯牙はなく、歯槽が深いので、死後欠落したものである（写真1）。

採取番号⑩は左下顎体があり、第1大臼歯（F6）は死後欠で、第1乳臼歯（D1）、

第2乳臼歯（「E」）が残存し、第1乳臼歯の下に第2大臼歯（「7」）が埋没している。右下顎体には、第2乳臼歯（「E」）があり、その下に第2小白歯（「5」）が埋没し、第1大臼歯（「6」）は萌出している（写真2）。その他遊離歯牙として、左上顎第1大臼歯（「6」）、右上顎では中切歯（「1」）、側切歯（「2」）、第2小白歯（「5」）左下顎の犬歯（「3」）が萌出して、右下顎の第2大臼歯（「7」）が埋没しているところから年令は10～12才位が推定される。これらの残存歯牙から小児の性別を判定することはかなり困難であるので、現時点では性別不明としたい。

採取番号⑩は下顎があり、右3（「3」）～左6（「6」）までの歯槽部があり、左5（「5」）は歯根が埋没しているが、その他の歯牙はなく、すべて歯槽が深く、死後欠落したものである（写真3）。遊離歯牙として左下8（「8」）、右下6（「6」）が残存し、その咬耗度は、Martinの分類では1～2°で30才前後が推定される。

下顎骨の諸形態学的特徴から男性らしいと推定される。

採取番号⑪は下顎骨で左右の下顎枝を欠くが、7個の歯牙が付着している（写真4、5）。付着歯牙は左下顎の「2」、「3」、「4」、「5」、「6」、と右下顎の「3」、「6」、遊離歯牙として「7」、「2」、「4」、「5」が残存し、その咬耗度をみると、極めて軽度であり、Martinの分類では1°で、年令は20才前後が推定される。下顎骨は形態学的に強靭でかなり大きく、男性的特徴をよく具備しているので、男性と推定する。

### 3. 疾病らの異常

残存骨は風化が著しく骨片化しているので、疾病らの異常にについて不明である。

残存歯牙は、すべて健常歯であり、齲歯（虫歯）は全く認められない。

### 4. その他

小児は2名とも年令が10～12才位と推定されるが、両者の関係は不明である。

### 5.まとめ

東支群5号横穴墓の埋葬者数は5名が確認されたが、埋葬者の人骨配置は極めて不自然で、後日人為的に動かされた形跡がある。

埋葬者の内訳は次の通りである。

A地点 女性で若年者（成人1名）

B地点 小児2名で年令は10～12才位であるが、性別は不明である。

成人2名で、うち1名は30才前後の男性、他の1名は20才前後の男性と推定される。なお、B地点には、同定不明の骨片もあるので、それ以上の埋葬者も否定できない。

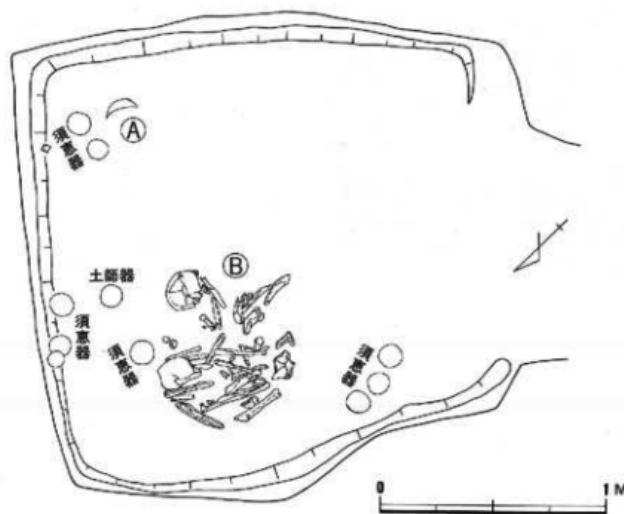


図26 東支群5号横穴墓人骨・遺物出土状況



写真1 小兒左上顎骨

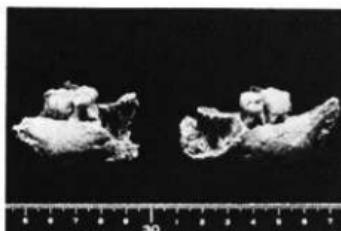


写真2 小兒左右下顎骨



写真3 成人(男)下顎骨



写真4 成人(男)下顎骨



写真5 成人(男)下顎骨

(3) その他の人骨

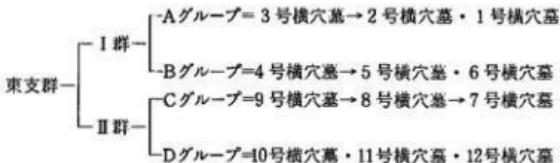
横穴番号	残存骨	残存歯牙	性別	年令	備考
7号 横穴墓	2個の4肢骨片 (形態学的特徴不明) しいて言えば上腕骨と 脛骨(?)	なし	不明	不明	
8号 横穴墓	頭骨片(主に側頭骨片 10個)、頭骨の厚さ2.5 ~8.5mm(成人域)	大臼歯 5個 小臼歯 2個 咬耗度 1~2°	不明	壮年	
9号 横穴墓	2個の4肢骨 (左右の脛骨体の一部)	なし	不明	不明	
10号 横穴墓	左下顎骨の一部 左右の大腿骨の骨体部 右の脛骨体の一部	大臼歯 2個 咬耗度 3°	女と推定 下顎の頸結節 の発達弱い。 歯牙が小さい。	熟年	

## IV. 小 結

### (1) 平野横穴墓群の性格

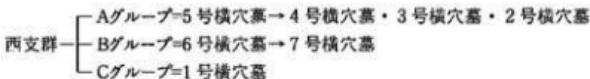
平野横穴墓群は先述したとおり、東支群12穴、西支群7穴以上が存在し、それぞれが隣接してまとまりのある一群を構成している。ここでは東支群と西支群の比較検討を加え、さらに、周辺の横穴墓群との関連にも触れ、本横穴墓群の占める歴史的位置を考察することにする。

東支群は出土した須恵器から、ほぼ7世紀代に集中して営まれたと考えられる。その中で最初に築造されたのは、おそらく3号横穴墓と4号横穴墓だと思われる。この2穴は地形的な制約を受けない、南向き斜面の最も良い場所に占地している。形態的にも規模が大きく、妻入りテント形天井、長方形プランの玄室で、長い羨道を有するものである。出土遺物も豊富である。そして3号横穴墓には順次2号横穴墓と1号横穴墓が、4号横穴墓には5号横穴墓と6号横穴墓が続くものと思われる。これには、形態上の変化・出土遺物の減少が目立つのである。なお、5号横穴墓は何らかの事情で玄室が斜めに掘り込まれているのだが、6号横穴墓に制約されたものか否かは、6号横穴墓に伴う遺物が皆無のため前後を決める術はない。以上6穴は、南向き斜面に築かれ、比較的規模が大きく、出土遺物も多いという共通性が認められる。それに対して、7号～12号横穴墓は、北向き斜面に位置し、小規模で、出土遺物も少ないといえる。その中でも地形的制約を受けず、妻入りテント形天井、長方形プランの玄室をもつ9号横穴墓が注目される。これは、玄室の平面プランがやや正方形化する8号横穴墓、台形化する7号横穴墓に先行するものと考えられる。また、10号横穴墓は規模が大きく、羨道が長く、羨門は二重構造を示すものである。前庭を省略し、便化の傾向を示す11号・12号横穴墓はそれに追随するものと推定される。次に出土した土器から横穴墓の築造期をみると、最も古い時期（II類）の土器を出すのは3号・4号・9号横穴墓であり、上記の推定と矛盾しない。しかし、III類以降の時期になると、大半の横穴墓から出土しているので、それらの新旧関係は明確にすることは不可能である。なお、1号～5号横穴墓はII類からVII類の土器を出すことから、追跡を含め長期間営まれていたことが判かる。このように見てくると、本文群の構築順序から次のような模式図が浮び上がってくる。



以上、東支群は大きな流れとして、①規模の縮小化 ②構造上の便化、簡略化 ③妻入りテント形大井、長方形プランからカマボコ形天井、台形プランへの移行 ④副葬品の減少などの傾向が指摘できるのである。

西支群は、出土した須恵器から、ほぼ7世紀代に築造されたものと考えられる（註1）。本支群で注意すべきことは、調査した7穴以外にもおそらく10穴前後の横穴墓の存在が見込まれるということである。このことを念頭において構築順序を検討することとする。出土土器の中で最も古い時期の須恵器を出すものに、5号・6号横穴墓がある。5号横穴墓は、玄室の平面プランが正方形を呈し、幅広の長い羨道をもつ。羨門は二重構造を呈し、長い前庭が取り付く。さらに出土遺物は數・質とともに豊富で、馬具・直刀・多数の須恵器を有する。また、6号横穴墓は、玄室の平面プランが正方形を呈し、羨道は短く、長い前庭が取り付く。出土遺物には金環・刀子・多數の須恵器を有するなどの点で、5号横穴墓とはほぼ同様の性格をもつものである。億測を混えるならばこの2穴は互いに意識し、隣接した場所に築かれたものとして推察される。なぜならば2穴の比高差が2mもあるものの、隣接して築くことによって両者の墓地の境を限定しようとしており、次に築造される予定の横穴墓の余地を確保しようとしたためであろうと思われるからである。その規則に従って、5号横穴墓は南側の空間地へ4号横穴墓、3号横穴墓、2号横穴墓と規模を縮小しながら墓地を拡大していったものと考えられる。同様なことが6号横穴墓と7号横穴墓との間の未開口の横穴墓の関係においても窺われる。なお、1号横穴墓は小屋根を挟んで独立した位置に穿たれているが、何らかの事情により築造を途中で中止したのであろう。次に、出土した土器からみると、最も古い時期のⅠ類をもつものに5号・6号横穴墓がある。4号・3号横穴墓はⅡ類からⅢ類まで続くが、2号横穴墓はⅡ類の時期だけで終る。7号横穴墓はⅢ類以降に出現しその頃1号横穴墓も築造されたと考えられる。本支群は次のような模式図を試みた。



以上、本支群の大きな流れとしては、①規模の縮小化 ②構造上の便化、簡略化 ③玄室の平面形が正方形プランから長方形プランへ移行 ④犬井形態がアーチ形、カマボコ形からドーム形、カマボコ形へ移行 ⑤副葬品の減少などの特徴が指摘できる。

東支群と西支群の築造時期について、再度検討することとする。最も早い時期、おそらく7世紀初め（I類）と考えられる横穴墓は、西支群5号・6号横穴墓である。7世紀前葉（II類）になると、西支群ではその数が急増し最盛期を迎える。これと相い前後して、東支群では漸く3号・4号・9号横穴墓が姿を現す。7世紀中葉から後葉（III・V類）には東支群で最盛期を迎えるが、その後新しい横穴墓の築造はなくなり、追葬の繰り返しが7世紀後葉（IV・VI・VII類）まで続くものと考えられる。また、西支群でも7世紀中葉を最後に横穴墓の築造が完了し、追葬もあまり行われなくなったようである（註2）。

次に、東支群と西支群の関係について触ると、両支群は同じ馬蹄形の谷に対面する形で営まれ、個々の横穴墓の構造、出土遺物の内容からみて、それほど対立する関係のものではないと思われる。想像を遡しくすれば、むしろ、二つの集団が同じ谷を墓域とみなし、東側の斜面に一方の集団が、西側の斜面に他方の集団が自らの墓地を設けたと考える方が妥当であろう。

表28 平野横穴墓群一覧表

A B	年 代	云			B			C			人 口 数	性 別	性 別	
		年 代	性 別	性 別	年 代	性 別	性 別	年 代	性 別	性 別				
西支群	1	228	140	134	2	140	90	80	(80)	—	—	—	—	—
—	2	186	134	120	—	104	—	—	—	—	—	—	—	—
—	3	—	—	—	—	106	84	74	74	—	—	—	—	—
—	4	534	145	125	120~134	106	98	88	(88)	—	—	—	—	—
—	5	240	174	120	—	128	118	72	—	—	—	—	—	—
—	6	228	208	182	—	120	72	62	86	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形
—	7	160	113	104	106~92	26	66	58	病~死	(解説有アーチ形)	—	—	—	—
東支群	1	(241)	(122)	—	—	(150)	(130)	—	—	—	—	—	—	—
—	2	150	182	182	—	106	122	112	—	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形
—	3	210	162	175	140~139	260	122	112	—	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形
—	4	220	186	170	—	140	120	108	—	—	—	—	—	—
—	5	225	196	172	95	234	124	138	—	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形
—	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	7	186	177	154	90~104	—	90	—	—	カマボコ形アーチ形	カマボコ形アーチ形	カマボコ形アーチ形	カマボコ形アーチ形	カマボコ形アーチ形
—	8	130	178	222	128~120	220	120	85	—	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形
—	9	124	156	148	80~94	140	86	84	(解説)	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形
—	10	174	168	122	—	260	85	78	病~死	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形	カマボコ形
—	11	165	176	170	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	12	126	190	118	—	58	68	68	—	—	—	—	—	—

○( ) 内は推定年である。

平野横穴墓群の位置する平野丘陵には、他に劍山横穴墓群、コモゴ山横穴墓群、亀山横穴墓群が知られている。こうした横穴墓・横穴墓群集中地区は、ほとんどが仏經山（神名火山・標高366m）の周囲に派生する低丘陵に存在している。本横穴墓群を中心とした仏經山北麓地域と、山の奥横穴墓群（13穴以上）を中心とした仏經山北西麓地域、さらに岩海横穴墓群（4穴）などのある仏經山南麓地域に合計12の横穴墓群が集中している。穴数では50穴を越えるほどである。これらの横穴墓の玄室の天井形態をみると、仏經山北麓地域では家形・カマボコ形・テント形、北西麓地域では家形・カマボコ形・テント形・丸天井形、南麓地域では家形などと極めてバラエティーに富んでおり、この地域の特徴を示している。

斐川町には、出西丸子古墳、栖雲寺古墳、高野1~3号古墳など、いわゆる石棺式石室とよばれる内部構造をもつ古墳が知られている（註3）。出雲に多い整形家形構造をもたない平野横穴墓群が、これら「石棺式石室」墳の多い地域の中にあって、どのような係り合いで発生し、かつ消えていったのか、など今後に残された課題は山積している。ともあれ、斐川町内において、これだけまとまった数の横穴墓を調査し、その概要を把握できたことは、この地域の古墳文化を解明すべき貴重な資料となるであろう。

（註2）『島根県埋蔵文化財調査報告書』第2集（島根県教育委員会 1977年）

（註3）池田満雄「第2編・近代以前の斐川」（『斐川町史』斐川町教育委員会 1972年）

表29 斐川町横穴墓一覧表

名	形	所	横	墓	出	主	道	向
1. 大穴横穴墓群	子供大穴		5穴・家形		根窓群			
2. 須原町横穴墓群	須原町御射山		3穴・複雑形		直刀、刀刃、鉤頭、盾型			
3. 半野横穴墓支群	上久江平野		12穴・扇形、入り口テント形		勾玉、金環、バネ、浜糸、土軒器			
4. 半野横穴墓西支群	〃		7穴以上・複雑形		金物、馬具、片刀、刀刃、鉤頭、根窓群、上軒器			
5. 剣山横穴墓群	〃		2穴		直刀、根窓群			
6. コモゴ山横穴墓群	〃 八頭		1穴・家形入り					
7. 亀山横穴墓	〃 手彌		1穴		盾型			
8. 斐川横穴墓群	斐川下西		14件1火		盾型			
9. 八幡横穴墓群	〃		1穴・丸天井形		盾型			
10. 山の農場穴墓群	〃		13穴以上・家形、複雑形、テント形		盾型			
11. 吉木勝四郎屯田横穴墓群	中込西		2穴					
12. 海の半野横穴墓群	伊佐		3穴					
13. 岩内横穴墓群	岩内		4穴・家形					
14. 畠山横穴墓群	畠山官道		4穴					

複雑形とは玄室横断面が台形、横断面がアーチ形あるいはドーム形を呈するものをいう。

テント形とは玄室の天井と壁面の区別がなく、断面が△形を呈するものをいう。

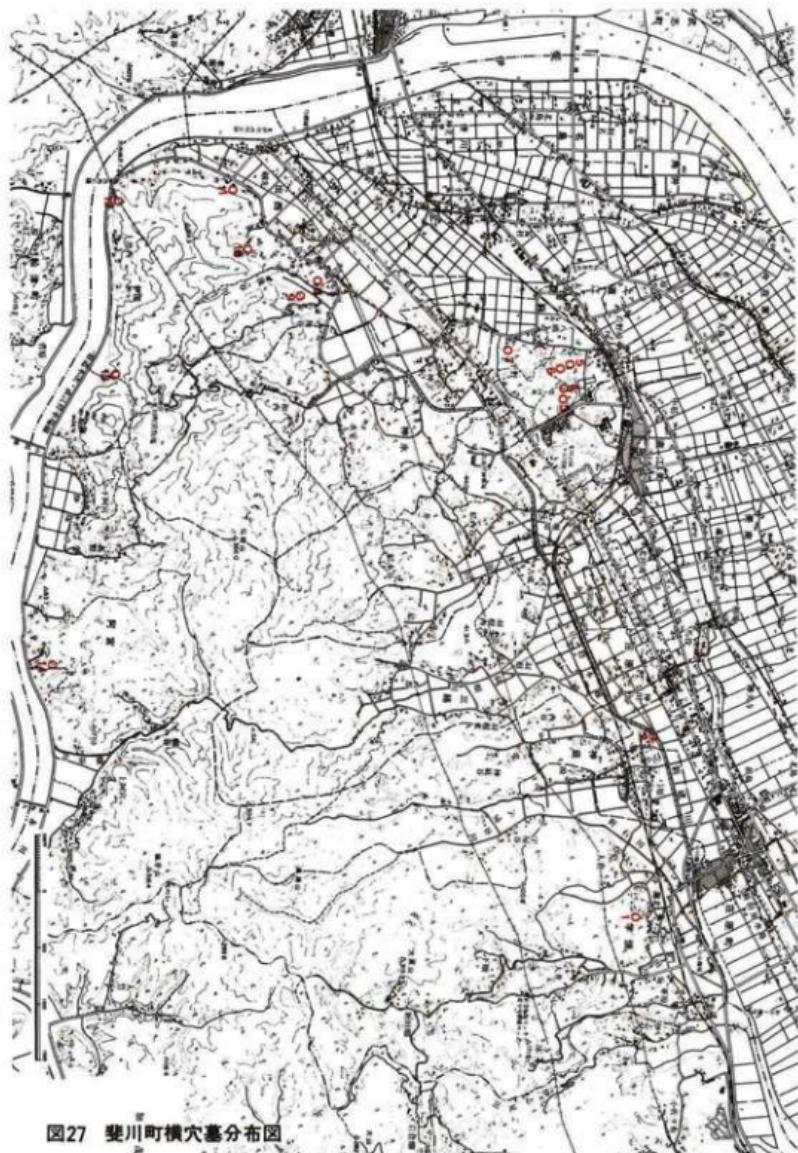
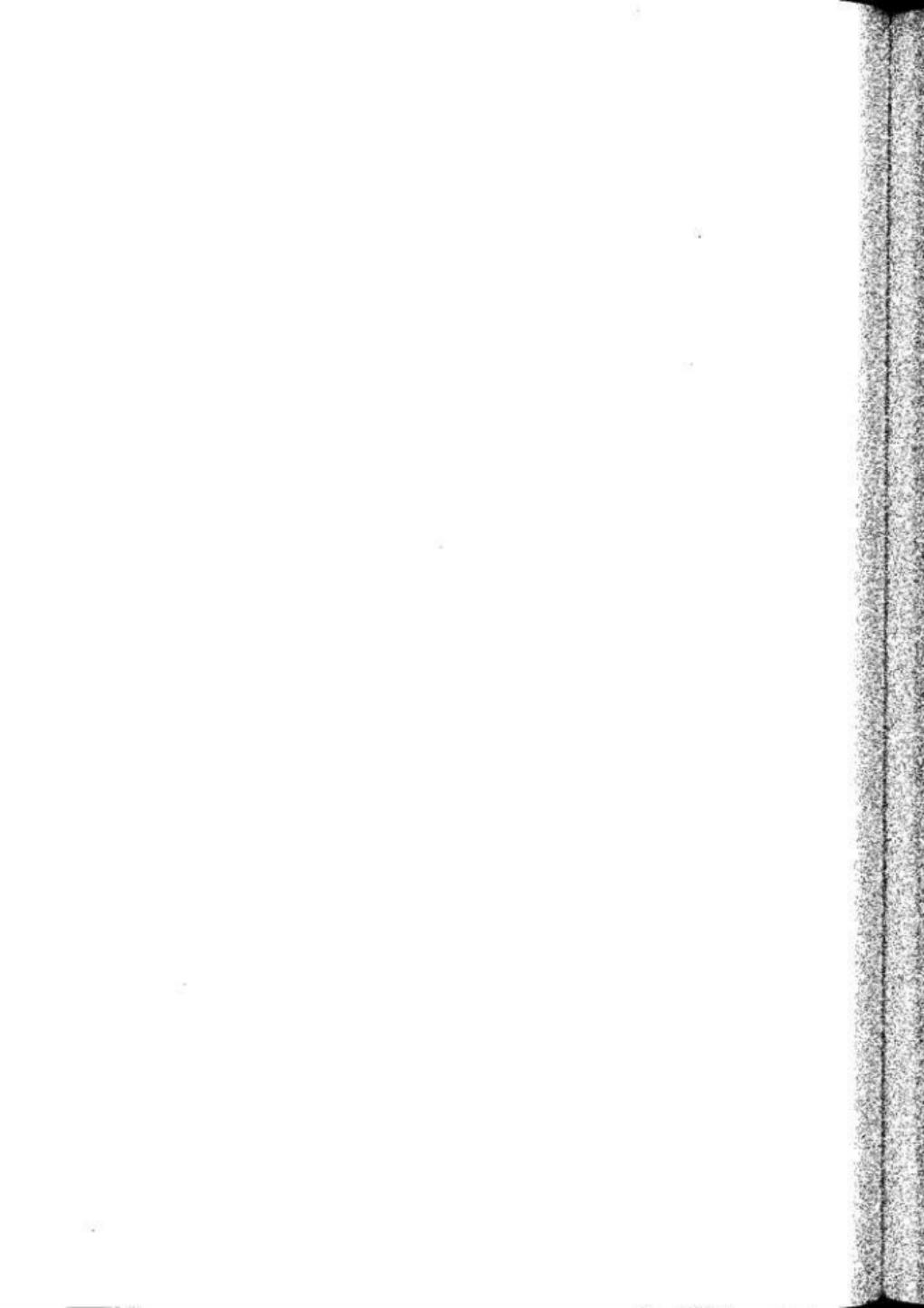
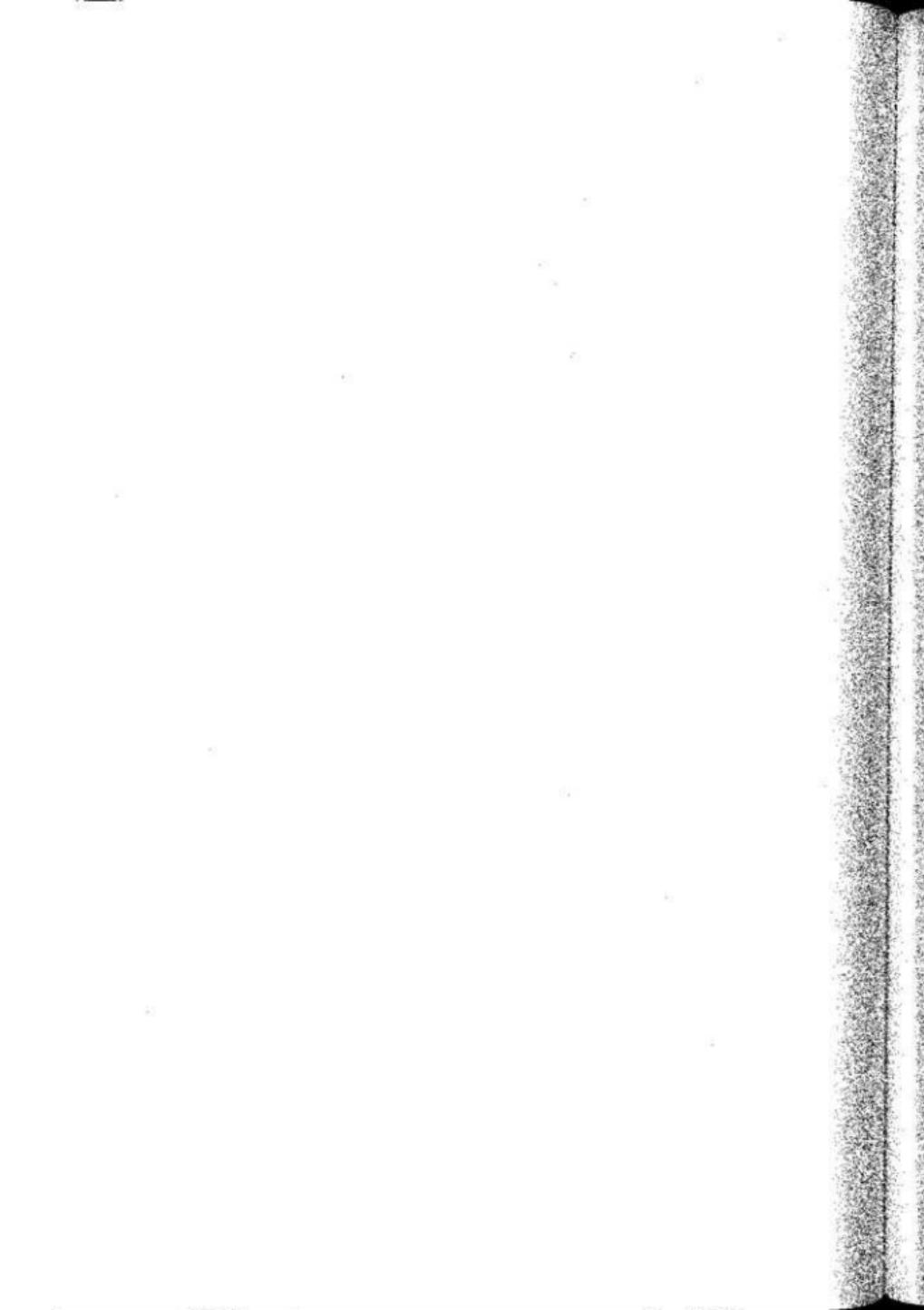


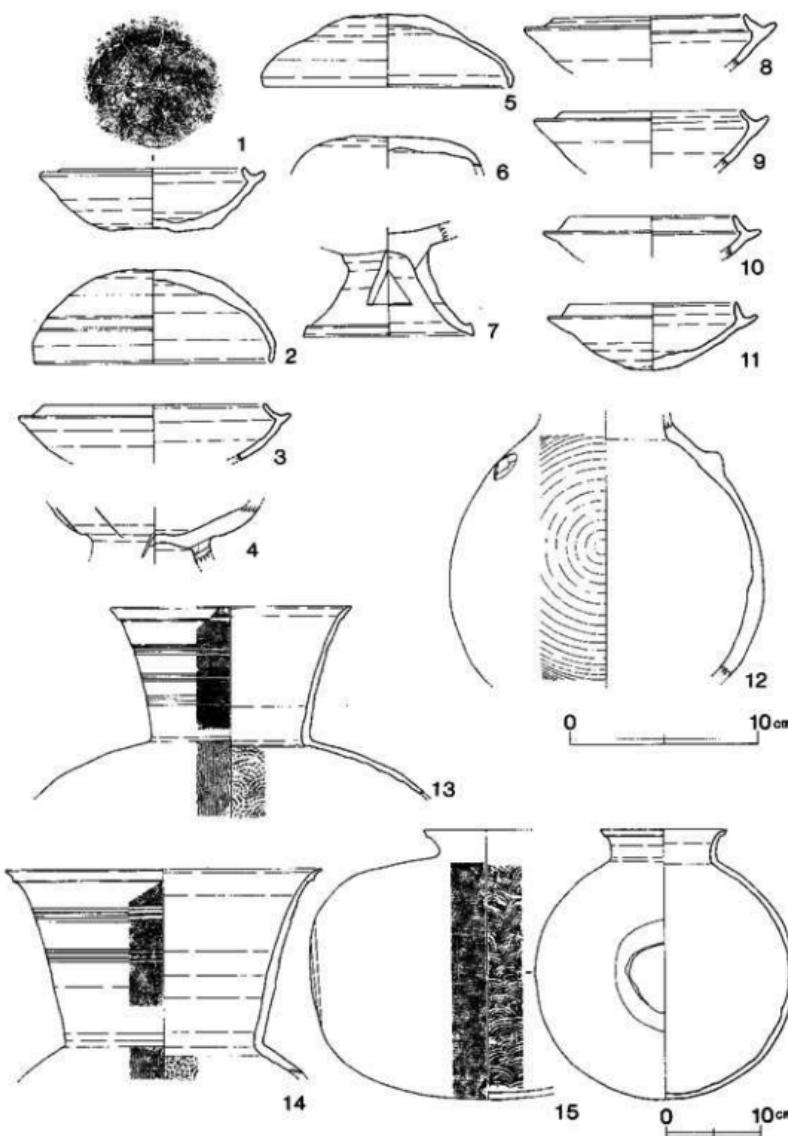
図27 斐川町横穴墓分布図



# 図 版

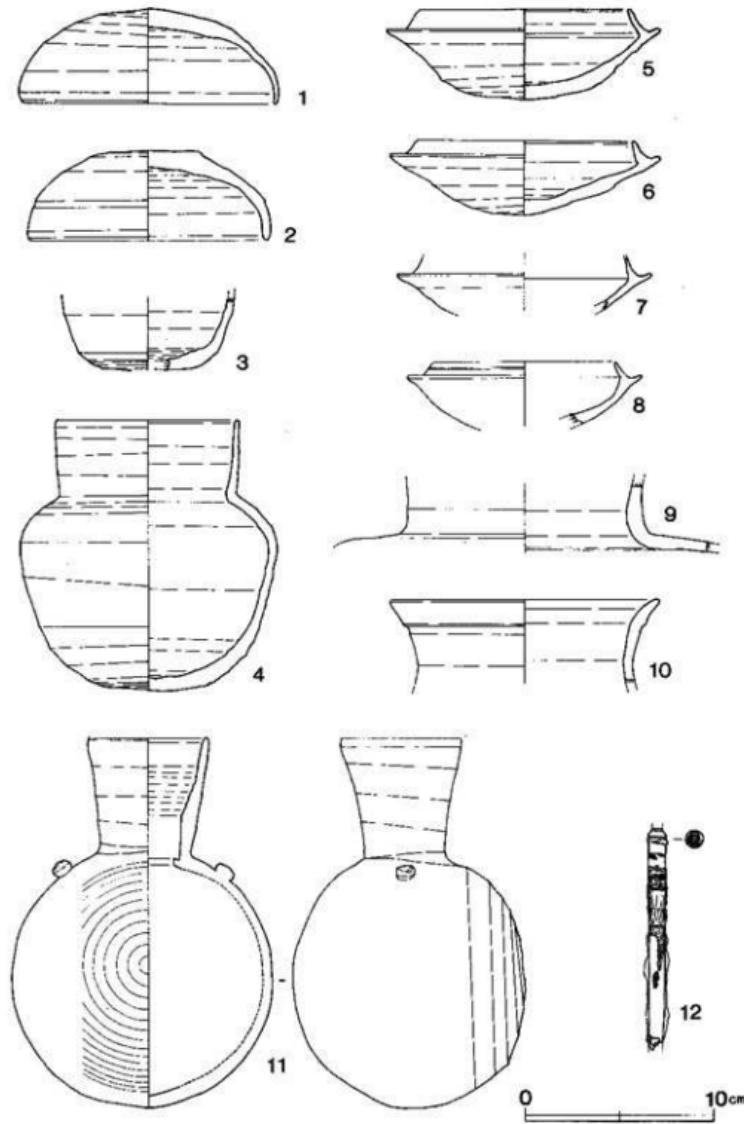


図版1



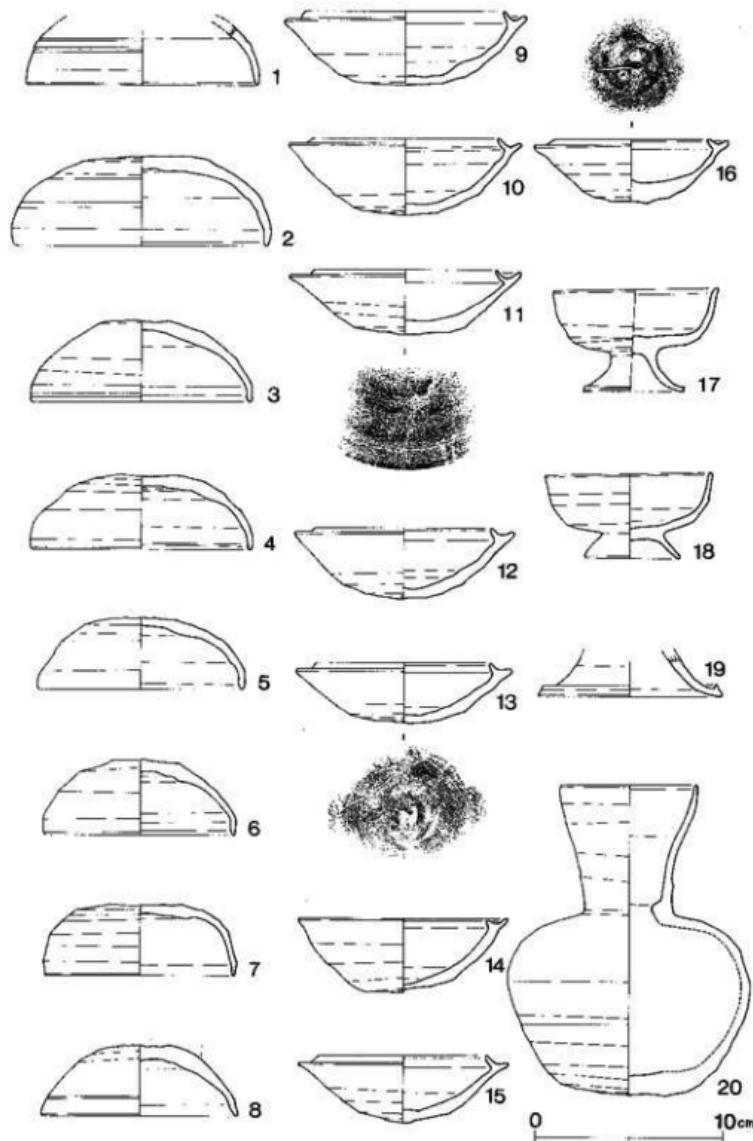
西支群1号(1)、2号(2~4)、3号(5~15)横穴墓出土遺物実測図(13~15は36、他は35)

図版2



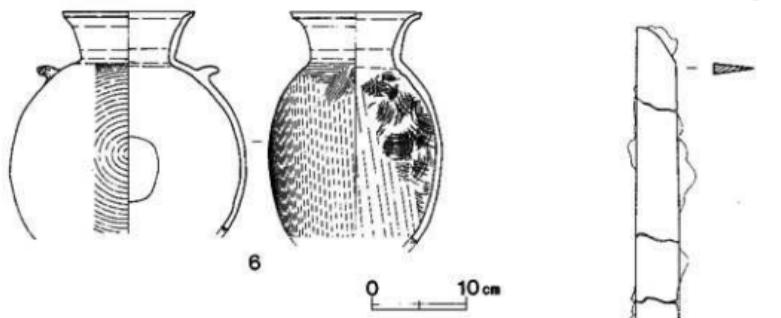
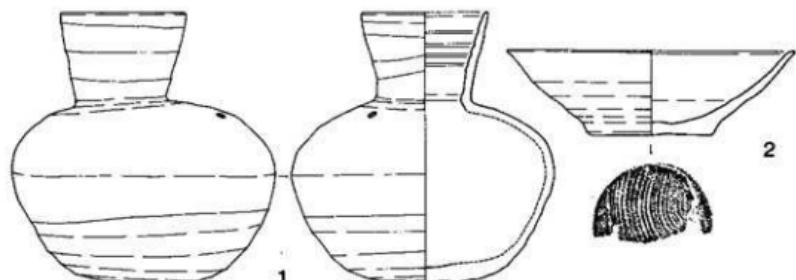
西支群 4号横穴墓出土遺物実測図 (3)

図版3

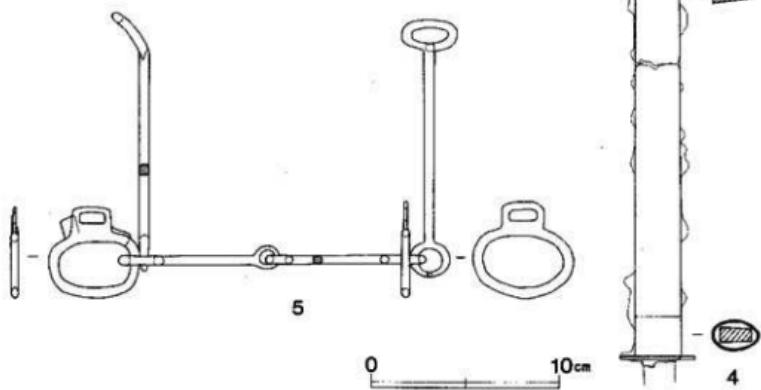


西支群5号横穴墓出土遺物実測図(%)

図版4



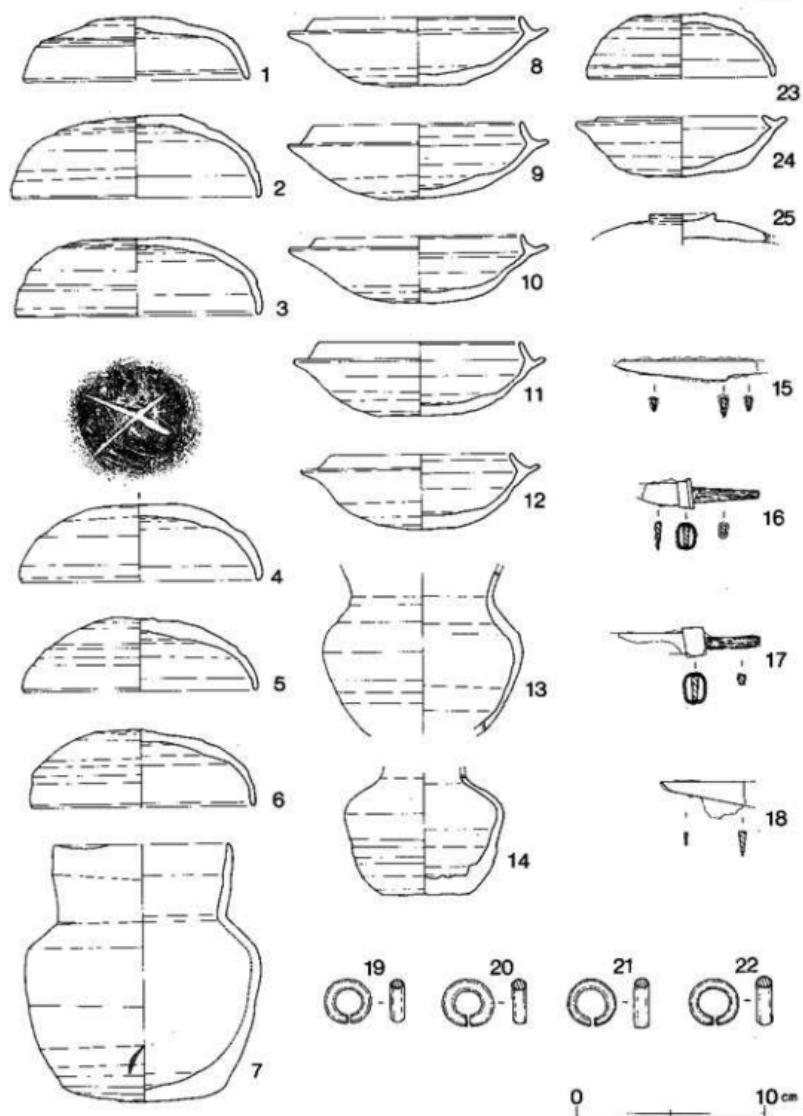
0 10cm



0 10cm

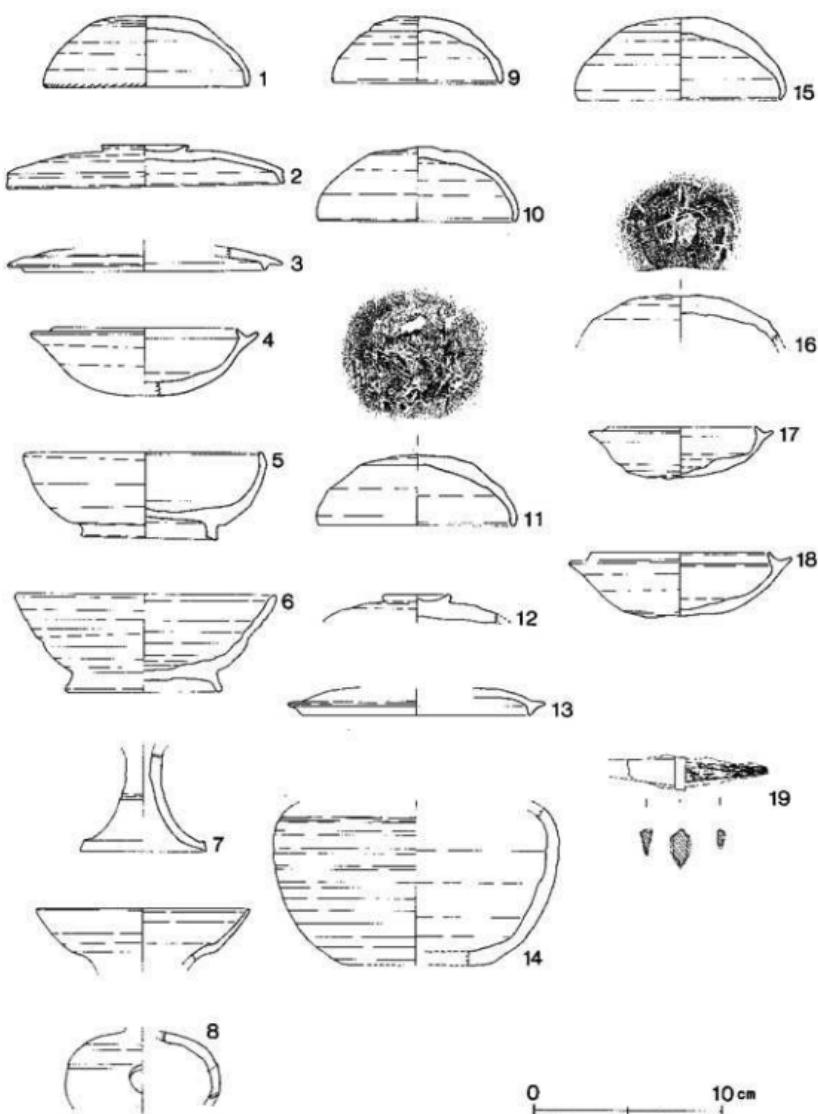
西支群 5号横穴墓出土遺物実測図 (6は%、他は%)

図版5



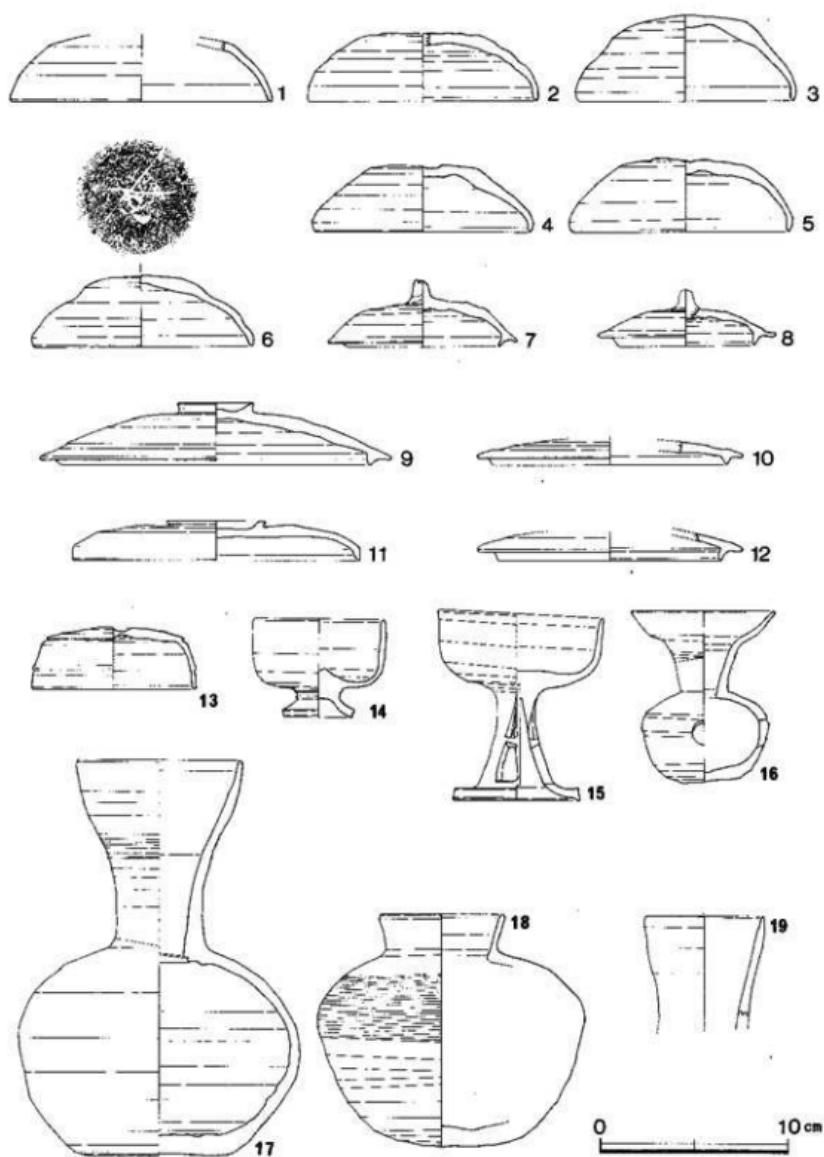
西支群6号(1~22)、7号(23~25)横穴墓出土遺物実測図(3)

図版6



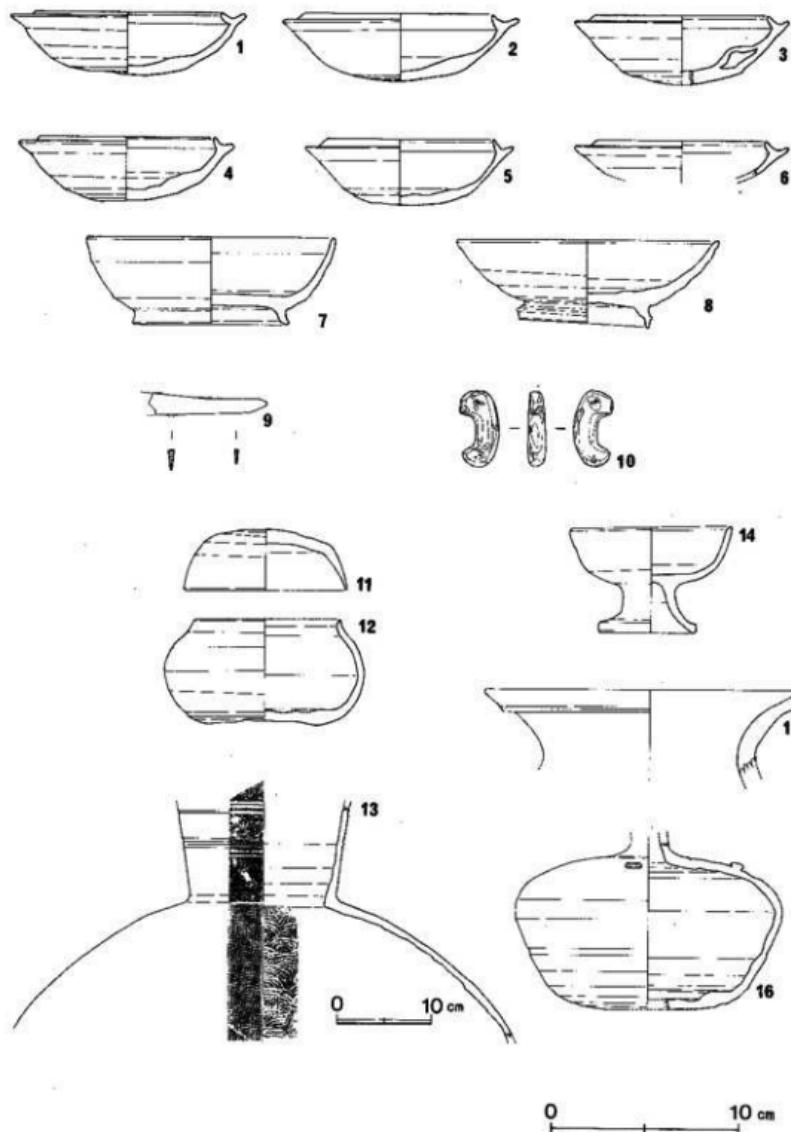
東支群1号(1~8)、2号(9~19)横穴墓出土遺物実測図(3)

図版7

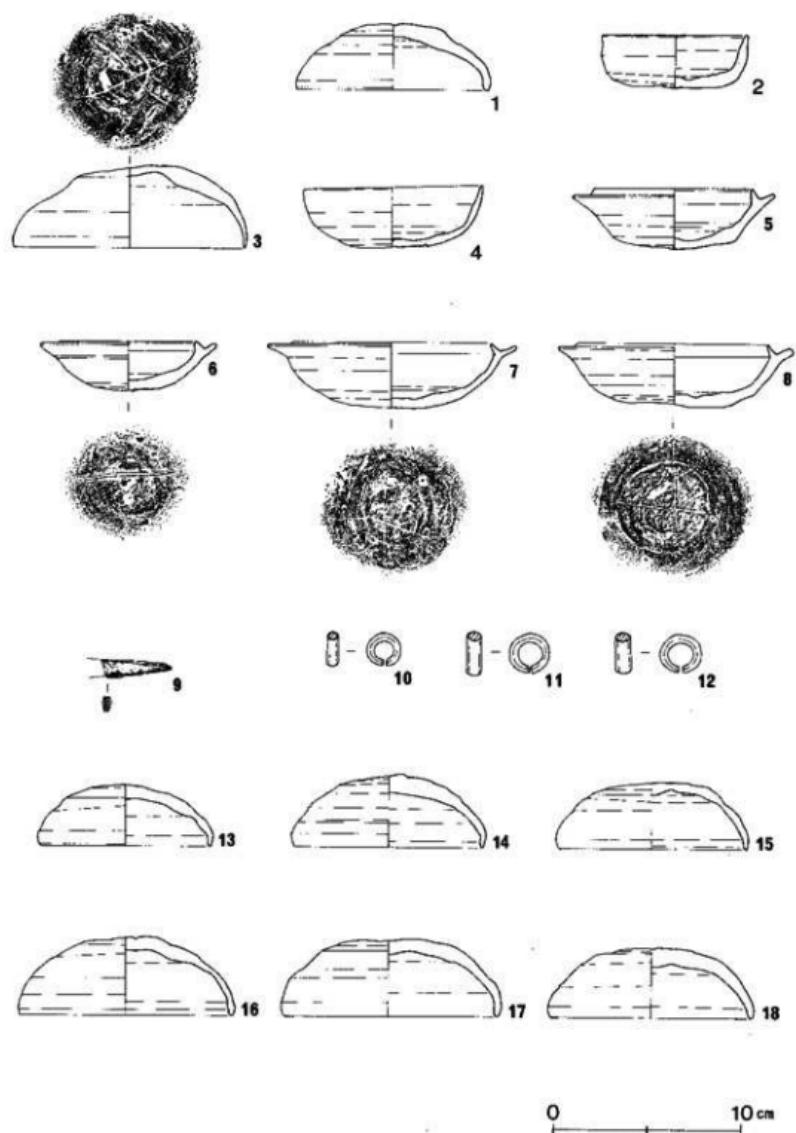


東支群3号横穴墓出土遺物実測図(3)

図版8

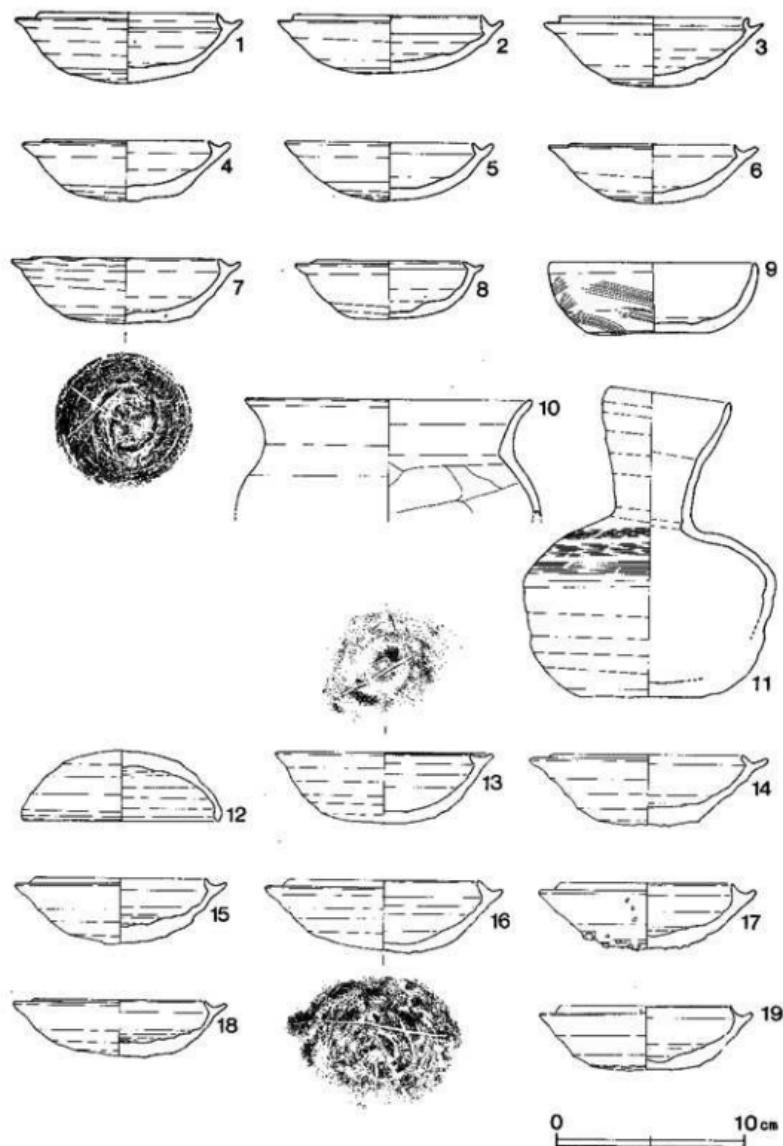


東支群3号(1~10)、4号(11~16)横穴墓出土遺物実測図(13は縦、他は横)



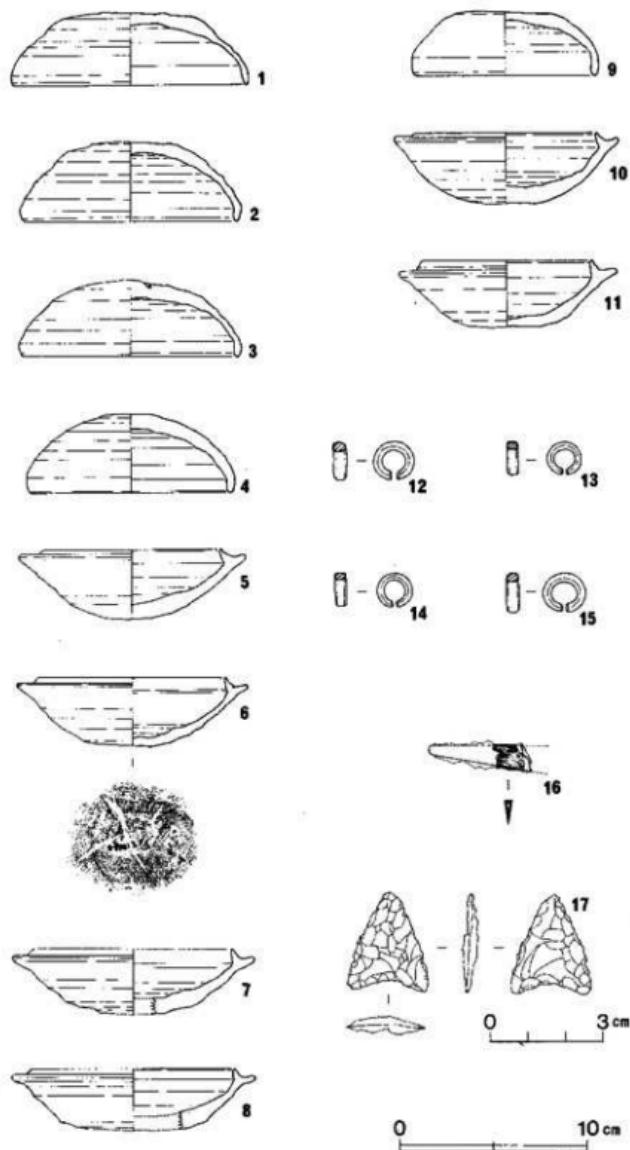
東支群4号(1~12)、5号(13~18)横穴墓出土遺物実測図(3)

図版10

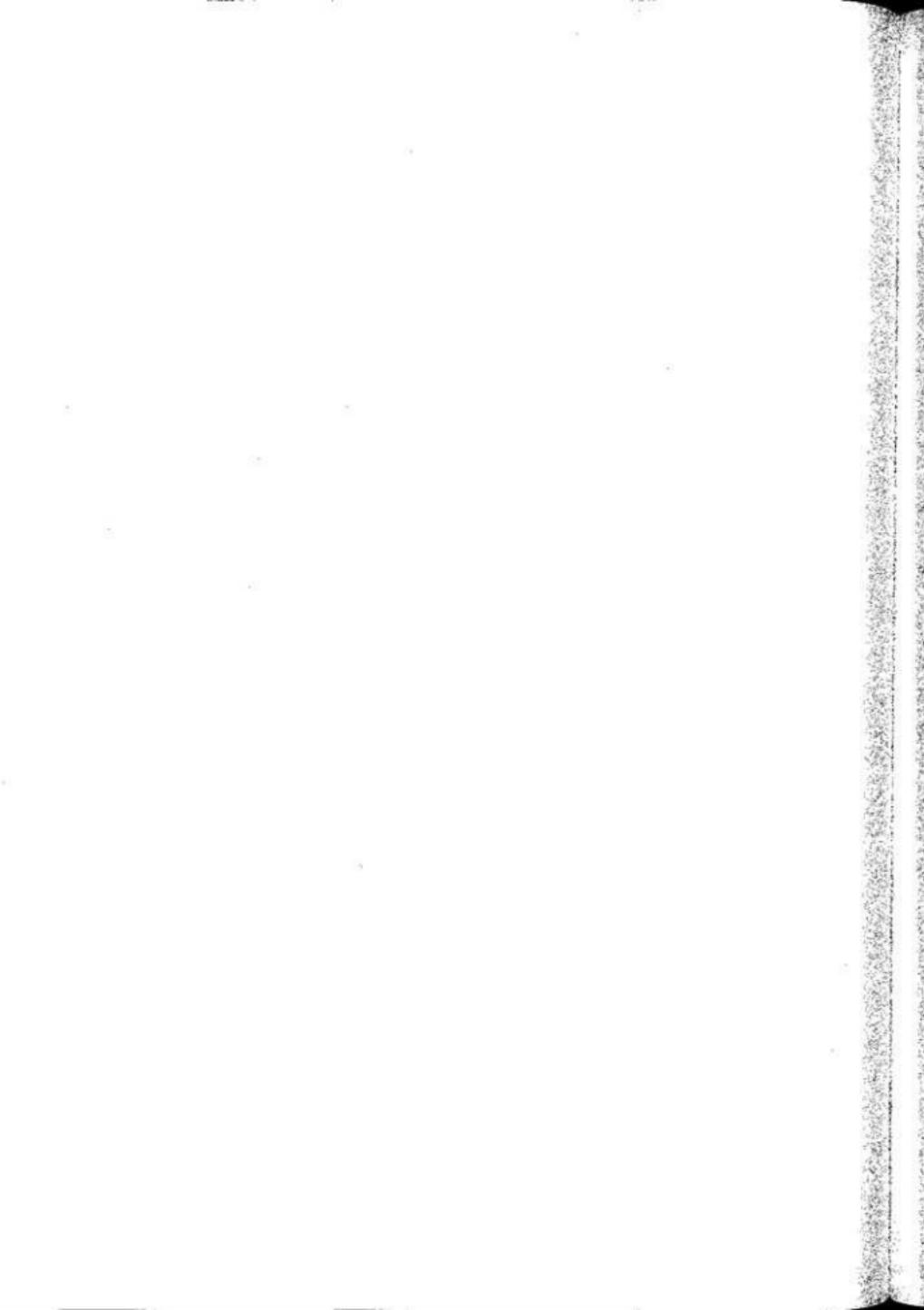


東支群5号(1~11)、8号(12~19)横穴墓出土遺物実測図(1)

図版11



東支群9号(1~8、12~16)、10号(9~11)横穴墓出土遺物実測図  
(17は%、他は%)  
(17)は6号横穴墓下方





平野遺跡群周辺の航空写真 (1 平野西横穴墓群、2 平野東横穴墓群、3-5 高牟庭塚地、6-7 平野圓墳) 南より



平野横穴墓西支群近景

図版13



西支群1号横穴墓羨門閉塞状況(東から)



西支群1号横穴墓前景(東から)



西支群2号横穴墓玄室堆積土層(東から)



西支群2号横穴墓前景(東から)



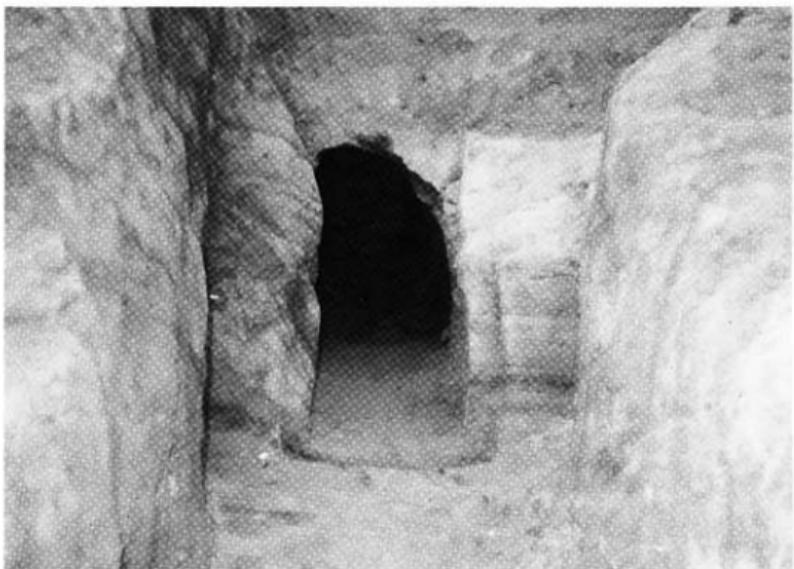
西支群3号横穴墓遺構検出状況(南から)



西支群3号横穴墓前庭部(東から)



西支群4号横穴墓遺構検出状況(東から)



西支群4号横穴墓前景(東から)

図版17



西支群5号横穴墓菱道堆積土層(東から)



西支群5号横穴墓遺物出土状況(玄室南側、東から)



西支群6号横穴墓前庭堆積土層(東から)



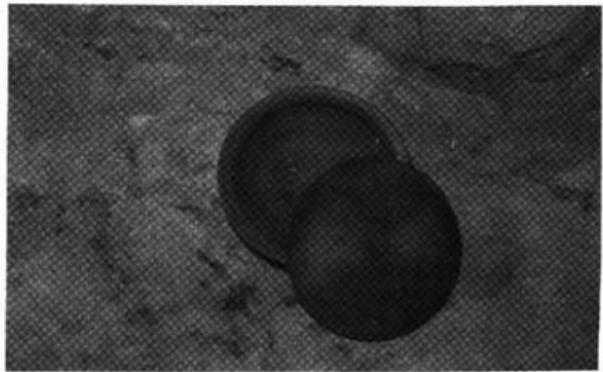
西支群6号横穴墓羨門閉塞状況(東から)



西支群6号横穴墓遺物出土状況（玄室から奥道）



西支群6号横穴墓人骨及び遺物出土状況（玄室奥）



西支群6号横穴墓遺物出土状況（左前壁ぎわ）



西支群7号横穴墓羨門閉塞状況(東から)

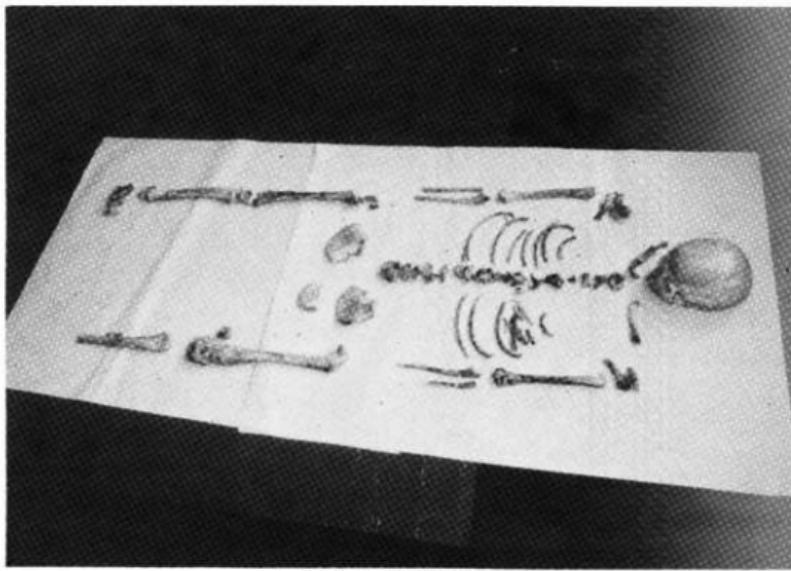


西支群7号横穴墓前景(東から)

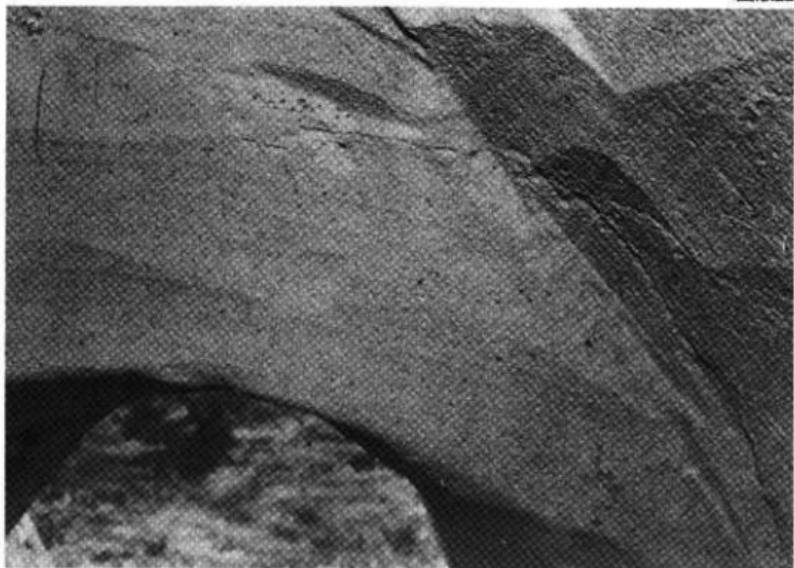
図版21



西支群7号横穴墓人骨出土状況(東から)



西支群7号横穴墓出土人骨



西支群7号横穴墓玄室加工状况(右前)



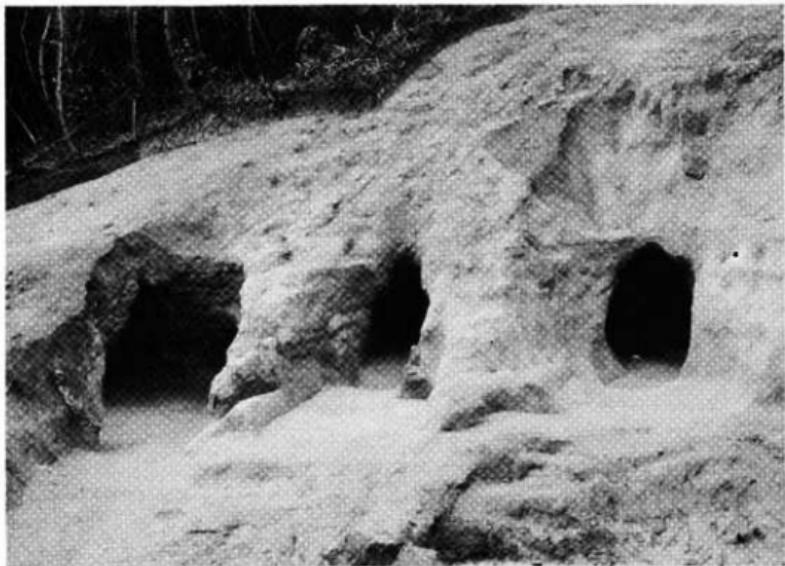
西支群7号横穴墓玄室加工状况(左奥)



平野横穴墓東支群遠景(調査前、西から)



平野横穴墓東支群近景(北西から)



左から東支群1号・2号・3号横穴墓近景(西から)



左から東支群4号・5号・6号横穴墓近景(西から)



左から東支群7号・8号・9号横穴墓近景(西から)



左から東支群10号・11号・12号横穴墓近景(北から)